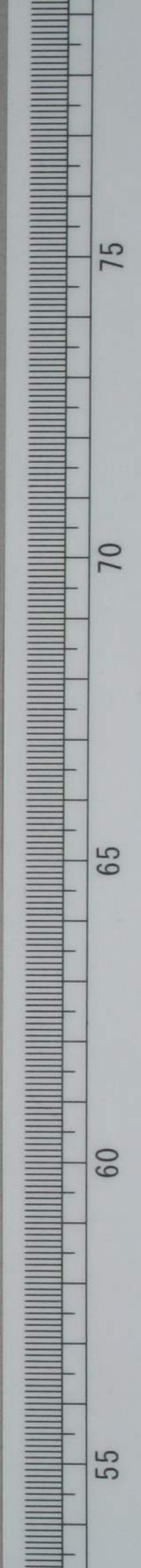


新
春
兩
傘
小
說
伎
客



第二集第五卷

本問文庫
文庫 14
D 278





明治廿九年七月廿三日 遞信省認可



文庫 4
D278
祖



宮内省御用達

第四回内閣勸業博覧會勸業賞
五三會全國品評會一等優賞拜受

貴功
齒磨
ダイヤモンド



謹告

本館に御寄附相成候小段に限り拜見の上、掲載可致相定め候時は、御報酬等の費は御諮詢中上可く候。但し掲載致し難く、御断はり申上候共御原稿は必ず返送可仕候。批評其他の御寄稿は、可成掲載可仕候得共、自然掲載不仕候節は、乍不本意、御原稿弊堂に於て鄭重に保存致置べく、一併御返送の手續も仕候。御原稿の高麗紙下度候。

新小説臨時増刊

第二卷第五目次

脚本
俠客春雨傘

(歌舞伎座四月狂言脚本)
櫻痴居士作

挿書
春雨傘狂言登場俳優寫眞二十三餘名

琴店を製造する
化粧品價格の低廉
廉と品質の優良
を以て其特色を
東京市日本橋区
馬喰町三丁目
常樂化粧品問屋
平尾製菓

金製指環

瀧和亭先生考案畫



野口小嶺先生考案畫

指輪は其人の正札なり。とは千載不動の名言。男女に限らず其指にはめたる指環を見れば、其人の性質、品格のづから現はる事。諸君御承知の通りなり。なまじひ其品位を劣す様な指輪は、寧ろ指さるるが愈ぞかし。強に金の量か重くて、寶石か輝きて、彫刻が奇麗なる計で、品格を上るものに非ず。品格は金にて買ふと思ふは誤なり。假令その價は高からずとも、其意匠や彫刻が優美なれば、何と無く氣高く見えて。

妙技一等賞牌



其人までが奥ゆかしく成ると。是ぞ即ち美術の徳なる。本堂深く此に意を注ぎ、金製指輪の製作に意匠を凝し彫刻に精妙を竭し、内外の時好に魁して、殊に高尚を旨と致すなれば。優美なるは勿論、瀟灑風流の意氣自然に溢れて。是を指せば其品格を進め、其人の性情さこそ見ゆるきつと保證いたすなり。願くは一覽して、本堂が諸君を欺かざる事を知し召せ。謹で白す

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
時計及寶玉類商 (電話番號本局 三百三十三) 天賞堂

- 東京市神田區小川町十九番地 (電話架設中) 天賞堂 出張所
- 大坂市南區心齋橋北詰北二入ル (電話番號七百三十二) 天賞堂 出張所
 - 名古屋市中町通玉屋町二丁目十七番地 天賞堂 出張所
 - 廣島市大手町三丁目六十五番地 天賞堂 出張所
 - 熊本市唐人町通上殿治屋町十番地 天賞堂 出張所
 - 長崎市萬壽町上野屋方 天賞堂 出張所
 - 北海道小樽市内町越中屋方 天賞堂 出張所

春陽堂發行

狂言百種合本

實價壹圓二十錢 遞送料廿錢 紙數千三百頁
 違からんものは音にも聞け近くば寄つて眼にも御見の合本は流るゝ筆の川竹の水は絶えせぬ古河の黙阿彌翁が一世の傑作勸善懲惡視機關は村井長庵の悪巧み兄を殺して娘を賣る極悪無道の行ひも名高き奉行の御捌きに悪は亡びて善業ふ借其次に扣へしは越江戸小腕ながらも達引の五分もすゝめ喜三郎笠森お仙の盗茶には横目で惚れる御客様借御蟲貞の明石島藏松島仙太が勇み肌海老屋のおせんは故人半四郎の書下しなる箱根の鹿笛代つて下巻に移りては屑買善吉北向虎藏善と悪との二筋道其一筋の忠義者が首尾能く描出す三千兩に忽ち榮ふる極楽世界いづれ葛蒲と引きぞわづらふ面白づくめ三人吉川廓初買新血屋敷に月雨兼水天宮利生深川身光お竹坊いづれを見ても面白く飽く事忘るゝ筆の綾はこれ川竹が譽の脚本、値段の安きは驚く斗り試しに買つて御覽下さるゝ謹で申す

聚芳十種合本

實價一圓 遞送料廿錢 紙數千七百頁
 紅葉美妙抱一兩翠名たる作者諸先生が吾劣らト筆を揮ひし聚芳十種此度合本と姿をつくりて皆々様へ御目通りも恥しからぬ衣装つき直段は無闇に安ければ安からう悪からうなら試しに一本を讀み玉へ弊堂が誓つて偽りは申すま

春陽堂

日本橋通四丁目角
 電話本局五十一番

演劇 脚本 侠客春雨傘

緒言

余が侠客春雨傘を稿したるは明治廿六年の冬にして春陽堂の主人これを發兌したり。當時これを脚色して劇場に演せんと望まれしかども障る事ありて筆を下さしに。今茲歌舞伎座にて頻にこれを乞はれつるに由り乃ち其囑に應じて此脚本を作り以て場に登する事とはなしぬ。但し小説の讀本と劇場の脚本とはいたく其趣を異にするを以て彼我の間自から精疎を同くせず。随つて別

様の観をなす所なきにあらず。讀者幸に前後の兩作を比照して高評を垂れ玉へ。

明治三十年四月十一日

櫻痴居士識

此脚本を歌舞伎座の場に演ずるに當り、榎戸賢治、早川七藏、榎本虎彦の三氏は、余を補助して頗る其力を竭せると、余が感謝する所なり。



歌舞伎立作者

福地櫻痴居士



藏美壽川市
衛兵與屋葉松



藏百八川市
部民野天
衛兵庄鐘釣



郎十團川市
雨曉口大



郎五染川市
頁秘野天
郎太金者の意
郎三治屋口大



寅女川市
雲薄城傾後鶴ね娘

支鹿館撮影



中村福助
傾城葛城



澤村源之助
傾城丁山
治左衛門妻松民



市川猿藏
龍田屋清助



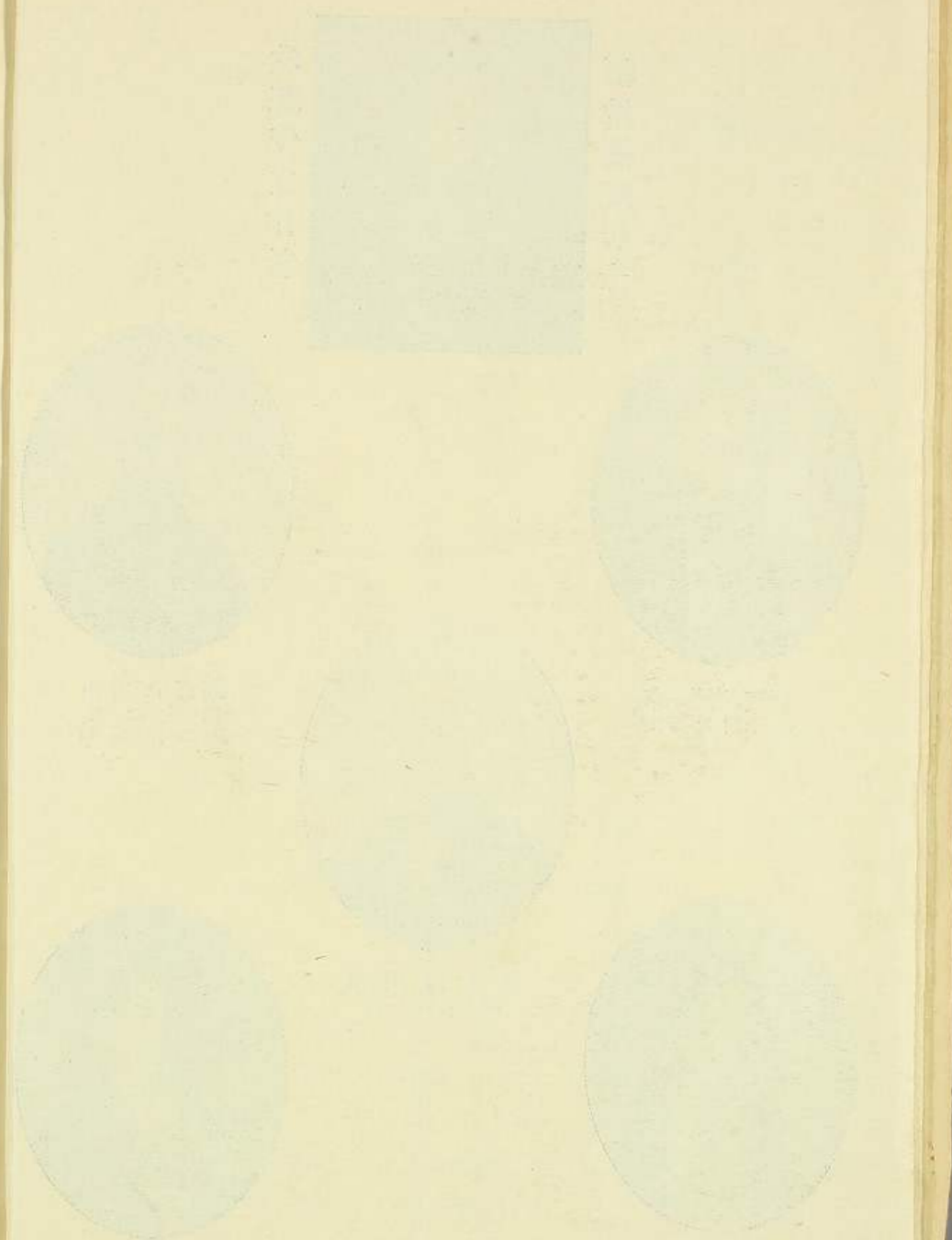
市川宗三郎
撞木權藏
奴黑内



市川團八
藝妓松直
や手松熊



中村太衛郎
村間櫻川善孝
蓋省金兵衛





市川團七
松永金平
龍頭藏太



市川舛代
藝妓松愛



片岡市藏
今西源進
大門口左衛門



市川三壽藏
門弟根岸松兵衛



市川幡谷
門弟入谷丹五郎



市川猿之助
逸見鐵心齋





中村福花
新造豊



市川六郎
突座丸五郎



市川歌仙
泉屋新兵衛
番頭忠右衛門
源進之助



中村三成郎
横川助右衛門
門弟田畑彌九郎



市川幸舛
手代正五郎



市川八百三郎
手代與兵衛
片山又四郎

大改良軍用斧印

紙卷黃廣告

(バトルルアックス) ナイ賣直七錢



(本品は比較的廉價にして其の香味馥郁他に比類なし)
 本品は吾邦需用者の嗜好に應ぜん爲め屢々會社と協議を盡し改良に改良を加へ香味共完全無缺の最良品を供給する運に到り今般着荷仕候間御最寄の煙草店にて御求の上御高評あらんと偏に奉希望候

(ピンヘッド)



(カメオー)



舶來煙草直輸入商

東京新橋

本局電話
九〇五番

江副商店

(文藝俱樂部)

●小說六佳選

正價金拾五錢
郵稅二錢五厘

●青年小說

正價金拾五錢
郵稅二錢五厘

四月一日發行

●夢がたり……二葉亭四迷
 ●薩摩心中……西村天因
 ●開運札……二十三階堂
 ●心づくし……小金井喜美子

文藝俱樂部
臨時增刊

小說八家選

美人七福人

●惡道の善……山田美妙
 ●當世の面……幸田露伴
 ●百鬼行……正直正太夫
 ●戀の蛻……尾崎紅葉

發兌元 東京日本橋區三丁目

(臨時增刊)

●閨秀小說

正價金拾五錢
郵稅二錢五厘

●第二閨秀小說

正價金二拾錢
郵稅三錢五厘

俠客春雨傘目次

○序幕

(一) 大口屋店先狼藉の場

(二) 同 與家督讓の場

○第二幕

(一) 向島喧嘩の場

(二) 松葉屋二階惠金の場

○第三幕

(一) 阿部川町浪宅欺討の場

(二) 松葉屋内證折檻の場

○第四幕

(一) 新小説目次

○ 第五幕

- (一) 新吉原揚屋密談の場
- (二) 同 仲の町出會の場
- (一) 淺艸並木闇討の場
- (二) 同 諏訪町立田屋門口の場
- (三) 同 釣鐘切腹の場

○ 第六幕

- (一) 薄雲店先忍出の場
- (二) 今戸八幡敵討の場

○ 登場重要人名

大^後口屋治兵衛 淺草藏前札差
 大^後口屋曉雨 淺草俠客
 大^後口屋治左衛門 曉雨の父
 大^後口屋清三郎 曉雨の異母弟
 鷹頭金兵衛 大^後口屋の抱
 鷹金太郎 大^後口屋の抱
 天野民部 旗本
 天野靱負 民部の子息
 片山又四郎 天野民部の家來
 齋藤孫市 同
 奴^後黒内 同

市川團十郎
 片岡市藏
 市川染五郎
 中村翫太郎
 市川染五郎
 市川八百藏
 市川染五郎
 市川八百三郎
 市川幸升
 市川宗三郎

松葉屋與兵衛	立田屋清助	突座丸五郎	龍頭龍大	撞木權藏	釣鐘庄兵衛	今西玄之進	田畑彌九郎	根岸松兵衛	入谷丹五郎	逸見鐵心齋	逸見一角
新吉原妓樓亭主	諏訪町料理店主	同子分	同子分	同子分	稻妻組の頭 實は穰多頭衆八	浪人	同	同	鐵心齋の門弟	鶴鶴組の頭	小普請御家人

市川猿之助
市川幡谷
市川三壽藏
中村成三郎
片岡市藏
市川八百藏
市川宗三郎
市川團七
市川升六
市川猿藏
市川壽美藏

女房お節	女房お民	傾城葛城	傾城丁山	傾城薄雲	新造豐花	遺手お熊	此餘旗本、御家人、供男、番頭、手代、下男、丁稚、幫閑、俳諧師、新造、禿、町奴
今西玄之進の妻	大口屋曉雨の繼母 治左衛門の後妻	松葉屋の抱	同	同初メお鶴 今西玄之進の娘	同	同	亭主、町人、子分、小間使、藝者、仲居、茶屋女等

市川壽美藏
澤村源之助
中村福助
澤村源之助
市川女寅
中村福芝
市川團八



新小説 臨時増刊 俠客春雨傘脚本

櫻癡居士

○序幕

(一) 大口屋店先狼藉の場

享保十五年庚戌十月廿三日午後

此は江戸幕府時代、淺草御藏前札差藏宿、大口屋治兵衛店先(本舞臺五間常足の二重)の跡にて、正面には(上手寄り)中仕切を入たる帳場押入ありて。白壁には帳面類を澤山に懸け、其次には(下手寄)一間貳枚の格子障子を建て(出入口)鴨居の上には御藏前札差仲間の議定書を張出てあり。店(二重)の上手は荒格子を一間ばかり附て、其下手は一間ほどの土間を設け。其向ふは米置納屋にて米俵等を積たり。店(二重)の上手には番頭忠

右衛門、次に手代與兵衛、庄五郎（編羽織膝掛）いづれも前に帳面箱を扣へ。丁稚子太郎、丑松（着流膝掛前髪）下手に坐り。土間（平舞臺）には下男寅藏、卯吉（仲衆の拵）にて立掛り、兩人にて米俵の出納を仕て居る

（幕明く）

忠右 オイ子太郎どん。三番のお藏の方は、モウ渡り仕舞に成た時分だが。どう

成たか。力藏どんが附て居るから、聞て來な。

子太 ヘイ畏りました。次手に二番の方も、見て参りませうか？

忠右 ム、二番の方もどんな模様だか、見て來るが宜よ。

子太 宜しう御座います。

ト草履を穿て出掛るを見て

與兵 此忙がしい中で、道草を喰ちやア可ないぜ。

子太 與兵衛さん。大丈夫で御座いますよ。

ト急足にて下手に入る

庄五 忠右衛門さん。アノお徒町の原田様へ上げまするお扶持米は、今の中に持

たせて上ませうか？

忠右 ム、そうだった。早く持たせて上げる様に仕やうぜ。オイ寅藏どん、原田

様、六斗五升は、お役扶持の方だから、神奈川の上米だぜ、並のお扶持米と

間違ちやアいけないよ。

寅藏 宜しう御座います。練堀小路の大久保様へ上げまする三拾俵の次手が御座

いますから、今日一所にお届をいたしませう。

與兵 それから、卯吉どん。お筆筒町の新見様の分は、どう成たぬ？

卯吉 アリヤ、昨日サツかりと納め済に成て、奇麗に方が附ましたよ。

忠右 そうか、そりやア御苦勞だった。

卯吉 どういたしまして。サア寅公、それじやア口分に掛ると仕やうか。

寅藏 ム、そう仕やう。

ト下男の寅藏、卯吉は米俵を納屋の内に運び入る。

此時表（下手）より大口屋の札旦那横川助右衛門（羽織袴大小御家人

の拵）仲間に綱笠を持たせて、店先に來る。是を見て

忠右 入ッしやいまし。どうぞお上り遊ばしまし。

ト一同に會釋すれば。助右衛門は店(二重)に上る。丁稚茶煙草益を出

助右 一昨日は、わざ／＼案内を致しくれて、世話であつた。大層早く落たのウ。

忠右 ヘイ大層お早う御座いました。オイ與兵衛さん、横川様のお目録を出して

與兵 承知いたしました。

ト帳箱の中より、半紙堅紙に書て堅に巻て折たる目録の書付を出して、

忠右 衛門に渡せば。忠右衛門は一寸披見して、助右衛門の前に差出し

助右 (目録を見て) そうさな、持ていかうよ。

忠右 承知仕りました (一寸小切手を書て帳面の間に挿みて) オイ丑松どん (ト

渡せば。丑松は請取て格子障子の中に入る)

此時上手より松永金平 (羊肝色に成たる黒紋附の羽織、大小、着流の貧

乏御家人) 出来り直に店(二重)に上り、横川助右門の側に着座すれば。

與兵 入ッしやいまし。卯吉どん、お茶をお上ケ申しな。

金平 イヤ構はッしやるな。與兵衛、此節は玉落で、忙がしいだらうネ。

與兵 お蔭さまで、忙がしう御座います。

ト店のも一同が都て此松永金平へ對しては、不愛嬌なる取扱ひ。此時

丑松は前に請取たる帳面と、小さき白木の蓋に金を入たるを持って、與よ

り出来りて

丑松 ヘイ忠右衛門さん。金拾三兩貳分ト貳百四拾八文で御座います (忠右衛門

請取て、一寸員數を見て差出し)

忠右 ヘイ金拾三兩貳分ト貳匁三分、お請取を願ひます。恐ながら御印形を(助

右衛門より印形を請取り帳面に押して) 有がたう御座います (ト印形を返す)

助右(助右衛門)は金子を請取て、イヤ大きに世話であつた。
忠右 おそうノ、様で御座います。ユレ丑松どん、お履物を...

ト言附れば丑松助右衛門の雪駄を直す。忠右衛門、庄三郎立て、上り口
まで見送り會釋して、原の如く復座する(但し與兵衛は、松永金平と引
合中ゆゑ送立たず)金平は與兵衛に向つて。

金平 番頭。度々の事で迷惑でもあらうが、實は手前勝手もと甚だ不如意で、老
母は長の頼ひ、家内は産あげくと云ふので、至極の差支へ、附ては此玉落
で引去て宜しいから、唯今壹兩貳分、用立て貰ひ度ね。

與兵 (帳面をくりひろげて) 折角の御談示で御座いまするが、御年賦の口と、お
玉落濟のお證文とで三拾八兩壹分。此冬のお玉と申した所が拾五俵のお取
分、とても振廻しが附ませんに由て、此所はお免を蒙りまする。

金平 そりやア手前も存じて居るが、そこを綜合せて用立てくれるのが、礼差の
働きと申すもの。現在家内が長の頼ひで、老母が産あげく、イヤノ、さう
では無かつた、家内が産あげくであつた。それを一ト通りの談示の様だに断

るとは情なら。キ、番頭どうか工夫を致してくれろ。

ト口説立れば。與兵衛は迷惑さうに算盤をバチノと弾いて居る。

此時大口屋の抱の蔦頭金兵衛(皮羽織蔦の頭の拵にて、下手より)出
來り店先(二重下)の土間に來りて

金太 へイ番頭さん、今日は、
與兵 ヤア金頭か、

ト一寸挨拶する。金兵衛は松永金平の談示を横目に見て、土間の米俵の
上に腰を掛け店先の張番を仕て居る。與兵衛は、一寸庄五郎に相談して
それじやア出来ません所を、私共が兩人で無理に工夫を致しまして、此お
玉落をあてに、金三分ほど、御用立てませうが...

金平 たツた三分か?
與兵 たツた三分かど仰しやいまして、お借財が此通り、三十俵のお高で百貳
拾五兩、其内でお玉落で頂かねば成ません分が、三拾八兩貳分と云ふ御大

借、...

與兵 借、...

金平 分ッてるよ、手前の借財は、手前よく存じて居るよ。そこで、どうあつても金三分の御用立か。エ、よろしい、然らば三分借用いたして参らう。
ト印形を出せば。與兵衛は、前の手續にて小切手を帳面に挟み、丑松へ渡す。丑松與へ入る。與兵衛は證書に金高を書入れ、松永金平の印を押

ながら。
與平 松永様。この三分は、きッとお玉落の節に戴きますから、其時に成て、御

異存は可ませんよ。

金平 宜よ、決して異存は云はないよ。三拾俵の小普請でも松永金平だ、安心して居るが宜よ。

此時丑松は、前の如く金三分を持って来る。與兵衛は改めて金平に渡し

與兵 金三分、儘に御用立まする。

金平 (金を懐中に入れて) イヤ大きにお世話であつた。

與兵 御機嫌よろしう。丑松どんお履物を...

皆々 御免を装ります。

三人とも一禮したる切にて、見送に立たず。丑松は不せう／＼に金平の駒下駄を直す。金平は元來し方(上手)に入る。
金兵 (跡を見送て) エ、與兵衛さん。貧乏御家人のくせに、乙ウ見識ばつて居るじやア、ござえませんか。

與兵 そうさ。あ、云ふのが、藏宿の虫と云ふんだな。

庄五 それでも、此大口屋のお店は札旦那がみんな身分の宜いお方ばかりで、屑

が少ないから樂だが、外のお店を見ぬエ、此節じやア、毎日々々小普請の

虫が、そろ／＼と節掛て、無理口説を仕て居るが、堪つたものじやア無い

よ。

金兵 そうでニすか子。何商賣にも煩エがござえますが、小普請の貧乏御家人は

藏宿の煩エで、今の松永とか云つた奴なんか、お店の厄病神とでも云ふ

のでござえませうよ。

思右 どうして、松永さんなんざア上の口だ。此大口屋の札旦那で、逸見一

角さんと云ふのがあるが、高が百俵で、親御の代からの小普請、勤衛は隨

分甘いと云ふ評判だが、酒ッくらいで博奕が好で、町奴交際を仕て、それ

はく困ッた人よ。

金兵 へエさうでエすか。そんな旦那は、斷る理にやア参りませんかね？

忠右 所が代々の札旦那で、どつさり貸込であるから、今更斷る理にやアいかな

いよ。

丑松 (向ふを見て) オヤ、噂をすりやア影がさす。番頭さん、見附の方から、逸

見の厄病神が、ヤッて来ましたぜ。

忠右 ム、成ほど、ありやア逸見さんだ。此忙がしい中で、困らせるぜ。オイ庄

五郎さん、今日はおまへ引受て下さつせエ。

庄五 どうして。私にやア手ごツちにおへませんから、與兵衛さんが宜しう

御座いませう。

與兵 わたしやア、たツた今松永さんで困つたばかりだ、おまへさん今度ア引受

るが宜よ。

忠右 そうともく。マア庄五郎さん、先陣に向ッて見なせエ、それでいかなけ

りやア、私が二陣に出るからね。

此時向ふ (揚幕) より逸見一角 (黒羽織、長大小、着流の御家人) 出来

り直に店 (二重) に上れば

忠右 へイ逸見さま、

皆々 入ッしやいまし、

一角 どうだ番頭。十月の小三月で、好天氣だのウ。時に番頭、逸見一角、はた

と暮し向に差支たに由て、此お切米を引當に、當金貳拾兩用立てくれい。

忠右 へイ、左様で御座いますか。オイ庄五郎さん、逸見様の御談示を、よく伺

ッておくんなせエ。

庄五 承知しました。

縫々と帳面を繰返し、算盤を弾いて居る。一角は是を見て

一角 オイ若番頭、何をぐづぐづ仕て居るのだ、算盤を弾いて見ずと、分りきつ

て居るじや無いか。僅か貳拾兩の談示だ、さつくと用立ッやうに、致す

が宜ヲ。

庄五 恐ながら、お高が百俵の所に、御借御當座とで、べて貳百八拾七兩に相成て、一杯の上を、餘ッぽと越て御座いますから、……

一角 用立ッ事は出来ぬと申すか？

庄五 お氣の毒で御座いますが、何分にも出来ませんで御座います。

一角 なせ出来ぬのだ。百俵の持高で、三百や四百の借財は當然だ。それども百兩とか五拾兩とか申したら、斷るのも少しは聞えて居るけれど、高が貳拾や三拾のはした金、院號な事を申さずと、奇麗に用立てくれい。

庄五 何分行届ませんに依て、御免を蒙ります。

一角 (わざと立腹の躰を見せて) エ、理の分らねエ小僧じやア無いか。假初にも御直參の逸見一角が、自分で當家へ罷越し、折入て申入るゝのに、澄した面を仕て、行届ませんとは、何の事だ？ オイ大番頭。アノ青二才じやア相手にならぬ、貴様引受て貳拾兩、唯今用立やうに取計らへ。

ト大聲にて云へば。忠右衛門は、落付顔にて、帳面を庄五郎より取て、一覽して。

忠右 逸見様、甚だ忍入まするが、此お借財高では、唯今庄五郎より申上ました

一角 ナニ手前までが御免を蒙ると云ふのだなア。キツと貳拾兩、用立ッ事は出来ぬと申すか？

忠右 ヘイ何分にも行届ませんに由て、御免を蒙ります。

一角 行届かぬと云ふのは、金があつても貸す事は出来ぬと云ふのだなア。よいッ。其方共では相手に成らぬ。當家の主人、大口屋治兵衛に面會いたして、直談示を致す。治兵衛に是へ參れと申せ。

忠右 主人治兵衛は、御面會をお斷り申上ります。

一角 何だ？ 主人治兵衛は、御面會をお斷り申上りますと、まかど左様申したな。コレよく聞け、此逸見一角は親代々の礼旦那で、大口屋治兵衛は、

此方より札差米を貰ひ、用達を相勤むる出入町人、おれが家來を差向ても、治兵衛は直に面會いたし、何の御用で御座りますかと、聞かねば成らぬ身分のもの、夫に何ぞや、面會を斷るなどは不届至極、金のあるのを笠

に着て、公儀のお旗本御家人を、ないがしろに致す不埒もの、其趣を此足
で直に會所へ断つて、御目付衆へ申立る。其時に相成て、おたばた致して
後悔するな。

ト大聲に罵り、烟草盆を蹴散して、立に掛る。土間に扣へて黙て見て
居たる金兵衛は、忠右衛門はじめ一同が迷惑を察して

金太

ア、申し旦那さま。當家の主人は、唯今佛參にめエりまして、留守でござ
えますから、番頭衆が断を申したので、何も家に居て、お目に掛らぬエ
と云ふのじやアござえません。それを彼是と仰しやるなア、お前エさんも、
少し分らぬエじやアござえませんか。

一角

ト喧嘩を買はうと云ふ息込にて云へば。一角も少し考へて
ム、そうか、治兵衛は留守だと云ふのか。それならそうと早く申せば宜に。
併し遠路の所を、出直して参るのも面倒だ。治兵衛が歸宅を待受て、面談
いたすと仕やう(どつかど坐して大あぐらをかき烟草を吸て居る)
お待なさると仰しやつても、いつ歸りますやら時刻も知れず、

愚右

與兵

治兵衛が歸つて御面談をいたしても、とてもあなたの御談事は、
行届かぬ儀で御座いますれば、先づ今日は此儘で、

與兵

お引取を、

一角

願ひます。(ト返さうとする)

一角

エ、喧ましいわい。其方共に用事は無い(蹴散したる烟草盆を取て)どり
や治兵衛が歸りを、一寝入して待受やうか。やつどこ取ちやアうんどこな

一角

ト枕にして、店先に大の字形に成て寐る。是を見て、金兵衛が立掛るを、
忠右衛門手附にて止る。庄五郎は奥に入る。一角は振向て

一角

治兵衛はまだ歸つて來をらぬか。餘り遅いどあるならば、案内いたせ。治
兵衛が居間に罷越し、巨燵には入て休息いたすぞ。

一角

ト枕にしたる烟草盆を忠右衛門に擲付て、立上る。此時格子障子の中に
て聲あつて

一角

アイヤお越には及びません、大口屋治兵衛、それへ参つて御面會を致しま
せう。

一角

治兵衛

一角

治兵衛

一角

治兵衛

忠右
アノお聲は、
皆々 旦那様、

是にて一角原の座に復る、大口屋治兵衛(編の羽織着流、藏前の町人風)
障子を明て出来り、下手に着座して兩手を支へ

治兵衛 私が大口屋治兵衛に御座ります。あなた様が、逸見一角様であらッしや
いますか。無調法もの、何ぞぞ御見知置を願ひます

ト慇懃に挨拶をすれば

一角 ム、貴様が治兵衛か、初めて逢ひ申した。先程より手代どもへ申談じた金
談一條、貴様宜く取計つて、貳拾兩の金子、唯々用立やうに致してくれい
ト横柄に云へば。治兵衛考へて

治兵衛 あなた様の御勘定あひ、いかゞ相成て御座りますか、一應取調べまして
(忠右衛門が差出たる帳面を見て) 逸見様、御覽の通りの御勘定で御座り
ますれば、此上の御用立金は、ひたすら御免を蒙ります。

一角 (刀を引よせて居合腰になりて) ナンダ。貴様までが御免を蒙ると。コレ治
兵衛、よッく聞け。其方は數代此方の札差を勤めながら、現在此方の難儀
をも差構はず、札旦那の御家人をば、見すく路頭に迷はせて、相濟もの
と心得居るか？

ト詰掛れど。治兵衛は落付て

治兵衛 是は仕たり逸見様、失禮ながら、お詞ども存じませぬ。多分番頭等より申
上たで御座りませうが、御借借と御新借の口々を、悉皆勘定いたしましたれ
ば、此節の様に相場の低い砌では、當冬のお玉落を、残らず頂戴いたして
も、此通り、お利息にも引足りませぬ(と傍の算盤を取て、自分で彈て見
せて) 左様致しまする時には、恐乍ら日々の御飯米、的面に差支と存
じますゆゑ、お借財の元金は、此通り残らず置する、御飯米に差出しまし
たる餘分をば、聊かづ、御利息の方へ戴いて、御勘辨を仕つて居ります
は、憚ながら、あなた様へ對して、此治兵衛が格別の御奉公、是が即ち、
あなた様を路頭に迷はせ申ませぬ體な證據。なんと、左様では御座りませ

一角

ぬか?

治兵 それを只今御談示に任せ、此上の御用立金を致しまして、御飯米まで差引ましては、第一、御藏前札差仲間の議定に外れ、随ッて藏宿渡世も相立ませぬ。それでも達てと仰せられては、聊か御無昧の様に相聞えまする。
一角 ナニ無昧だと、何が無昧だ? あれ、喉青い小二才の分際で、理屈らしく申立て、おれに耻辱を與へおつたな。

治左 逸見様、私は大口屋治左衛門で御座りまする、悴の無調法、何とぞ御勘辨を願ひまする。御用立金は、恐ながら私が仕りまする。
ト云ひながら、前なる算盤を取て立上り、治兵衛の眉間を撃つ。眉間より血流る。治兵衛は其算盤を引たくッて、持て立上る。一角も刀の柄に手を掛る。土間の金兵衛、天秤棒をもち。寅藏、卯吉棒を持て立掛るを、忠右衛門、與兵衛制する。此時障子の内より、大口屋治左衛門(羽織着流)庄五郎を随へて急ぎ出來り、兩人の間に割て入り
細着流)庄五郎を随へて急ぎ出來り、兩人の間に割て入り

一角

ト懐中より金子の包を出せば。一角は請取て
以後をきツと謹みをれ。
ト嘲弄して立上り、土間(平舞臺)に下る。治兵衛は猶も怒りに堪兼て立掛るを、治左衛門止め。金兵衛等を與兵衛、庄五郎制する。忠右衛門は一角を見送る

治兵

餘りと云へば、
ナント申す。
治兵衛氣を入替て居はり、手を突て
逸見様、御機嫌よろしく(と云ふを木掛にて)入らつしやいまし(と無念を忍ひたり。(此道具廻ル)

(二) 同 家督讓の場 同日の事

此は大口屋隠居奥座敷(本舞臺一面の平舞臺)にて、正面上手寄り九尺の

床の間には三幅對の懸物を掛け、花入には紅葉と寒菊を挿け、床續き地板の違棚には、料紙硯箱など置き、其次二間の所は、四枚建の襖(出入)鼠地に金にて雀形の唐紙、上下とも例の所に同じ唐紙二枚建(出入)其他は都て鴨居の上下共、根岸の塗壁、一枚半の腰張り。尤も上手よき所に下地窓。下手よき所に中窓を附け置く。舞臺には紺縁の海縁を敷き。上手には座蒲團、手あぶり、烟草盆、火鉢、茶道具菓子器等を置き、主人着座の用意。但し此外に客設の火鉢煙草盆二ツばかり置きたり。

此に隠居治左衛門の女房(即ち治兵衛の御母)お民(ふけたる女房の拵)治左衛門の次男清三郎(治兵衛の御弟)の(綿羽織着流息子の拵)にて火鉢の傍に居り。小間使おのぶ(島田の女中)其側にて煙草盆の火をいけて居る(道具留る)

お民 おのぶや。もう大旦那が、お奥へ入ッしやる時分だから、お前、お煙草盆の火をいけたら、此土瓶をわけて置なよ、それから御酒の支度は出来て居るか、臺所へ往て開て来なよ。

おのぶ ハイ、畏りました。(火入を煙草盆に入れ、茶盆を持って下手には入る)

お民 (耳を敏て)「チー清三郎。お店の方が、先ッきにから騒がしい様だが、何か間違でも出来たのじやアあるまいかねエ？」

清三 そうで御座いますチ、此節は玉時分で御座いますから、随分礼旦那には、無理な掛合を持たンで、店のものを困らせるお方が御座いますよ。何なら私が一寸お店へ往て、見て参りませうか(と立掛る)

お民 止よ。今におのぶを仲の間まで見せにやるから。何に親子兄弟の中でも、今じやア兄さんの治兵衛さんが御當主で、お父ッ様は御隠居のお身分、仲の間へ出て入らつしやるのは、兄さんのお手傳をなさるだけ、それにお前が、用も無いのに顔出しをしちやア、兄さんへ對して私までが宜ないよ。

清三 大きにそれで御座います。夫だから、私しもお店の事に限ッちやア、お兄様のお指圖の無い中は、けして手出しを仕ない事に致して居りますよ。

お民 それが宜よ。兄さんが私をばおッ母さまくど、あの通り大事に仕てくれ、お前を一ッ腹から出た兄弟の様に可愛がつて下さるから、お前も亦その養理で、遠慮がちに仕て居ないじやア、可ませんよ。

清三 ありがたう御座います。私も常から其氣で居りまするが、お父さんの御留守の時に成ると、お兄様が金藏の鍵も、奥帳場の鍵も私に渡して、お金の出入を任せておさせなされるにやア、困りますよ。

お民 サア、夫だから猶更扣へ目に仕ないど、世間で彼是と言はれますよ。

清三 そりやア仰ッしやる迄も無く、次男は奉公人同様の積りで、言辭も其通りに仕て居まするのに、一昨日も店の忠右衛門が私しに、清さま、あなたかうくと申して居たのを、お兄様が聞なすって、大勢の中で顔色を變て「番頭始め店の者が、なぜ清三郎の事を若旦那と云はないのだ。たどひお爺さまの言附でも、當主のあれが常々言渡して置たのに、それを用ひぬとは、怪からぬ事だ。以來とも清三郎の名を云ふと承知しないぞ。おれは皆が知ッての通り、女嫌ひで女房は無し、子供は無し、此家督も終には清三郎の者だ。清三郎も其積で、おれ同様に、番頭手代はじめ呼捨に仕て、若旦那らしく仕なけりやア可なからうぜ」と酷い見脈のお小言で、私も困り切りました。

お民 ト治兵衛の口氣を以て話せば

「そうかい。そうして見ると兄さんが、『私は女嫌ひだから、女房を持たずるのは、何と仰しやつても、御免を蒙ります』と、あの孝行な人が、縁談の話に成ると、お父さんの云ふ事を聞かつしやらぬは、私への義理立て、お前を家督にする下心であるかも知れぬが、それじやア、私とお前が濟まないぬ。」

清三 私だつて、義理にもそうは出来ませんよ。

ト母子が談して居る所に、大口屋治左衛門(下手より) 出来りて、黙然として着座する。

お民、清三郎は會釋して

清三 お父さま、今日は大層お引けがお遅う御座いました。

お民 それに、お店の方が、今しがた、大層騒がしう御座いました。

清三 何か間違でも出来たのでは無いかと、お母さまも氣を揉でお居なさいました。

此前に小間使のふは、茶道具を持って（下手より）出て来りて、程よ

き所に居る。ナ、別に間違も無かつたが。……オイのぶや、お茶をくれい。……ア

治兵衛はわづか一年の内に、大層勘辨強く成たよ、あれじゃア、あれが

居なくつても、大口屋の身代は大丈夫だ。お民、そりやア、どういふ譯で御座いますねエ？

治左、今にわかるよ。コリヤ清三郎、貴様も兄貴を見習つて、堪忍が第一だぞ。

他家へ養子にいつても、兄貴のお蔭で分家をさせて貰つても、勘辨強くな

らなけりやア、宜町人にやアなれないぜ。有かたう存じます。是からしては猶以て、お兄さまの御勘辨強いのを、

見習ひますので御座りませう。此時治兵衛（前場の拵）肩間に血汐のじみたる痕を見せて（下手より）

出来れば、お民、治兵衛さん、お出なさいまし。

清三、お兄さま、お出なさいまし。

お挨拶すれば、治兵衛は會釋して座に着き、治左衛門に對ひて

お父ッさま、唯今は御心配を掛まして、相濟ませぬ、御蔭を持ちまして穩

かに事濟み、有がたう存じます。お前もあの亂暴に逢て、さぞ腹も立たらうが、よく辛抱した、よく勘辨し

た。我子ながら實に感心した、今も其嚙を仕て、清三郎に教訓をして居た

所だつたよ。どう致しまして。夫ど申しまするも、全くはお父ッさまが、おいでなすッ

て下すつたからで御座います。ト禮を述ぶる。お民と清三郎は、治兵衛が肩間の疵、および羽織の袖に

血痕のじみたるを見て、打驚きて、おヤお兄さま、あなたの額はどうなすつたので御座います？

お民、そう云へば、肩間の疵、羽織の血痕、それが今いつた勘辨強い治兵衛の辛抱、併しお前、額が痛むだらうが、早

清三、お兄さま、お出なさいまし。

お挨拶すれば、治兵衛は會釋して座に着き、治左衛門に對ひて

お父ッさま、唯今は御心配を掛まして、相濟ませぬ、御蔭を持ちまして穩

かに事濟み、有がたう存じます。お前もあの亂暴に逢て、さぞ腹も立たらうが、よく辛抱した、よく勘辨し

た。我子ながら實に感心した、今も其嚙を仕て、清三郎に教訓をして居た

所だつたよ。どう致しまして。夫ど申しまするも、全くはお父ッさまが、おいでなすッ

て下すつたからで御座います。ト禮を述ぶる。お民と清三郎は、治兵衛が肩間の疵、および羽織の袖に

血痕のじみたるを見て、打驚きて、おヤお兄さま、あなたの額はどうなすつたので御座います？

お民、そう云へば、肩間の疵、羽織の血痕、それが今いつた勘辨強い治兵衛の辛抱、併しお前、額が痛むだらうが、早

く薬を附たが宜せ。薬を附ける程でも御座りませぬ。

お民 一昧どうしたので御座いますねえ。

治兵 サア其譯と云ふのは、今店へ来た逸見さまが...

治左 ト話し掛るを冠せて...

治兵 そのお話は、ゆるりと跡で私から致しませうが。時に父ッ様、改めて一

ツのお願、何ソと、御聞入なすつては下さいませぬか？

治左 ハテ改めて願ひと云ふのは？

治兵 別儀でも御座りませぬが、私は今日限り隠居いたして、此大口屋の家督を

ば、此に居ます弟の清三郎へ譲り度御座ります。

治左 エ、何じや？ 清三郎に家督を譲つて、隠居し度と云はつしやるか？ そり

や成らぬ、成ませぬ。

治兵 では御座りませうが、どうあつても御承知を願ひます。と思ひ切たる臆

にて云へば...

治左 (思入あつて) ム、扱は、余が此間だ、お民と二人で、清三郎に別家させ度

と、相談して居たのを聞いて、余への面當に、そんな難題を云ふのだな？

お民 ト立腹するを。お民は側にて取なして...

ア、申し、そんな事を、あなた仰ッしやつて... 治兵衛さんに限つては、

何であなたに、面當がましい事を云はれませう。是には外に仔細のある事。

これ申し治兵衛さん、お前さんは、此清三郎に義理立して、家督譲を仕度

と仰しやつても、第一お父ッ様が御承知にも成らず、又私が目の黒い中は、

どんな事があつても、清三郎に其様な不義理な事はさせぬに由て、どうぞ、

そんな事を言はないで下さりませ (と眞實を見せて云へば)

治兵 (涙を流して) お父ッ様、お母様、親身の親子兄弟中で、何の面當だの、

義理立たの云ふ事が御座りませう。一昨年三月、此大口屋の身代を譲

られて、當主に成て足掛ケ三年、札差家業がつくく否に成て、モウ迎も

堪へ切れ無いからで御座います。

治左 何と云はッしやる？

治兵

お父ッ様、よくお聞下さいまし。總別大家や金持になり度と、我人共に望むのは何の爲、人にも立られ、世間に肩身を廣く仕度と思ふからで御座りませう。夫が出来ぬ曉には、大口屋治兵衛が、三十萬兩の身代は思か、三百萬兩が三千萬兩の大分限ても、一文無しの貧乏人ど、少しも變り御座りませぬ。今も今とて、おッ母様がお尋なされた肩間の疵、悪小普請の逸見一角、無理強談の押付掛合、店の者の迷惑を見兼まして面會いたし、用立金を断わつたれば、亂暴無頼の一角が、算盤おつ取り打たる手疵、先は御家人札旦那、こちらは町人札差と云ふ悲しさに、手向ひならざる其上に、疵を受ての誤り閉口、内濟金を此方から出して、やつと濟ませた意くぢなさ。今日と云ふ今日、我身で我身に、愛想が盡て御座りまする。

お民

併し、そこを我慢いたしたが、天ばれ辛抱、この身代を大切じやと思ふから。併し、そこを我慢いたしたが、天ばれ辛抱、この身代を大切じやと思ふから。

治左

サア其身代大切も、お父ッ様に、御苦勞を掛けまいと思つた故。持たが病

の聞かぬ氣は、水道の水を飲んだが因果、百萬石の加賀様でも、天秤棒を肩にしたぼていふりでも、五分と五分で往來を威ばつてあるくが江戸の花、その真中で育つた治兵衛、いつ何時間違つて、堪忍袋の緒が切れて、暖簾に疵が附かうも知れぬ。お蔵手代や輕御家人、逢ふ人毎に頭を下げ、其お蔭で商賣するのは、清三郎見た様な、おとなしい人物に限りませぬ。ヤに由て、家業に不向な私は、一日も早く隠居して、てつきり適當つた清三郎、それに譲るが家の爲、御先祖様へも孝行と申すものでは御座りませんか？

清三

そう仰ッしやつても私には、此大口屋の御家督は……

治兵

相續が出来ぬと云ふのか？ム、それじやア、明日にも此兄が死だ後でも、家督を續がず、他人を養子にさせる積りか？

清三

サアそれは？

治兵

それ見い、そんな不孝な奴が、どこにあるものか。マア黙ッて居て、余がする通りに任かせて置なせエ。そこでお父ッ様、私が此通り、札差家業に

愛想が盡きて、隠居が任度と云ひます上は、思ひ止まる私でも御座りませぬ。又私が當主では、此大口屋の繁昌は、覺束なう御座りますれば、清三郎へ家督譲り、どうぞ御承知を願ひまする。

ト精神ももてに顯はれて望みければ。治左衛門は、腕を又き、暫し黙然として考たりけるが、稍あつて膝を打ち

治左 ム、宜しい、承知た。何にもお前の望み通り、此大口屋はお前の身代、弟へなり誰へなり、譲つて隠居を致すとも、心の儘にするがよからう。

治兵 それじやア、私のお願ひ、御承知なすつて下さりまするとな。エ、有がたう御座りまする。

お長 エ、それじやアあなたは、治兵衛様の若隠居を

治左 オ、望み通り、させてやる。

清三 そりやア又どうした理で？ 別は理どて無いけれど、俵の治兵衛は、子供の時から、負るが嫌ひの江戸ッ子氣性、幼少からして武藝ずき、堀内源太左衛門殿の弟子になり、皆傳

免許の劍術遣ひ、任つた事なら一寸でも、其儘通さぬ彼れが氣性、今日の様な事があつては、成程札差家業は、ふつり嫌に成たであらう。處で治兵衛、お前が望み通り隠居して後は、どうする所存じやな？

治兵 弟の清三郎、當年正しく廿一歳、讀書、算盤、人應對、立派に出來ます男ゆゑ、清三郎へ譲りますれば、お父ッ様には、御苦勞ながら是まで通り、御後見を願ひまする。

治左 ム、そりやア承知したが、肝腎のお前の所帯は？

治兵 ヘエ私の所帯で御座いますか？ 私はどこか一軒小いさな家を、清三郎に貰ひまして、樂隠居を致しまする分の事。

お長 じやと云つて、あなたの御身代を、別に割て相應の分家をせねば、

治左 成まいがなア？

治兵 アイヤ、そりやア私と清三郎との相對話、必らずお構ひ下さりまするな。時、時に清三郎、今日改めて此家督、余からしてお前に譲るが、札差家業

の蔵宿商賣、勘忍が専一だぜ。勘忍が強くなけりやア、大口屋の身代は持ッ事が出来ないと、不漸それを心に思ひ、辛抱我慢をせねば成りませぬぞ。其外の事は、お父ッ様が附て居らッしやれば、余が云ふにも及ばぬ事。

清三

有がたう存じまする。

治兵

そこで清三郎、一昨年余が此大口屋の家督を請取ッた時には、身代合せて武拾七万八千兩、その中で廿万兩を資本に立て、残金はお父ッ様から預り分に仕て置たが、今では凡そ三拾万兩以上の身代。お前の分が貳拾万兩、御兩親様の分が五万兩、余の分が五万兩と三口に立て、三口ともお前が預ッて、御兩親様へは御隠居料を差上げ、余には其五万兩だけの利息をば、毎年渡して下さらぬか？

お民

エ、御前さんの別家高が、アノたッた五万兩で？

治兵

何の、隠居をしての一人暮し。五万兩の利息が年一割で五千兩、私にやア

清三

多過て、困る位で御座いますよ。子、清三郎、それで御前承知したか？

承知どころか、お兄イ様の思召し、有がたいやら、忝いやら、恐入て御座

いまする。

治兵

シテお父ッ様、おッ母様には、御不足は御座りませぬか？

治左

何の不足があらう、我子ながら其方が潔白、無欲のはからひ感心して居る

ぞいのウ。

治兵

それじやア話しはそれで極ッた。善は急げだ。清三郎、今日からしては、

治兵

お前が直に大口屋治兵衛、余は隠居で、俳名を其儘に、大口屋曉雨。ヘイ

治兵

お父ッ様、おッ母様、治兵衛さん、あめでたう御座いまする。

治左

ト祝辭を述べれば。治左衛門はじめ宜しく挨拶して後に

治左

さて治兵衛……

治兵

モウ治兵衛じや御座いません、曉雨で御座います。

治左

それじやア曉雨。其方は是から隠居して、何が樂しみ？

治兵

サア、一本立の曉雨となれば、弱きを扶けて強きを挫き、此藏前を初とし、

治兵

江戸中の町人衆、裏店小店に至るまで、難儀を救ふが此身の樂み。

お民

ニ、それでは、あの俠客の町奴に？

治兵 イ、ヤ男は立ても町奴には成りませぬ。男は客な野郎でも、大口屋曉雨、まさか町奴に立ち交り、ゆすり威かし喧嘩買、博奕渡世のかすりどり、そんな真似は金輪際、致す事じやア御座りませぬ。決して御案じ下さりませぬ。

治左 それやア此爺が請合ッた、皆も安心いたして居るよい（と考へて、ツツト立ち奥に入り、長脇差を袋に入れたるを持出して）サア曉雨、この脇差は、御先祖から傳はッたる大兼光の一尺七寸、今改めて此治左衛門が其方に譲るぞ。

治兵 エ、其大兼光を？（と取て戴きて）有がたう御座います。此曉雨が男を立てる一生の守り、必らず大事に致します。

お民（氣遣ひて）もしやその脇差で、治兵衛さんの身の上……

治左 ハテめつたに扱かぬ封印は、
治兵 心に附けて御座ります。イヤ重ねくの御高恩、人は一代名は末代、これから男に（と立上るを木の頭）なれます。

治左 衛門は立派な男よと見とれ。お民清三郎は治兵衛の恩に感じ、宿その行末を案ずる（拍子幕）

○第二幕

(一) 向島喧嘩の場

享保十六年辛亥正月廿六日午後

此は向島三圍の邊にて、正面より上手少し奥深に廻つて、向島の堤（高足二重）其の前（平舞臺）は地方にて、奥は隅田川の心なり。堤の邊りの青草は既に其の芽を發すれども、兩傍の櫻は未だ苔を綻びず。下手には堤の上り段ありて、其先に葎簀張の水茶屋あり。正面、川を隔て、向ふは。山谷今戸邊（遠見の書割）を見渡したり。
此に堤の上には伊兵衛（町人） 呂中（隠者） 半七（町家の息子） 床几に腰

を掛け。茶店の娘おいな(島田)茶を汲て出し、雑話の最中なり(幕明く)去年は、閏があつたせい、正月でも大そう暖か、御座いますねエ。左様さ、大そう暖氣なので、龜井戸を始として、此向島あたりも、まう梅が満開で御座りますよ。

半七 それじゃア、御隠居様は、梅見にいらつしやつたので、御座いますねエ。何にも、風流の樂みは、梅見に限るよ、櫻になると俗物が出掛て、雑沓するのに困り切るね。

伊兵 そうでございますか。私なんぞは、寒い時分にわざと梅を見に参るよりは、三月に成て櫻の盛を見るが樂み、

半七 そりやア夜櫻から朝櫻、夕櫻となるのが、一番面白うございますね。

呂中 殊に北廓の夜櫻、ものいふ花が面白からうが、あの花々見過ると身の毒になるものじゃて、

伊兵 大きにさうで御座いますね。イヤモウ彼は七ツ近くに成るだらう。エ、姉さんさうだらうねエ?

おいな ハイ、先きに長命寺様の八を打ましたから、モウ七の間は御座いますまいよ。

半七 そうかね。夫じゃ伊兵衛さん、そろそろと出掛ませうか? 御隠居さま、

ごゆるりと(と立掛れば)

呂中 イヤわたしもそこらまで御一所に参ると仕やう(三人が宜しく茶代を拂つて立つ)

おいな 有がたうございます、お静かにいらつしやいませ。

三人は下手に入る。おいなは、そこらを片付て居る。

此時(向ふより)逸見鐵心齋(序幕の逸見一角なり。五分月代、羽織着流、大小)門人、入谷丹五郎、根岸松兵衛、田畑彌九郎、並に子分、山猿の赤藏、猪熊の荒七、狂犬の武者平、貉の無垢助(門人は大小。子分は一刀尺八の町奴)或は梅の枝を荷ぎ、或は笹折を提げ、或は瓢箪を携へて梅見歸りの酩酊にて出来り(花道に)止りて

鐵心 ナントかう打揃ッて、ぶらぶらと野掛を致すは、よい心持だのウ。

丹五 何にも先生の仰せの通り、天氣は暖で、風は無し、

松兵 堤の景色も春めいて、陽氣になつた彼岸まへ、

彌九 家にごさるも退屈と、俄に出掛けた此梅見、

赤藏 龜井戸邊から柳島、こしらあたりに来て見れば、

死七 今を盛りの梅の花、われ劣らじと咲匂ひ、

武者 低い鼻まで高くなる、旦那のお供の梅見酒、

無垢 一杯嫌嫌で此通り、人中押であるくのは、

丹五 宜い心持で、

皆々 御座いますなア。

鐵心 それで自分も悦ばしい (と茶店を見て) 幸ひあれなる堤の茶店、一服いた

丹五 それが宜しうござりませう。

鐵心 サア参ると致さう。

丹五 まづおいで、

皆々 なさりませう (鐵心齋先に立ち、打つれて茶店に来る)

おいな入ッしやいまし。まアお掛なさいまし。唯今お茶を差上まするで御座いま

せう。

鐵心 茶はゆッくりで宜から、早く烟草の火をくれい。

おいな へい、畏りました。

ト烟草盆に火を入れて出す。門人等床几を持出せば鐵心齋は腰を掛て

鐵心 こりや赤藏、その瓢箪にまだ酒が残つてあるか?

赤藏 (瓢箪を振て) まだ此通り澤山残つてございまする。

鐵心 然らば此景色を肴にいたし、今一献運らさうか

ト門人に酌をさせて酒を飲み居たり

此時上手の奥より天野鞠負 (大若衆、振袖の伊達羽織、袴、大小) 奴黒

内 (伊達奴) を召具して出來り (よき所に止つて)

觀負 なんと黒内。いつ見ても向島はよい景色だのウ。

黒内 左様でござえます。若旦那様、御覽なせえまし。あの向ふの森が待乳山

で、こちらが観音様の五重の塔でござえますぜ。

ト地方の風景を立ながら眺望して居る。是を見て、鑓心齋は丹五郎に叫

けば、丹五郎心得て、鞆負の側に來り、一禮して

丹五 天ばれ美しいお若衆さま。我々共は、音に聞ゆる鶴鶴組の者で御座るが、今日は梅見遊山の浮れあるき。幸ひ我等が持參の酒、一口其様に進ぜたい。侍冥利若衆冥加、あれなる茶店で夕酒もり、御案内を致す程に、サア御入來が願ひたい。

ト鞆負の手を取れば。鞆負は振拂つて

鞆負 その御芳志、忝うは御座れども、唯今は急ぎの歸り路、殊に宅も遠方なれば、お招き御辭退いたしまする。

ト下手の方へ往かれば。松兵衛彌九郎出來ッて

松兵衛 イヤ左様に御遠慮召さるゝな。袖ふり合ふも多少の縁。侍同士が出會て、頼みある中の酒宴。そうすげなく断るは

彌九

兩人 武士の本意で御座るまい。

丹五 殊にかしこに居らるゝは、鶴鶴組の頭株、一手の差圖も召さるゝ方が、お若衆に杯さうと言掛て、断れては男が立たぬ、是非とも御承知、

三人 召されませう。

ト三人にて鞆負の兩手を執りて、引張れば。鞆負は振ほどきて身構をなして

鞆負 ヤア狼藉なり、それなる方々。何組かは存ぜぬが、見ず知らずの方々に、杯もらう手前で御座らぬ。妨いたさず往來を、きつとお通しなされぬか？

ト聲を勵まして云へば。三人は立塞ッて

丹五 ツハ、ハ、ハ、何と断り申すども、此方も侍男だてだ。

松兵衛 所望を聞て貰はにやア、此方の顔が立ち申さぬ。

彌九 それども達て通り度ば、

丹五 通る様にして、

三人 通らッせエ。ツハ、ハ、ハ。

ト嘲り笑ふ。此前より奴の黒内は頸に腕をさすつて、進み出やうと仕たるを、鞆負制して居たりけるが、今は堪らず黒内ずつと前へ出て、鞆負を後に圍つて

黒内 エ、聞分の無エ瘦侍エ。若旦那の忍びのお供、喧嘩はなッねエ法度だど、堅エ掟をぶん守り、辛抱して勘辨すりやア、附上つた其ごたく。此堤の往來を通さねエどぬかすなら、此奴がかうして通るワい。

ト拳を固めて、丹五郎を打てば
丹五 あのれ素奴め、何を仕やがる。

ト丹五郎松兵衛彌九郎の三人の中に、黒内を取籠て打て掛る。黒内は此を先途と争ひたれども、力敵せずして取押へらる。三人は黒内を隅田川の水中（舞臺正面の奥）に投込みて

三人 さまア見やがれ（と笑ふ）
此前より堤下（平舞臺）にては赤藏荒七武者平無垢助の四人、鎌心齋の差圖にて、鞆負に取て掛る。四人は各々尺八、鞆負は扇子にて防ぎ居た

るが。堤の上にては丹五郎等、今しも黒内を水中に投入れて

丹五 サア邪魔な奴は片付た。其若衆は手前共が、
三人 受取たぞ。

ト丹五郎等三人、刀に反を打て、三方より鞆負を取圍む。鞆負も今は是迄なりと思ひ、扇を捨て、刀の柄に手を掛けて、双方睨み合ふたる折から、彼方よりして

ま之（揚幕の内より）待た〜お若衆。其刀必らず抜かれな。
ト聲を掛けて今西堂之進（老躰、編笠、大小、著流籠々しき病後の浪人）
小き包を携て出来り直に其場に（舞臺）に馳せ入り、編笠を脱捨て、雙方の間に割て入り

御雙方どもお待ち下され、某は通り掛りの道行もの。此喧嘩、事の起は存ぜぬが、意趣遺恨あつての事どもお見受申さぬ、言はゞ當座の行掛り、何と某へお預は下さるまいか。御雙方、何で御座りますな？

お扱ひ下さるとあるならば、相手は知らず、某は異議なく貴殿へお任せ申

す。
丹五郎等は、玄之進が病あげくの老躰にて、衣服大小の粗末なるを見て、

心にあなどりて

丹五 疲浪人の案山子どの、用でも無い扱ひして、腰骨を挫かうより、

松兵 早く堤下に這込んで、少さく成て、

三人 すッこんで居るが宜ッ。

玄之 いかにも某、疲浪人では御座れども、通り掛ッて此扱ひ、何とぞ枉て某へ、

お預けなされて下さるやう、お頼み申す。

丹五 エ、喧しい扱ひ沙汰、聞く耳持たぬッ。

玄之 アモ御座らうが...

丹五 まだ申すか、其のかずば、かうするぞ。

ト玄之の進の胸倉を取れば。玄之進引外して筋斗を打たせる。松兵衛、彌九郎が引續いて組付を、其手を執て左右へねぢ上て

玄之 ヤア無禮なり方々。最前よりして、是なるお若衆主従を、相手となして無

躰の狼藉。いま又我に手向ッて、尾籠の振舞。この上は某がお若衆の助太

刀、其銚刀のなまくらもの、扱たくば扱て見ろえエ。

ト左右に投付け、あたりの松の抗木を手早く取て、身を固むれば

親負 お待なされ御老人。某ゆゑに貴殿をば...

玄之 お案じあるな。年こそ寄たれ、高の知れたる相手の侍。それに控へて見物

召されい。

丹五 うぬ、よくも手向ひ、

三人 仕やがつたなア

ト三人は刀を扱つれ斫て掛る。玄之進は松の抗木を得物となし、三人を

相手にして防ぎ戦ひ、身近くも寄せ付けず。赤藏荒七武者平無垢藏の四

人は、鎌心齋の差圖にて、脇差を扱鬪し、玄之進の後の方に廻る。是を

見て親負は、櫻の力木に立たる竹を取て槍に成し、赤藏等を相手にして

戦ひければ、丹五郎等は刀を打落されて、或は倒れ、或は逃去つたり。

鐵心 是を見て鐵心齋は刀を抜て
老人覺悟

ト所て掛り烈しく戦ふ。玄之進は隙を見て、鐵心齋の刀を打落し、持た
る抗木にてまた、かに打つ。打たれて動と仆る。同時に赤藏も鞆負に
胸を突かれて氣絶する。

玄之進は是を見て、あたりを見廻して

玄之 ヤレ危ない事で御座つた。お若衆、お怪我は御座らぬか？

親負 幸ひ怪我は致しませぬが、御老人には？

玄之 無事で御座る。サア後詰の者の參らぬ中に……

ト編笠取て冠り、鞆負と俱に、急ぎ向ふに入る。鐵心齋は氣が附て起上
り、あたりを見廻し、刀を鞘に納め、丹五郎其外の者共は活を入れて呼
起し

鐵心 いづれも正氣に相成つたか？
丹五 先生、いま出會つた瘦浪人、

鐵心 ム、見掛に似合ぬ彼奴が腕まへ、

松兵 天狗の様なはたらきは、

皆々 何もので御座りまするな。

鐵心 齋は、玄之進が落したる包を開き、書付を見て

鐵心 ム、そんなら彼奴は……

ト無念の跡にて向ふを睨むれば。丹五郎その書付を覗きに掛る。鐵心齋、

氣が附て、其書付を後に廻して（木ッ掛）

ト膝を打つと俱に、打傷の疼むを堪らへて怒りの跡をなす（拍子幕。す

ぐに引返す）

(二) 松葉屋二階惠金の場

享保十六年辛亥正月廿五日夜

但見る（本舞臺一面の平舞臺）正面一間の床の間には、料紙硯箱等を飾り、

花瓶に櫻の花を生け。其次一間の地板には、琴三味線棋盤將棋盤等を飾りたり。塗壁にそひては、衣桁に花やかなる打掛等を掛け。夜具棚、塗筆筒等あり。下手は塗骨障子にて見切り、其外は廊下なり。此仕切中は薄縁を敷詰り。座蒲團火鉢煙草盆燭臺等を配置したり。是れ新吉原角町松葉屋の二階なる、傾城丁山の部屋なり

此に丁山の新造若梅、吳竹の兩人。禿千鳥、并に幫閑善孝、俳階師睦吟(坊主) 齋頭金太郎等居並びて(下手にて) 酒宴最中なり(暮明く)

若梅 千鳥どん、大妓はどうさつしやつたか? 見申して來なよ。

千鳥 アイ、(下手の奥に入る)

金太 オイ吳竹さん。旦那はお湯だが、誰かお附申して居るのかねエ?

吳竹 アイ志のぶどんがお附き申て居るから、今にわちきがお迎ひにいくんぞますよ。

善孝 それじゃア、吳竹さん、御苦勞さまながらお願ひ申ます。

吳竹 承知します(下手に入る)

若梅

宗匠さんへ、をかした事を聞く様だが、あの曉雨さんは、あんな好い男のくせに、なんで女嫌ひぞますだらうねエ。丁山さんの大妓も、まみく、氣を揉で居なますよ、ほんに憎らしい曉雨さんですれエ、どうかして少しや女ずきにならッしやる様なまじなひはありまへんかねエ?

睦吟

どうもさう云ふまじなひは、僕も心得申さぬが。善孝子、貴公などは此道の博學多才だから、知て御座るだらうてな?

善孝

ハ、ア私だッて其まじなひは知りませんねエ。それを知ッて居る位なら、疾に自分でまじなひを仕ますけれど。

金太

そりやア無駄な詮議だ。こッちの大將は、藏前きつて評判の女嫌ひ、夫人さんも邪魔だッて、まだ持たねエ程の變り物だもの、まじねエなんか利ものか。

若梅

それが、なんで三日にあげず、此吉原へ來さつしやつて、大妓の所へ來なますだらうねエ?

金太

その理は、おいらがよく知てるが、マア斯だ。旦那が常々仰しやるには、余

が家に出入をする學者文人宗匠畫伯、その人数はあまたあれど、追従輕薄
 お世詞だらく、太鼓持も同じ事だ、齒が浮く様な諂エを、聞て居るのが
 癪に障る。所が吉原のおいらんは、遊女でこそあれ、氣位がボンとして、
 大名だらうが金持だらうが、氣に喰なけりやア口も利かず、つんど澄した
 鷹楊枝、その代りに氣に入りやア、真友たちを目ツけた氣で、すき自儘の
 勝手ばなし、微塵少しも諂エの無エ所が心證だ、それが面白ッて、おいら
 時々吉原へいつて、其此の大妓を買なじんで居るんだと旦那のおはなし、
 それだから此の丁山のおいらんが、いくら氣を揉んで、尋常エのお客の機
 に枕を代させやうと思つても、そりやア迎もむだの事ッだ。
 成ほど、こりやア頭のおつしやる通りでござませう。私も去年から此通
 り御最負になります、いつしか一度もをかしな事を拜見いたしませんよ。
 ねエ宗匠、お前さんもそうでござませう。
 成ほどそうだねエ。併し引手あまたのもの言ふ花、それを手折らぬと云ふ
 のは、アッ天下のむだいなア、のウ金太先生。

結吟

善孝

金太 またきまり言て居らア。時に若梅さん、丁山さんの大妓どこへ、釣鐘庄兵
 衛と云ふ男が、此節客に成て来るじやア無エか？
 若梅 ア、知て居さつしやア言ますが、實はそうごますよ。それに附て、
 もし差合でも無けりやアよいがど、大妓も氣に仕て居ますよ。
 善孝 ナニ、曉雨旦那と釣鐘の親方とは、お突合は無い中だから、差合じやアあ
 りませんが、若梅さん、御同前さまに、氣を附て居にやア成りませんぜ。
 トはなして居る所に、傾城丁山(部屋着) 下手の奥より上草履にて出來
 り、直に上手に着座して
 丁山 曉雨さんは、まだ來さつしやらないかねエ？
 若梅 アイ、まだお湯には入てごます、吳竹さんに志のぶどんが附て居ますから、
 今にあがつて來さつさやませうよ。
 丁山 そうかい(ど若梅に呷けば)
 若梅 (承知して)ア、それじやアおちきは、釣鐘さんの座敷へ……
 丁山 ア、これ(制すれば)

若梅 大妓へ、釣鐘さんの事は、みんなが知つて居なますよ。
丁山 オヤそうかへ、面目なうさますねエ

ト立上る(木の頭に此道具半廻に成る)
此は前の部屋外、廊下の躰にて、前の下手の障子、今は上手に成りて、所々に釣行燈を掛けたり(道具止る)

上手より、前場の禿千鳥先に立ち、稻妻組の頭と立てられたる町奴の釣鐘庄兵衛、その子分撞木の権蔵、龍頭の龍太、突座の九五郎、この三人附添ひて出来り、立止つて

権蔵 エ、親方。今夜アどうなせエますな?

庄兵 どうすると云つて、別に面白エ趣向も無エから、見番の藝者でも呼上て、思ふさま騒ぐと仕やうか。

龍太 エ、それがようござませう。夫に附ても、親方が買なじみの丁山が座敷に居るあの客は、...
丸五 當時世間に名の高エ、藏前の曉雨と云ふやつ。買掛りの張合から、それに

三人 引けを取つた日にやア、親方、顔が立ますめエゼ。

庄兵 知て居るよ。あれがする様に、任せて置けよ。

権蔵 じやと云つて、あの曉雨が...

庄兵 エ、煩せエ、黙つて見て居るエ

ト叱り附て立止り、少し思案してぞ居たりける
此時廊下づたひに(向ふ揚幕より)禿老のぶ先にたち、藏前の俠客大口屋曉雨どてら浴衣襲ね新造吳竹附添ひ出来り、歩みながら(花道にて)曉雨ア、好湯であつた。思はず長ッ風呂を仕て居たので、さぞ待くたびれたらうね。

まのぶイエ、待くたびれは致しません。

吳竹 だが、あいらんが、きつう待て居なますから、早う出なましな。

曉雨 ム、部屋へいつて一服のまうか。
ト此方(舞臺)に歩み来るを見て。庄兵衛は子分に目附で知らせ、曉雨

の前に立塞がる。曉雨左によくれれば、左により、右によくれれば、右に寄

る。曉雨も立止れば。庄兵衛は睨め付て

庄兵衛、何を仕やがる。盲じやアあるめエし、此の廣い廊下の中で、何で人の

邪魔を仕やがるんだい

ト喧嘩を賣りに掛れば

曉雨 こりやアお邪魔を致して相濟ません。眞ッ平御免なせエまし

庄兵衛 氣を附けやがれ (子分に向ひて) エ、間拔な野郎じやアねエか。ヲハ、ハ、

ト子分と俱によろしく嘲り笑ひながら (下手) 入る。曉雨は平氣にて上

手の障子に入る (道具戻る)

金太郎はやつきと成て、廊下の外に出掛んとするを。曉雨は止めて

曉雨 金太郎どこへ往のだ?

金太 かの釣鐘めが旦那の事を、

曉雨 なんと云ふが掃ふものか。

金太 テモ言だの間抜だのど、ぬかしやがつて...

曉雨 エ、何でも言はせて置けエ。二階廊下のはした喧嘩、それを買ふ様な曉

雨じやア無エヲ。是非とも又買はにやア成らぬエ喧嘩なら、手前にやア願

まねエよ。

金太 だッて、見すくお前さんに誤まらせて...

曉雨 ハテ人に突當つて詫言いふのはあたりまへ、それに何も不思議はありやア

仕ねエよ。

ト金太を制して座に就く。此時丁山も (下手より) 出來りて

丁山 曉雨さん、長い湯さきしたねエ。

曉雨 思はぬ長湯で、昔も待遠であつたらう。宗匠も善孝も、遠慮なしに飲で居

なすツたか?

蛙吟 御遠慮なしに頂戴いたして、

善孝 この通り、大酩酊で御座いまする。

此時下手より搥木の權藏 (羽織) 若いもの喜助に酒肴を持たせて出來り、

権蔵

曉雨の前に差出し、般勲に兩手を支へて御免下せまし。わつちやア釣鐘庄兵衛の子分、撞木の権蔵と申すものでござえます。親分庄兵衛申しますには、唯今はあれなる廊下で、曉雨さまとも存じませず、失禮な事を申上げ、甚以て相濟ませぬ、そのお詫かたぐい名代としてわつちを差出し、疎末な酒肴、御受納を願えます。附ましてはお近付に成たうござえますが、此お座敷へ上りましても、お差支はござえませんか、御返詞をお願ひ申上ります。

金太

そんなら釣鐘庄兵衛が、詫言いつて此座敷へ……

曉雨

エ、喧ましい。イヤナニ権蔵殿とやら、お使がら御苦勞で御座います。庄兵衛殿へ御返詞には、唯今は廊下にて此曉雨が思はぬ失禮、それに却て其方から御挨拶では痛み入ります、御持參の酒肴、頂戴いたす譯はなけれど、折角のお心入、わざと受納いたしますれば、お禮は此方より改めて申入ませう。但し此座敷へ御入來の段は、當方にて迷惑いたせば、お断り申ます。遊女屋の二階、遊興の場所、互に知て知らぬ顔、近付せぬが遊びの

丁山

花、其中折があつたなら、お近付にも成ませうと、宜しく云て下つせえな。

権兵衛

御返詞は慥に承知いたしました。それじやア、こな様はどうあつても、

丁山

釣鐘さんに、今此でお近付には

兩人

なりませんか？

曉雨

いかに近附に成るのは、まア止に仕やうよ。

権蔵

お前エさんが、否とお言なさりやア、話しはそれまで、何も釣鐘親方が、達てお近附になりてエと、無理から望んだ理でも無エが、併し曉雨さん、それじやア達衆の顔を潰す様なものじやアござえませんか？

曉雨

これは仕たり、権蔵殿とやら。釣鐘の庄兵衛殿は、音に聞えた達衆であらうが、此曉雨は堅氣の商人、町人の隠居、男も賣らねば立入れもせぬうぶの素人、遊興の席ゆゑに、お近附は御免なせエと断るのに、何の仔細もあ

りやア仕まい。庄兵衛殿の氣に障らぬやう、こなさんからよく云ッて貰ひませう。イヤ態々のお使、御苦勞さまでござえました。

ト一寸挨拶して話しを切れは。権蔵も心得て、

権蔵 よく分りました。それじゃ御口上の通り、親分へ、申聞るでござませう。イヤ大きにも邪魔を致しました、どれお暇を致しませう

御免なせエ
ト挨拶すれば。権蔵も皆々へ會釋して去る (下手の奥には入る) 丁山は

曉雨の所爲に落意せねば
丁山 曉雨さん。主やアなんだッて庄兵衛さんが逢はうと云ふのを、断りなんした？ 廓の立入れ貰ひ引、ひけを取らぬが男の意地。其男が頭をさげ、わざわざよこした使の挨拶、それを断り、近附を否じやと云った其時は、モシ

曉雨さん、主の顔は是ッきり、五丁町ではすたりんしたよ。

曉雨 それで顔がすたつたら、それまでの事よ。

金太 旦那。お顔がすたると聞た日にやア、お否であらうが、かの庄兵衛と...

曉雨 エ、又口出しをするのかへ、煩せエじやア無いか、あれが事はあれに任せ

て、打ッ遣ッて置てくれい。
丁山 アモ曉雨さん、此噂が聞えりやア、主は庄兵衛さんを怖がつて、尻込さん

したと、みんなの目のに笑はれますぞへ。
モシ大妓、お詞の中で御座いますが、此噂が聞えたどて、旦那の事を五丁

町で、笑ふ者は御座いませんよ。
丁山 サア笑はぬに仕た所が、不断からして男を賣り、負るが嫌ひの庄兵衛さん

どうした事やら今夜限り、粹を通したあの使、それを否と言はんしちや

ア、主が却てきやぼんにおなりなんすが、口惜うござりますッ。

曉雨 好やね、野暮だらうが臆病だらうが、あめエの知つた事じゃア無エよ。

丁山 じゃア、主やア庄兵衛さんが怖いのぞますッ?

曉雨 ム、怖いとも、釣鐘庄兵衛は、あいら怖くてならねエよ。

ト聞くも言ふも煩さければ、鼻の先であしらつて居る。丁山は、曉雨が

あまり意氣地が無いのと、平氣で居るのに、愛想が盡きたるか、少々腹

立の軀に成つて

丁山 それじゃアどうなりとも、主の氣任せにお仕なまし。わちきやア、あッち

の座敷にいきますぞへ。

トつんと立ち、奥竹千鳥を引連れて、奥(下手)に入る。皆々は氣を揉む。

曉雨は思ひ出したと云ふ牀にて

オ、金太。貴様はな、大儀でも是から家へ歸ッて(と金太に叫べば)

金太 承知しました。それじゃ明日の朝、小揚の頭を使に立て……

曉雨 コレ静にせい。だが、つかひ物は違筆に持せてやるのだぜ。

金太 その代りに、庄兵衛なんかとお実合は、眞平だと断るのでござえますね?

曉雨 ム、そうだ。

金太 分りやした。

曉雨 分つたら、早くいけ。

金太 承知でござえます(と立掛れば)

蛙吟 シテ僕等は進退いか仕りませうな?

曉雨 宗匠は善孝と一所に、大島屋へ引下り、一杯のんで待ッて居なせ。わし

も程なく、出掛やうから、

善孝 それじゃ、御最負の夕丈を呼にやつて、置ませうか?

曉雨 また引越の静かな所で、編笠でもうなる氣だ。ハ、ハ、ハ、

蛙吟 それじゃ善孝子、

善孝 御一所に出掛ませうか。旦那御免を蒙りまして、一足お先に、

兩人 参ります。

ト、挨拶して金太郎と俱に去る(向かふに入る)あとは曉雨二人に成り

て

ヤツと静かに成た。ヤレ、ソウ、ソウ、しい事であつた。そりやア宜が、明

日は芭蕉庵の例会。頼まれて居た端書を、持たせてやらねば成るまいが

ト棚の硯箱を取出して序文の草稿を認る。(此時下座の獨吟に成る)

「待乳まづんで。相乗こむ山谷ぶね。土手の合傘。かた身ばかりの夕

時雨。君を思へば逢ぬむかしがましどかし。どうして今夜はござん

した。ソウいふお聲を聞にきた。」

ア、好聲だ。節廻しが、めつばうに甘い。ハ、ア延しんだな。

ト草稿を書ながら聞て居る。

此時引込新造お鶴は。(振袖)病人の躰にて(下手より)出來り、障子の外

より小さな躰にて

お鶴 吳竹さん。吳竹さんは居なますか?

お鶴 吳竹さんは此に居ないが、誰だへ?

お鶴 オヤ曉雨さんぞますか(と障子を明くれば)

お鶴 マ、お鶴さんか。まアおは入んなせエ

お鶴 ト優しく言て、招き入るれば。お鶴は着座して

お鶴 曉雨さん、お久しぶりです。相替らず御盛んで……

お鶴 オ、お鶴さん。久しく逢はかつたが。ひどいやつれやう。お前が病氣だと

は、聞て居たが。是程のこととは思はなかつた。シテどこに寝て居なさる

ね? 外に寝る所はありませんか、欄部屋に伏つて居ますワ。

お鶴 そうか。それで誰が看病をして、呉るのだへ? 夫からしてお醫者は何と

仰しやつたね?

お鶴 お醫者様は、家に來さつしやる岡野さんで、寒を引込だのだから。恙ッか

り養生を仕なければ、直らぬとよいひなんした。夫で精出してお藥を戴い

て居りますけれど、看病だつて、誰も身にまみて仕てくれる人はありやア

仕ませんよ、それだから時々二階に上つて來て、吳竹さんに、何やかや、

内證の事を頼むのぞます。

お鶴 それで丁山はお前の世話を信切に仕てくれるかい?

お鶴 アイ、大妓だつて、いつも客人でいそがしうぞますから、おちきたちの事

までは……

お鶴 ト口にもこもりて、あらはには言はず。曉雨はそれと悟りて。

お鶴 そうだらうよ。あの女は俳諧も一寸出來て浮世話も面白い様いではあが、

思ひの外に不人情な質だから、碌々世話も仕てやるまい。それじやア朝晩

の事にも、困るだらうねエ?

お鶴 ナーニ、そりやア大妓が附て居なますから、困る理はありませんが……

お鶴 所が、そういかないから、矢ッぱり困るだらうよ。(トお鶴の容躰を見て)

こりやアひどい度せやうだ。かういふ病氣にやア、お薬も怠ツちやア可ないが、何でも身軀の養に成て、精分の附く物を、せい出してたべにやア、お薬が利ないよ。それで、どんな物をたべて居なさるね?

お鶴 サアお醫者様も、其やうにいいひでござんすが。わちきたちじやア、そうは出來ないのでありますワ。

曉雨 アツ、成ほど、まだお客にも出ぬ振袖では、さうであらうよ。

ト不便の思ひをなし、紙入の金子を残り取出し、紙に包みて

お鶴さん、生憎と今持合せた金子が、たつた三兩、餘まり少ないが、こりや余がお前への病氣見舞。これで何なりと買て、養生を仕なせエな

ト手に渡せば。お鶴は其包を拝見して

曉雨さん、おまはんの御信切は身に餘るほど嬉しいけれど、わちきやア、此の大妓丁山さんのお世話になる引込新造、その新造が大妓の客人から、

お金を貰つては、大妓に對して濟まぬ程に、戴く事は出來ませんワ。そりやアさうでもあらうが、折角出した病氣見舞、はね附るのはそツけ無

いぜ。マア納めてお置なせへな。

お鶴 有がたうは御座りまするが、どうぞ是だけは堪忍しておくんなまし。

曉雨 じやア、此曉雨が氣に入らぬから、突返すのだなア?

お鶴 さうじやア有ませんが、縁もゆかりも無いお方から、お貰ひ申すが否さますから。

曉雨 ハ、ア縁もゆかりも有じやア無いか。余が丁山の客で、お前が丁山の座敷で、世話に成て居なさりやア、まんざら見ず知らずの中ではあるまいかなア。

お鶴 さう云はれると困りますねエ。……それじやア曉雨さん、其のお金をお鶴の病氣見舞にやつてくれいと、大妓に渡しておくんなまし。大妓の手から下さるなら、私も有がたう戴きますでござんしよう。

曉雨 成ほど、お前は、武家育ちだと聞いて居たが、堅過るにも程があるぜ。是が拾兩とか貳拾兩とか纏まつた金子なら、表むき丁山に渡して病氣見舞と云つても宜が、高の知れた貳兩か參兩のはした金、なまじい人に知れた日

には、お前ばかりか第一は此曉雨がまみつたれで耻かしい。人間と云ふものは、堅いばかりが能じや無い、人の情の奥底を、汲で知るのが誠の附合。お前がいま突戻した此金子、まさか余が引返まする理にも往かなからう。玄やに由てお鶴さん、色氣をはなれて僅の見舞、まア納めてお置なせう。

ト説得して、金子の包をお鶴が手に、無理に渡せば

お鶴 それ程までに仰しやるのを、戻しましては、御信切にそむく道理。曉雨さん、有がたう戴いて置まする。まかし此事を大妓だけには、話して置てもようさんすか？

曉雨 イヤ丁山に知らせるのは、止に仕なせエ。不斷からして疑ひ深いあの丁山、乙ウ勘ぐつて、をかくし思ふと却て迷惑。それに僅な金子の病氣見舞。丁山はじめみんの者に沙汰なしに仕ておくんなせエ。

お鶴 それじやア黙ッて居りませう。曉雨さんありがたう存じまする。

曉雨 此時廊下にて人の足音聞ゆれば

お鶴 お鶴さん誰か来た様だぜ。兩人が差向ひで居て、變に思はれちやア詰らぬエ。

お鶴 サア早く下へ往なせエ。

曉雨 さうぞますねエ。それじやア曉雨さん、御ゆつくりと、おまげりなんし。

お鶴 わたし一人でか、ワハ、ハ、ハ

お鶴 オホ、ハ、ハ、ハ

ト笑ひてお鶴は此座を去る(下手には入る)

此時丁山先に立ち、釣鐘庄兵衛 權藏 龍太 丸五郎 若梅 吳竹 千

鳥 志のぶ打揃ひて、ドヤ／＼と(下手より) 出來りて

丁山 サア釣鐘さん。わちきの座敷、遠慮はない程に、おは入りなまし。

庄兵衛 それじやア、あいらん、御免なせエ。

丁山 ト皆々入る。丁山は曉雨を見て、わざと驚いたる振にて

丁山 オヤ曉雨さん。おまはんまだ居なましたか。わちきやアまた、先きに皆をつれて、大島屋へ往なんしたと思つたゆゑ、外の客衆をお連申して……マアどう仕ませうねエ。

トわざと當惑の躰をすれば

曉雨 ナーニ、少しも構つた事は無い。わしも今丁度仲の町へ往かうと思つて、煙草入を仕舞た所よ。

庄兵 ト煙草入を仕まひ立掛れば

アイヤ曉雨どん、少し待て貰ひませう。先きこの權藏を使に立て、わざわざと近附になりてエと申入たに、をかした返詞、この釣鐘と一座して、

酒くみ代すが否じやとさきと言はッしやるのか？

曉雨 これは仕たり釣鐘どんとやら、庄兵衛どんとやら、先きも返詞を仕た通り、

人目づゝみの編笠に、通ひくるわの樂みは、志ッばり濡るゝ夜の雨、互に憚

かる屏風の背戸、それを破ッて逢はうとは、粹な男のせぬ事ゆゑ、機があ

つたら其時にお近附にもなりませうが、此で逢ふのは御免なせエと、斷つ

たが分らぬエのか？

庄兵 サア其斷が氣に食はぬエ。男が一旦近附にならうと云たを斷られちやア、

此釣鐘の顔が立ぬッ。

曉雨 ハテどうしたもので御座エますな、否と云ふのを無理無幹、往生づくめの

權藏 此奴ア、口に關所が無エと思つて、ペラ〜と饒舌ちらし、親方を馬鹿に仕やがるなア、改めて近附の盃しねエ其内は、一寸でも此座敷、立たせる事は、

皆々 成らぬエぞ。

曉雨 ト取巻く。曉雨は平然として

エ、何で大聲を出すのだい。貴様たちの相手に成るやうな曉雨じやア無エぞ。達て止だて仕やがるぞ、冥土の廓へ鞍替させるぞ。

トキツと睨めば。此勢に恐れて皆々脇へ寄る。庄兵衛は黙つて居る。丁

山は曉雨の側に來りて

丁山 そんなら曉雨さん。どうあつてもいになますか？

曉雨「いなうとも止うとも、何でもわごりよの御ばかりひと、言ては小腰にとり
ついで」ツハ、ハ、ハ
ト狂言小唄をうたひ、小舞のふりを一寸見せて笑ふ（是を木の頭にて）
庄兵衛無念のこなし、其他皆々意外の思をなす
（拍木幕）

〇第三幕

(一) 阿部川町浪宅の場

享保十六年正月三十日の夜

阿部川町今西玄之進が浪宅（四間の所常足の二重）後は西教寺境内の卵塔
場の三味にて。一方（上手）には損じたる竹垣に出入の木戸を設け、一方
（下手）には疎なる杉の生垣にて境をなす。正面（上手寄）一間の所に中
塗の壁ありて、其前の刀掛には大小を懸け、其側の古机には筆硯を置き、

一間貳枚の破襖（出入口）を建て汚れたる薄縁を敷き、破れ行燈に灯火を
點け。下手（横）には雨戸を建て、上手（横）には破れ障子を建てたり。
正面には濡縁を附け。根子の杵扱あり。（幕明く）
此に旗本天野民部（鞆負の父）が家來片山又四郎齋藤孫市三浦大次郎三木喜
右衛門の四人。天野の紋付たる提灯を携へ（天野の紋は丸の内に三蓋松）
上下を見廻りて出來りて
又四 ヤア御苦勞で御座つた。表の方は何も別條は御座らぬかな？
孫市 左様。表の方は何の仔細も御座らぬが、シテ裏手の方は如何で御座るな？
大次 裏手の方は、西教寺の卵塔場は云ふに及ばず、庫裏の邊まで見廻つたれど、
喜右 怪しき躰は更に御座らぬ。
又四 左様で御座るか。御同様に御主人天野民部様の仰を受け、既に去る廿六日
より、今日まで五日の間、此通り、
孫市 毎夜是なる今西玄之進殿方へ相詰て、厳しく警固を致して居れど、
大次 かの鶴鶴組の悪黨ばら、押寄せ參る景色も見えねば、

喜右

又四

玄之進殿の言はるゝ通り、向島の意趣ばらしに、参る事は御座るまい。拙者とても其通りには存ずれども、相手は名におふ鶴鶴組、武家町人の差別なく、喧嘩をするのが彼等のつね、

孫市

大次

儀

喜右

又四

四人

喜之

もしも當家の老人に過ちあつては相成らぬ、用心せよと殿の嚴命、それ故にこそ若殿にも、わさくお出張り相成て、お詰なされるゝ今度の仕儀、

参るものなら早く参つてくれゝば宜に、僕などは日頃の腕前、

御同様に武藝の手練、目にも見せて、

やり度御座るなア。

ト四人は互に力身ばなしをぞ仕て居る此時襖の中に聲あつて

若殿、これへお越し下さりませ。ト案内して、今西玄之進（着流、無刀）先に立ち、天野鞆負（羽織袴提刀）その跡より、玄之進の妻お節（老たる女房）附添ひ出來り、鞆負を上座に居らすれば。又四郎等は、一同に敬禮して

又四

孫市

四人

鞆負

四人

喜之

お節

又四

喜之

又四

喜之

又四

喜之

ハツ、若殿様へ申上ます。當家の内外、唯今も篤と見廻り致せし所、

更に別條

御座りませぬ。

大儀であつた。猶念入て誓固をいたせ。

畏ッて御座ります。

餘寒の折から、毎夜の御警固、御苦勞に存じます。コリヤお節、各方へ

溢茶なりとも差上げぬか。

そうで御座ります。此寒のに、音様もお大抵では御座りますまい。マアお

手などあぶりなさいまし、唯今お茶を差上ます。

ト火鉢を持出し、土瓶に茶を入る。

アイヤ御内室、かならずお構ひ下さるな。咽が乾けば御勝手へ罷越し、自

由に頂戴いたすで御座る。

時に若殿、唯今もあれなる一間で申せし如く、御父上民部様の思し召、有

がたうは御座れども、毎夜々々の御警固は、玄之進身に取て、心苦しう御座り

親 貞

ますれば、遠て御辭退申上ます。

アイヤ、其儀は斟酌かならず御無用。相手は多勢の鶴鶴組、世を憚からぬ

あばれもの、もしも貴殿の身の上に、過ちある其時は、我等親子が相濟ま

ねば、警固いたすは當然。お心置なく、御寝なされて宜しう御座らう。

ま之

まだ、左様に仰あるか。向島にて喧嘩の折から、計らずも行合せ、御加

勢したは手前が物好、其爲に此如く、御苦勞掛るは甚だ本意。その上にま

た鶴鶴組のあばれもの、既に今日まで五日の間、押寄て参らねば、最早懸

念は御座りませぬ、よし又押寄せ参つた所が、高の知れたる小普請御家人、

町奴のならずもの、病ぼうけても立之進、暗々打たれも致しませぬ。どう

か今夜は若殿にも御一同を御つれあつて、お引上を願ひます。

親 貞

先程よりして其御趣意承はつては御座れども、引上たる其跡で、若もの事

のある時は、天野民部の武士がすたる。夫じやに依つて用心あしき當所を

立のき、拙者屋敷へ御入あれど、遠て申すを御聞入これなくて、其ま、是

に御座あるゆゑ、五日はあるか十日一月、此ほどびりのさむるまで、御警

ま之

固いたし申さねば、親子の一分相立ませぬ。

是は仕たり、鞆負様。拙者を御警固下さらねば、天野様の武士がすたるど

御意あるならば、其御警固を受ましては、此立之進も武士がすたる。御父

上は、其昔し剣道出會の好を以て、拙者が今の浪々を、氣の毒なりと思召し、

御合力下されうどの御信切、それを御辭退いたしますは、敢て堅意地で

は御座りませぬ。故主水野隼人正殿の御不行跡を憂ひし餘り、御家督讓の

内評議、もれて受たる此身の不興、その後、主家は御没落、孤忠を守る立

之進、今日に相成て、天野様より、御合力を受ましては、心の操が貫きま

せぬ。其上に今度の一條、かく御警固を蒙つては、鶴鶴組に恐をなし、天

野様を頼んだと、相手の奴等に笑はれては、故主の名までも穢すの恐れ。

此通の次第ゆゑ、遠てお引上を願ひます。

御尤の御心底。然らば其旨一應父上へ申上げ、御承知あつた其上で……

アイヤ其儀は昨日民部様、お忍にてお入のをり、篤と申上ぐ儀まして御座

ります。

又四では御座らうが。主人よりして引上の差圖なき其内は、...

引上は下さらぬか？

四人 いかにも左様。

然らば是非が御座らぬ。立之進、明日とも云はず、唯々今、當所を立のき

宿替いたす。

お節 ハテさて、又しても性急な言掛り。御信切な天野さまのお詞に従ふて、今

夜だけは警固をお願ひしたが、宜しからうと思ひます。

主之 ヤア其方までが左様な事を申し居るか。御警固に預かつては、此立之進が

武士がすたり、故主隼人正様の御耻辱にまで相成る次第。それが其方に分

らぬか？

お節 成ほど、そう云はつしやれば其様なもの。イヤ申し若殿さま、お聞の通

りの次第がら、それに又常からして、心を極て言出したら、一かな引かぬ立

之進の氣質。御迷惑では御座りませうが、どうぞ引取を願ひます。

主之 イヤ迷惑は少しも御座らぬが、不用心なる此お住居。

主之 ハテ生死は人の運次第。運強ければ敵勢に取巻かれても、命は助かる。運

盡る其時は、金城鐵壁ありども、其身は必らず亡ぶる道理。此おばら屋

の不用心が、運をためすに最窟竟。サア直さまお引上げ下さりませい。

主之 じやと申して、唯今直には...

主之 お引上なさらずは、立之進、直に此屋を立退きませうか？

主之 サアそれは。

主之 お引上ケ下さるか？

主之 サアそれは。

主之 若殿。ナせお引上はなされませぬな？

主之 ト決心の躰を見せて迫れば。鞆負は據なく

左程までに仰の上は、強て申すは却て無禮。然らば余し家來等を召連て、

お暇いたさんが、何とやら今夜の氣掛り。

主之 ナニお氣掛りは御座りませぬ。夜の深ゆうち少しも早う、御歸館なされて

下さりませい。それ御一同お供の御用意、...

ずと組み、押伏せたるは即ち其日の御當番、天野民部殿、それさへ無くば先君は猶思ふさま所散し、其場で立派に御切腹もありつらん、押へられたる御無念は、何ばかりでははしたらん。其民部殿親子の衆に、聊たりども思受けては、故主へ對して本意で無い。夫故にこそあの様に、もごどうに斷つたが、天野殿には立之進を堅意地の義理知らずと、下墨で御座るであらうが、武士の操では非が無いッ。

お節 成ほど、そう云ふ理で御座つたかいのウ。そんなら其様に初から、打明て言はつしやればよかつたらうに。

ま之 侍同士の應對に、左様な事が云はれるものか。それは格別、娘のお鶴、去年の冬、おれが病氣の最中に、旗本屋敷へ腰元奉公に遣したが、まだ宿下りを致さぬかな？

お節 お前さま、宿下りは三月ときまつて居る。それにまた番町の小出様は、取分け堅きお屋敷ゆる、宿元からして迎ひにゆき、お願を致さねば、一日たりとも町中へ、お出しにならぬが拵とやら、

ま之 屋敷の拵はさう無くては叶はぬもの。併し手紙の便が疎遠であるのは、どうしたものだな？

お節 サア今西之進が娘と云つて奉公させるは、此方の耻。家主殿を宿に頼み、假親しての御奉公、それで手紙のやり取りも、さう自由にはなりませんわいのウ。

ま之 何さま、そりやアさうであらう。同じお旗本でも、小出様は八千石の御大身。支度とても無い事ゆゑ、さぞやお鶴も朋輩中で、肩身が狭い事であらう。

お節 サア、わたしもそれで色々と考へて居りますが、お前様の御病氣が、すっかり直つた其上で、どツくりと相談を致しませうわいのウ。

ま之 ハ、ハ又御相談か、それもゆツくり聞と致さう。イヤ思ひ出した。今日には薬を朝一度吞だばかり、寐る前にもう一服吞まねば成るまい。お節、大儀であらうが、煎じてくれぬか？

お節 そのお薬は、此通り、日の暮まへに煎じて置ました。ドレ暖めて上げませ

うか。

ト藥土瓶を火鉢に掛くる。玄之進は机の上の本を取出して行燈の前で讀で居る。此時木戸(上手)の外にて逸見鐵心齋の子分、山猿の赤藏猪熊の荒七狂犬の武者平路の無垢助の四人は駈廻ッて

赤藏 ヤア泥棒だ。早くつかまへてくれい、く

荒七 それ向ふの方に走つていつたぞ、

武者 ヤア屋根傳に逃つていつたぜ、

無垢 卵塔場に逃込たぜ、

四人 早くつかめておくんなせ

ト頭りに騒ぎ廻れば

玄之 ナニ泥棒が逃込たぞ?

ト刀掛の刀を取て、立上れば。お節は行燈を持って一所に椽先に出る。此時下手の杉堀の中にて

赤藏 それその増根の方に逃つていつたぜ。

荒七 そっちの方を追掛てくれら。

ト叫び足音をさせて馳廻れば。玄之進は下手を見て

玄之 ハテ怪からぬ騒ぎ。お節、その光を此方の方へ向てくれい。

ト刀を揚て、庭先(舞臺)に下り、増根(下手)の方へゆく。お節は行燈を出して

お節 お前さま、怪我を仕ては成りませぬぞ。

玄之 ナニ大丈夫だ。

ト増根に寄添て卵塔場を覗く。此前より逸見鐵心齋は増根の間に忍び居て、槍をしむき、横台より不意に玄之進の脇腹を突く。玄之進は突れながら其槍を握つて

ヤア何奴なれば卑怯未練のたまし討...

鐵心 向島にて喧嘩の遺根、覺えて居るか。

玄之 ム、扱こそおのれは鶴鶴組の... (槍を突のけ手負ながら刀をぬく)

お節 (此軀をすかし見て) なんとなされましたなア?

ト氣遣ひ、庭先（舞臺）に下りやうとする。此時上手より礫を打ち、行燈を打消すと同時に、赤藏等四人抜つれて入來り、お節をめつた切り斫る。お節は叫びながら死ぬる。此方には逸見鐵心齋と玄之進は激しく戦ふ。ふ（知せ無しに此道具半廻に成る）

(二) 卵塔場欺討の場

此は西教寺本堂の後にて（本舞臺一面の平舞臺、前場にて下手に見たる杉の生壇、今は上手になる）所々に石塔ありて、其間には松杉等の立樹あり。（正面の奥には西教寺本堂後を見する）折柄（道具止れば）鐵心齋は槍、玄之進は刀にて（上手より）出來り必死に成て戦ふ。鐵心齋の門弟入谷丹五郎根岸松兵衛田畑彌九郎各々刀を抜て構へ、鐵心齋が危く成るを見て、助太刀に出で、前後左右より斫付る。玄之進痛手にてよろめきながら、四人を相手に烈くし戦ひ、終に斫倒さるゝ。

鐵心 鐵心齋は留を刺して
ヤッ思つたよりは骨が折れた。

丹五 是と申すも先生の、

松谷 御手練すぐれたお槍先、

彌九 今に初めぬ御武勇は、

三人 恐入て御座りまする。

鐵心 いや是で漸と腹がいえた（此前より赤藏等四人も此所に來て居たるが、鐵

心齋は四人に向ひて）シテ家内の奴ばらは

赤藏 家内どては女房一人、

荒七 見事に仕止て、

皆々 御座りまする。

鐵心 ム、それで安心

多勢 此時上手の奥にて多勢の人聲にて
今西どの。玄之進どの〜

ト呼ぶ。是を聞て、鉄心齋、それと差圖して、一同に本堂の傍に忍び入る(此道具知らせなしに原へ戻る)

○天野の家茶片山又四郎齋藤孫市は提灯を持って先に立ち、天野民部(羽織袴大小) 奴の黒内附添ひ出來りて

民部 玄之進殿は、いづくに御座る。天野民部、わざく出掛て迎に參つた。

又四 今西どの、

孫市 御出會召されぬか?

ト呼びながら見廻し、お節の死骸を見て

又四 ヤアこりやは是今西殿の御家内なるが、

孫市 無慙に殺されしは、

ト打驚けば。天野民部は立寄て

民部 ム、こりや多勢の刀にて、疊み掛たる許多の疵所、…それに又こゝ等の血

汐。玄之進の身の上心許ない、あれなる墓所を見分いたせ。

兩人 畏りました。

ト卵塔塙の方へ(下手)急ぎゆく

民部 黒内。其方は當所の家主五人組の者共に、此由急ぎ告知せ、早々是へ同道

いたせ。

黒内 畏りました。

ト木戸(上手)の外にゆく。引違へて、又四郎孫市は、玄之進の死骸を

兩人にて擔ぎ來りて

又四 殿様。玄之進殿には此通り、

孫市 あれなる墓所のたゞ中にて、

又四 無慙の最期を遂られて、

兩人 御座ります。

民部 ナニ玄之進にも無慙を最期を致せしとぞ? (玄之進の死骸を見て) 扱こそ鶴

鶴組の奴原が、欺計には致せしよな。斯と案じて此民部、わざく迎に參

つたに、時刻後れて夫婦の横死、残念な事を致したなア。

ト打嘆き兩人に差圖して、玄之進お節の死骸を家の内に(二重)入させ、

民部は椽に腰を掛けて居る。

此時、奴黒内先に立ち、阿部川町の家主作兵衛、五人組のもの辰藏巳之助馬吉櫃次郎猿八、連立て（上手より）出来り、庭先（平舞臺）に座りて

作兵 へい嘗阿部川町家主、作兵衛に御座いまする。お召に付まして五人組同道いたし、

六人 罷出まして御座りまする。

民部 自分事は天野民部。今西立之進へ所用あつて、唯今是へ参りし所、立之進

夫婦には、不慮の横死、委細は家來共より承はり、早々奉行所へ申立て、

檢使の手續いたしてよからう。尤も葬送其外萬端は、此方にて致す程に、

家來等へ申談じ、不都合なき様取計らへ。

作兵 畏りまして御座りまする。

辰藏 エ、それじやア立之進さん夫婦の衆は、

巳之 人手に掛つて死なれましたか？

馬吉 道理こそ今しがた、泥棒だくと、

辰藏 大騒をした聲が、此方の方で聞えましたが、

猿八 それじやア其時、泥棒が寄つてたかつてお二人を、

五人 殺したので御座いましたか

ト驚いて、作兵衛と俱に兩人の死骸を見て、殘念の思を成す。

民部 コリヤ、家主。シテ今西立之進には、悴も娘も、子供は一人も無いので

あつたか？

作兵 ハイ悴は立太郎と申して、十歳で御座いました。昨年相果まして御座り

まする。

民部 ム、悴は死んだが、娘は無いか？

作兵 へい娘はお鶴と申して、當年十六歳で御座りまする。

民部 その娘は何れに居るな？

作兵 へい奉公に参つて居りまする。

民部 どれへ奉公に参つて居るか？

作兵 へい其儀は少々申上兼まするで御座りまする。

民部 ト頭を掻て、もぢく仕て居るを見て、民部はぢれ込で

作兵 實はさる御殿へ參つて居りまするが……

民部 何れの御殿じや

作兵 サア其御殿が

丹五 ト猶も言兼れば。民部が頗るせき込るを見て傍より

孫市 早く其御殿の名を言はつせよ。

作兵 言にくい事は御座るまいが。

五人組 其御殿と申まするは、

民部 ナニ吉原御殿と？ スリヤ遊女奉公いたして居るとな？

民部 左様に御座いまする。

民部 ム、はてさて氣の毒至極……こりや家主、玄之進夫婦の横死、その娘かた

告知せら。

作兵 委細承知いたしました。

民部 老かど此旨申付たぞ。

作兵 へい。

民部 それに付ても娘の身の上……コリヤ黒内、其方は明朝にも、我屋敷へ出入

なす大口屋曉雨かたへ罷越し、委細を話して同道いたせ。

黒内 畏りました、曉雨へ話し召連れまするで御座いませう。

此時民部はつか／＼と杉垣の邊にゆきて、垣根に落たる槍の鞘を取上げ、

黒内が差出たる箱提灯を左の手に取て是を見て

民部 こりや是、佐分利流の槍の鞘……

ト不審する。此時逸見鐵心齋は、下手の杉垣の内より、顔を半あらはし

鐵心

ト手裏剣を打てば。民部は早く身を外し、箱提灯にて受止めて（木の頭）

民部 ハテ怪しからぬ。

ト手裏剣を抜取る

つなぎにて直に引返す

(拍子幕)

(一引返し) 松葉屋内證折檻の場

享保十六年辛亥二月朔日の午後

但見る(本舞臺一面の平舞臺)正面(向ふ)三間の所は、四枚建の唐紙、時雨に松の繪(出入)其他は根岸の塗壁、座敷の三方は板廊下(舞臺の前つら一間通り、下手は附際の邊まで折廻してぬめを通し、ぬめの中は座敷の心にて薄縁を敷詰め、其外は廊下の心なれば下手は此ぬめに並びて横に唐紙を一枚たて置き。下手は板羽目の張物にて圍ふ)是ぞ新吉原の遊女屋松葉屋内證と知れたり。此に松葉屋の傾城丁山は座敷に居り、遣手のお熊は、引込新造のお鶴を、まごきにて後手に縛り、長烟管を手を持ち、目前に金子の包を置き、板廊

下(舞臺の前づら)にて折檻して居る。

(幕明く)

お熊 サアお鶴さん、お金の出處をお云ひなせよ、是ほど賣ても云はなけりやア、

お鶴 旦那さんへ言立て、炭部屋へつれてゆき、つるし上ても言はせませよ。

お鶴 こればツかりは、堪忍しておくんなんし。なんでおちきが枕さがしや盗を致しんせう、出處は正しいこのお金。

丁山 ム、出處が正しいお金なら、誰さんに借たとか貰つたとか、お前なせ其通り立派には言なませぬ。サア其出處を此でちやんとおいひなまし。

お鶴 サア其出處を言てよいなら、此苦みをせぬ中に、お熊どんに言ひますが、必らずいふな、言ふまいと、誓ふた詞があるゆゑに、聞ずと許しておくん

お鶴 なまし。

丁山 そりや出來ない、お鶴さん、お前が客衆を取る身なら、貰ふたお金も有たらうが、まだ振袖の引込衆、お客に貰ふたはずは無い。小遣が無いならば、

お鶴 ナせおいらん斯々ど、おちきに咄しは仕ないのぞます、瘦ても枯ても松葉屋の丁山、仕掛をまけても見繼であげる、おちきが心の、それにお前が其お

金、どうして持て居なますか。貰ふたなら誰さんにどうして貰ひ受ました
と、立派に此であいひなまし。

お鶴 そればツかりは言ふ事を、堪忍しておくんまし。

丁山 言はなけりやアお鶴さん。お前は客の枕捜しを志なましたねニ。

お鶴 なんでもさもし枕捜しを致しませう。

丁山 仕なけりやアちゃんと言なんし。丁山の座敷で世話をして居るお鶴さん、
泥棒したと云はれちやア、お前ばかりか、わちきまで噂に立つのが苦しう

ござます。サアさつぱりと、盗んだら盗んだとあいひなまし。

お鶴 盗んだではありませんが、貰ふた先を云ふだけは、どうぞ聞かずにあ

んなまし。

丁山 ニ、是ほどなんどり、わちきが聞くのに、白状せぬのは、ム、こりや矢ッ

ぱり泥棒さしやんしたのだねニ？

お鶴 イエ、何といつても、盗んだではありませんね。

丁山 (立腹して聲荒らげ)ニ、いけ強情なお鶴さん。お熊どん、此上は思ふさま

痛い目させて、責問しておくんまし。

お熊 さうで御座いますよ、こんな強情者は、ひどい責に掛なけりや、本統の事

は云はぬもの。サアお鶴さん、有躰にお言ひなさい、言はなけりや、こう

するよ

ト長烟管にて打つ。

お鶴 ヒー痛いよ。お熊どん痛いから、堪忍しておくんまし。

お熊 痛けりやア、お金の出處をお云ひなせニ。

ト身躰をつねり打ち擲けば。お鶴はヒー、と啼叫ぶ。此時松葉屋の亭

主與兵衛は奥より出来り、此躰を見て打驚き、お熊が持たる烟管を取上

て、ハタと睨みて

奥兵衛 オイお熊。同じ遊女屋でも、余が家は松葉屋といふ大籠。大妓衆は云ふに

及ばず、新造禿に至るまで、打てう擲をせぬが家風。夫に此お鶴、どんな

悪い事があつたか知らぬが、可愛想に、病ほうけて居る者を、縛り上げてこ

の折檻。コレお熊、チロン、格子のはした女郎と、振袖とは障が違ふぜ。

大躰にして置てくれい
お熊 モシ旦那さん。大妓がたを預つて居る其中は、遣手だけの勤向、否でもせ

にア成ません。まだ客人に出た事も無い鶴さん、一步は疎か、小粒一ツ
あらう筈が御座いません。夫が三兩と云ふ金をば、持て居るのが怪しい詮
議。丁山さんの大妓が呉さつしやつたと云ふでは無し、貰つた金と云ひ
ますから、そりや誰にと尋ねりやア、名前は云へぬと白状せず、てつきり
こりやア枕捜し。松葉屋のお二階に泥棒をする引込さん、夫こそ暖簾の疵
と云ふもの。是だから否な役だが、旦那さん、丁山さんに相談して、ぶち
折檻を仕て居ますよ。

奥兵 ム、。シテ丁山、お前にも其金の出處は、知れて居ないと云ふのかね？

丁山 どんとわちきもあたりが附かず。外の事なら兎も角も、わちきが座敷で世
話する振袖、枕捜しがあつた日にやア、二階の迷惑わちきの耻、それで
熊どんに相談して、尋ねて居るのでござんす。

奥兵 そりやア又變つたはなし。併し鶴に限つちやア、盗み泥棒する様な女で

無いと、此おれが儲な證人。ナンノ客衆を取らぬ引込だつて、貸手もあれ
ば呉手もあるもの。ニ、お鶴、丁山や熊に言ひ悪けりやア、そつと余に
云つたがよい、決して口外は仕ねエからよ。

お鶴 トヤさしく尋ねれば
旦那さん、有がたう御座ります。何にも客衆に貰ふた金、取つたでも盗

んだでもありませんが、其客衆が此事を必らず人に言ふまいぞと、きつい
口止め、それを云ふては其お方へ濟まぬ程に、少しの間、云ふ事を待た
されて下さんせいなア。

奥兵 ム、それじやア、其客衆に、云ふて宜やら悪いやら、聞て見た其上で、返
詞を仕やうと云ふのだなア……どうだ丁山、それで承知を仕てやんなせエ
な？

丁山 旦那さんが、それでよいと云なさりやア、わちきやア別に構ふ事はあり
ませんが、其代り今日ツきり、あの子の世話、わちきやアきつと断ります
ぞ。

與兵 そりやアお前の了見次第。ユ、お熊、それでお鶴の折檻を、許して遣ちやア、どうだらうな？

お熊 ハイ許すども許さぬども、そりやアあなたのお心まかせ。併し旦那さん、大妓がたの取締り、是から先ア附ける事が、出来ませんよ。

與兵 さう云はれちやア余も困るが、お熊、どうすりやア好んだい？

お熊 旦那さんの御威光で、お金の出處を、此子に言はせておくんなさりやア、それで好ので御座いますよ。子、大妓、さうじやア御座いませんか？

丁山 さうございますよ。お鶴さんが持て居た此お金、誰に貰つたか、どうして取つたか、それがきつぱり知れた上で、わちきが顔が立さへすりやア、好のさ

ます。

與兵 ム、よく分つた。エ、お鶴、いま聞ての通りだが、お前が其出處を言はなかつた日にやア、此家の取締、一軒への見せしめ、否でも酷い責に掛け、痛い目させて言はせにやならぬ。それをさせるが余も否だ。人にやア決して言はね工程に、余に内証で言ッてくれい。

お鶴 ト柔かに言へども。お鶴は只泣入て

旦那さん、濟ませんが。是はッかりは堪忍しておくんなんし。

與兵 衛は種々に尋ねれども、お鶴は同じ事のみ言て更に出處を白状せざれば、與兵衛も立腹の躰にて、立上りて

(聲荒く) 是ほど云ふのに白状せぬとは、見掛に似合はぬ太エあまアだ。コリヤお熊、此上は仕方が無エ、痛い目させて言はせて仕まへ

ト言捨て與に入る。お鶴は見送ッて

旦那さん、お腹の立のは御尤、どうぞ許して下さりませ

(丁山に向ひて) エ、あいらん。旦那さんだつて、此お子のいけッぶてエのにやア、呆れ切ッてあの腹たち。かうなりやア今一息、ひどい目に逢せて責まするが、可で御座いませうねエ？

可ども。思ふさま、痛い目に逢はせ、白状させておくんまし。ほん

に呆れ返ッた餓鬼さますねエ。ドレ與へいつて、旦那さんへ相談して來ませうか。

トお鶴を尻目に掛て、奥に入る。跡はお熊とお鶴の兩人に成て。お熊は再び煙管を取上て

お熊 サアお鶴さん。是からはお前とわたしと根くらべだ。旦那さんも承知の上

は、わたしの腕のつくだけ、ぶつてぶつてぶちのめし、何でもお金の出

處を言はせなけりやア、役目が立たねエ。覺悟を極てお居でなさいよ。

お鶴 たどひ打たゝかれても、是ばかりはお熊どん、堪忍しておくんまし。

ト泣入を。お熊は煙管を振上て再び烈しく折檻すれば、お鶴は痛に堪か

ねて、ヒョー／＼と泣叫ぶ。

此時曉雨はお鶴が泣叫ぶ聲を聞附けて (向ふより) 出來り、(花道にて)

此躰を見るより

曉雨 お熊、まて。

ト聲を掛て座敷に (舞臺) 來れば。お熊は會釋して

お熊 オヤ、あなたは藏前の旦那。

お鶴 ヤア曉雨さん、どうして此へは？

曉雨 お熊、なんでお鶴を打たゝますのだら。

トお熊が煙管を持たる手をぬち上れば

お熊 ハイお鶴さんが、枕搜しの泥棒で御座いますから、仕置をするので御座い

ますよ。

曉雨 ナニお鶴が泥棒だど？ふざけた事をぬかしやがるな (とお熊の襟がみを取

て引よせながら、奥へ向ひて) オイ亭主は居ねエか。奥兵衛どんは居ね

のか？

奥兵衛 (襖の中にて) ハイ亭主の奥兵衛は此に居ますが、お呼びなすつたは、ど

なたで御座います？(言ひながら、丁山附添ひ出來りて) ヤアあなたは藏前

の旦那さま、

丁山 オヤ曉雨さんで御座んしたか、どうして此へは來なましたねエ？

奥兵衛 何か二階であいらん衆が、旦那さまへ無調法でも御座いましたか。女子供

の事で御座いますれば、幾重にも御勘辨を願ひ上ります。

ト案じ顔して頭を下げて詫言すれば

お備 マアそらで御座いますね。
曉雨 與兵衛どん。お鶴は扱々感心な妓で御座るのウ。一步金で三兩の金子、あの妓にやつた客と云ふのは、誰でも無い、此曉雨で御座るわい。

與兵 へー。それではお鶴にお金を下すつた客衆と云ふのは、

丁山 主さんでござんしたか？

與兵 そりや又どう云ふわけで？

曉雨 その譯はゆつくりと話さうが、マアお鶴の細を解て下ッし。

與兵 承知いたしました（お鶴の細を解く）

曉雨 お鶴さん。ナゼ余に貰ったと、早く言ッて仕舞はなかつた。詰らねエ事を

隠して居て、酷い目に逢なすつたねエ。

お鶴 そうとは存じましたなれど、あいらん初に此事を、誰にもいふなど、主さんがきつう口止しなましたゆゑ、つい強情をはり通し、…且那さんお許な

すつておくんなまし。

與兵 なんの誤るにも及ばぬ事だ。そこで且那さま、其お金の仔細と云ふのは、

丁山 どうした事でござんすか？

曉雨 與兵衛どんも、あいらんも、聞て下ッし。あの鶴の物言なら立居振舞、

天晴の育ち振。親御は誰か知ねエが、是程の人からで、苦界に其身を沈む

るとは、よくの事であらうと、色氣なしの不便が起り、折ふし聞た身の

上ばなし、殊に病氣の不自由を、見兼て進ぜた見舞の三兩、それも中々受

取らず、是非にと言ふなら丁山に聞た上での事に仕やうと、何處までも侍

堅氣、僅か計のはした金麗々と言はれちやア此方の耻だ、黙ッて受て置な

せエと、無理に渡した此金子。仔細と云ふのは此通りだ。是で疑は霧たら

うね？

與兵 アッ厚い思召で下すつたお金。お鶴が何と聞かれても、言はなかつた次第

も分り是で疑は霧ました。且那さま、有がたう御座います。あいらんお禮

を云ておくんなせエな。
丁山 曉雨さん、お鶴さんへきつい信切、嬉しうございます。

ト口には云へど丁山は心中稍々嫉妬の思をなし、且は間の悪いので乙につんと仕て居る。お熊は居てたまらず

お熊 お鶴さんのあかりが立たら、私は御用濟。どりや二階へ参りませう。藏前の旦那、御ゆるりとなさいまし。

曉雨 ハ、アお熊。乙ウ世詞を云ふぜ。併しおれに搦まれて痛かつたらうが、勘辨してくれい。(懐中より金子を出し紙に包みて投出し)こりやア誤り賃だ。

お熊 ありがたう御座います。こんな事なら幾度でも宜う御座いますホ、ホ、ト世詞笑をなし、金子を戴き、奥(下手)に入る。曉雨は懐中より水引を掛たる目録包を取出して、丁山に向ひて

曉雨 あいらん。お鶴が神妙な心掛け、余もひどく感心したゆゑ、お前にも篤ど話し、親許へも見續がせ様と、此通り、包んで来た拾五兩、改めて當人へ取次でやつておくんなせエ。ト出せば。丁山は益々不機嫌にて

丁山 有がたうさますが、わちきの座敷で世話する振袖。主さんからお金を貰ふわけがありません。ト突戻すを止めて

奥兵 イ、ヤあいらん、そうで無い。常不斷あいらん衆が伽羅の無心と事替り、親へ見續の思召し。こんな尊いお金は無い。モシ旦那さま、此お金は與兵衛が慥にお預りを致しまして、お鶴の親へ、きつと届けて遣はします。

お鶴 お鶴、よくお禮をあいひなせエ。曉雨さん、段々の御信切、何とお禮を申さうやら、有がたう御座ります。

曉雨 まづこれで事濟だ。是から二階で一杯飲う。あいらんもお鶴さんもあいだなせエ。(と皆々立に掛る)

葛城 (向ふ揚幕の内にて) 曉雨さん、少し待て下さんせいなア
曉雨 あの聲は
丁山 葛城さん

ト原の座に就く。茲に(向ふより)松葉屋の傾城葛城(部屋着上草履)番頭新造豊花、新造葉山。禿うねび。芳野附添ひ、銚子盃を持たせ出來り(花道に)立止れば

曉雨 余を呼止たは、おいらんで御座エましたか?

葛城 アイわちきで御座んす、親方さんも御免なまし(ど舞臺に來り、曉雨の前に座りて) 曉雨さん、様子はみんな聞きました。餘り心の優しさに、嬉しいわ

まり葛城が、持せて來た此盃、一口のんでおくんなまし(ど杯を取上げて曉雨に指て) 曉雨さん、よう三兩のお金、お鶴さんに遣て下さんした。此里

の習ひ、千兩の無心、二千兩の身受、その全盛の取沙汰は珍らしうも無いけれど、信實こもつた情の見舞、聞て涙の翻るゝは、五丁町はじまつて、

恐らく今までごんすまい。僅三兩と云ひなますが、情の重みは百萬兩。曉雨さんも、よく遣なました。お鶴さんも、よくお貰ひなさんした。夫を

嬉しいと思はねば、女郎冥加に盡ますぞへ。誰に貰ふたどうしたと、お願

どんに賣られても、命に掛て言はなかつた、強さ、ゑらさ、夫でこそ本結

の

祝

曉雨

奥兵

善孝

曉雨

金太

曉雨

黒内

その御用は人中で...

の おいらん。モシ旦那さん、お目出度存じます。サア曉雨さん、其お盃、祝ふてわちきの親方へ差て下さんせ。

ト曉雨は盃を與兵衛に指て、葛城に向ひ

おいらん、よく祝つて下さつた。それで余の實意も知れ、お鶴の顔も立ち、

こんな嬉しい事は無いぜ。

大きに左様で御座います。

ト返盃する。此時幫閑善孝は鳶の金太郎および奴の黒内とを伴ひて急ぎ

出來り、曉雨に向ひて

モシ旦那、急に頭がお宅から駈付ておいでなさいました。

ム、そうか。金太、何か急用でも出來たのか。ヤア黒内さん、お出なせエ

まし。

金太 ヘイ唯今しがた、小川町の天野様から、黒内さんが急ぎのお使。

曉雨 黒内さん何の御用で御座いますね?

黒内 その御用は人中で...

曉雨

さうで御座いますか。それじやアあちらで篤くりと承はりませうか。

葛城

ト金太郎黒内を引つれて奥に入る。跡に葛城は丁山に杯を差して

丁山

成ほど、曉雨さんのなされ方、信切ではござんせうが、わちきに内證で見

葛城

舞の金、其内裏をさがしたら、どんな理があるかも知れぬ。今時の引込

葛城

さんは仕たり丁山さん。女嫌ひの曉雨さん、そんな否らしい處置ぶりが、あ

丁山

らう理はありますまい。それを乙に疑ぐるのは、お前の邪推と云ふものご

葛城

ます。オヤ葛城さん、お前は曉雨さんの肩を持ち、わちきを邪推とおいひなます

葛城

は、ム、分ツた、扱はお前は、曉雨さんに遠から岡惚したゆゑに、氣があ

つての事さますねエ?

葛城

こりやをかしい丁山さん。人中で口きくなら、相手をよく見てきなまし。瘦せても枯ても松葉屋の葛城。達入の意地づくでは、否な客にも比翼ござ、枕並ぶる事もあらうが、是まで唯の一度でも、人の客衆に指一ツ差た事はござんせぬ。それにお前は此大勢の真中で、わちきが遠から、曉雨さんに、氣があつて、岡惚したといひなました。サア其いりわりを今此で立派に言ておくなまし。

丁山

ト氣色を變て詰掛れば。丁山も膝立直して

アイ言ひやんした、お前が慥に其氣があるゆゑ、さうじやと言つたがどうぞんす。たどひお鶴さんをば内々で、曉雨さんが、なぐさましましたに違ひは無いと言ふた所が、わちきのお客にわちきの新造、なにもお前が構つた事はありますまい。夫に何ぞや、女嫌ひの曉雨さん、そんな否らしい處置振があらう理がない、お前の邪推と云ふものだと、人も頼まぬ取なし詞。こりやア葛城さん、的きり誰ぞに頼まれて、お鶴さんの肩持か。さうで無いなら、曉雨さんに氣があつての手管であらうと、云ふたはわちきの誤で

葛城

はあ、まゝと思ひますね。

筋の違つた押賣は、餘所へいつてお仕なまし、お鶴さんの煩ひを不便に思つた曉雨さん、情深い心意氣、察して見れば涙が出るほど優しい親切。宜う遣てくんなました、宜言はずに居なましたと、譽たはわちきが當然。全躰ならお前が手をつき、お禮をいつてよい所。それに引かへ不足らしい焼餅詞、馬鹿々々しいじやアありイせんか。

丁山

トやり附れば。丁山は急腹に成て

奥兵

ト立掛るを。奥兵衛止めて

善孝

それさ丁山、何をするのだへ。先きから開て居たが、思はぬ二人の言争ひ、少しお前の口が過ぎる。ナント善孝、貴公もそうは思はぬエかのう？

善孝

そうで御座いますね。こりやア丁山さんのおいらんが、お宜しく無いやうで御座いますね。

丁山

丁山は猶も悔しけれど、わざと氣を入替て

葛城

成ほど、何にもわちきが悪うございました。お鶴さんを疑つたも、葛城さんに狂つて掛つて言過たも、みんなわちきが淺果ゆゑ、今改めて誤ります、堪忍してあくんなまし。

丁山

さうおまはんの心が解りやア、わちきもそれで氣が濟めば、誤る事はありません。

葛城

そこで葛城さん、わちきがお前に一ツのお頼み。どうか開入てあくんなましな。

丁山

わちきに頼みと言ひなますは？

外でもありイせんが、お前が今も譽そやした曉雨さん、わちきの様な張る意氣地も無い者の客衆にするのは不釣合。それに又立派な育のお鶴さん、わちきじや世話も出来ぬに由て、今日限り手を引て、わちきの方から断ります。是から先は葛城さん、どうなりと宜やうに、お二人さんを扱つて、捌を附てあくんなまし。

善孝 おいらん、そりやア可ますまい。そうなつた日にや猶更以てもの事に角が立ちます。

豊花 唯このまゝに此事は、原の通りに仕た方が、宜からうと存じます。

二人 ト慰むる。與兵衛はお鶴と兩人にて此場の仕宜いか成る事かと案じて居る。葛城は平氣にて

葛城 ホ、ハ、丁山さんと仕た事が、改まつての切口上「曉雨さんやお鶴さんの扱ひは、おいらん、どうぞ機嫌を直し、原の通りに仕なんし」と言つたら都合がよからうが、頼まれて見りやこの葛城、立派に承知しやんした、何にもわちきが引受ませう。併し今言た詞もあれば、釋迦一代曉雨さん、わちきの客衆にや任せませんが、今夜からして改めてお鶴さんの客人にわちきが頼んで仕ますぞへ。お鶴さんも又わちきが世話して、随分派手に三月から、仲の町へ突出して、大夫職にする程に、安心してお居なまし。ト立派に返答すれば。丁山は愈々心に怒を含みて

丁山 ハテ口廣い葛城さん。見事さうして見せなますか？

葛城 丁山さん、御念には及びませんよ。

與兵衛 ム、それで話はさつぱり極つた。丁山も、もう言分はあるまいから、早う二階へ往つたがよからう。

丁山 アイ往けど云ふなら往ますが。旦那さんも、大そう葛城さんの肩を持ち、わちきの顔を潰しなますね。

與兵衛 何も潰す事はありやア仕ねえよ。原はと云へばお前の心のひがみから、何かがひがみでござんすへ？

丁山 ト此度は與兵衛に狂て掛る。此時丁山の禿吳羽は向ふより出來りて

吳羽 おいらんへ、あの釣鐘さんが來なましたぞへ。

與兵衛 ナニ釣鐘の親方がお出なすつたぞ。サアおいらん、早く顔を出したがい、ぜ。善孝お前そこまで、おいらんを見て上てくんなせえ。長まりました。サアおいらん、お座敷の外までお供を致しませう。ト勸むれば。丁山は是を汐に立上つて

丁山 どれ釣鐘さんに逢て来やう。

ト善孝、禿、附添て向ふには入る。入違ひて曉雨は、黒内金太郎を連て奥より出来りて

曉雨 それじやア余は是から直に黒内さんと御一所に天野様へ往と仕やう。お寺の方から都べての事は、

金太 萬事わつちが老父と兩人で、お差圖通りに仕て置ますから、安心しておいでなせエまし。

曉雨 ム、萬端ぬかりの無い様に、金太 承知しました。昔さん御免なせエ。

ト急ぎ向ふに入る。奥兵 旦那さま。どなたか御不幸で御座いますか？

曉雨 ナーニお屋敷の折口よ。喜城 曉雨さん。委細の事は聞なましたか？

曉雨 話を仕ながら聞て居たが、あいらんの達引、忝うござエますぜ。……時

にお鶴、お前の家から急の使は来なかつたか？

お鶴 イ、エ使も何も来ませんが。なぜぞますねエ？

ハテ使の来ない筈は無いが（不審する）此時若もの喜助、急ぎ（下手より）来りて一寸一禮して、手紙をお鶴に渡して

喜助 ヘイお鶴さん、お宿から急のお使、お目に懸り度と待て居ますぜ。ト言捨て直に（下手に）引戻す。お鶴は手紙を披見し、悔りして

お鶴 エ、それでは昨夜、父さんも母さんも、人手に掛つて……ト屹相を變へ狂氣の如くに成て立上る、曉雨は引留て

曉雨 その變事は浮ッかり世間へ言はれぬ事。余も其事をたッた今お屋敷からのお知せで、聞てびつくり仕た所だ。

喜城 エ、そんならお鶴さんの両親が、變死を仕たと云ふ知せか？

ト皆々驚き、お鶴は泣入る。

晴雨

お鶴さん、泣いて居る所で無い。使に逢つて内々で、篤と様子を聞かせよ。

與兵衛

承知しました。サアお鶴、余と一所で使に逢て、委細の様子を聞と仕やうぜ。

お鶴

ト立上れば、お鶴は泣ながら無念の色をなして

何奴

何奴なれば、やみくどわが父母を殺せしか。女でこそあれ親の敵

ト無念

の思ひをなす

晴雨

(立上りて) それでは直に屋敷へ參つて、御用を短はうか。

葛城

此上どもに晴雨さん、お鶴さんの方に成て

晴雨

ム、町人なれど藏前の晴雨だ(葛城が持出たる脇差を取て差すを木の頭)

安心

しておいでなせよ。

ト

黒内を連れて(附際) ゆき掛る。葛城は見送る。お鶴は泣入る。與兵衛は介抱する

(拍子幕)

○第四幕

(一) 新吉原揚屋密談之場

享保十六年辛亥三月廿日の夕方

此は新吉原の揚屋森田屋の奥座敷(本舞臺四間常足の二重)。三方は折廻て椽側。下手の椽は箱廻つて表(下手)に續く(出入)。座敷(二重)の正面上手の間は塗壁にて下地窓を附け。其次の二間は四枚建の襖(出入)。其次の間は塗壁なり。庭(平舞臺)の上手は板塀に切戸を設け(出入)。下手は袖塀にて見切り。沓扱飛石などありて、下手には鐵の大燈籠をすゑたり。

お仙

此に仲居お仙(年増)お豊(島田)煙草盆座蒲團を並べて居る(幕明く)

お豊

お豊どん。今日は鶺鴒組の逸見さんがお出に成るはず、それで松葉屋の薄雲さんが、仕舞になつてあるゆゑ、もう入らッしやる時刻だぞへ。

お豊

オヤさうですか。道理でさッき松葉屋の吉どんが、お客様はまだお越にな

りませんかど、聞きに來ましたよ。

お仙 さうかへ。あたりまへのお客なら始末が宜が、人も否がる鶺鴒組、この上に少しの事が間違つても、それをどっこに、ものいひ附け、喧嘩を仕掛ける逸見さん、あの御連中には困り切るねえ。

お豊 ほんとうにさうで、すよ。其上に薄雲さんは突出しの初日から、曉雨さんの初名染、

お仙 さうさ。お鶴さんと云つて引込の時分から、葛城さんが世話をして、曉雨さんの相方と約束きめた譯ある中、それをあの露面の逸見さんが、いくら呼んで口説いても、靡く事はあるまいよ。

お豊 それを知らずに今日も亦、薄雲さん呼び出すとは、
お仙 馬鹿げきつた事だねえ。

兩人 ハ、ハ、ハ

お吉 ト笑ひながら囁を仕て居る。此時奥より仲居おきち (島田)
お客さままでございますよ。

お仙 お客さまはどなた?

お吉 鶺鴒組の逸見様。

お豊 オヤ噂をすれば影どやら、

お仙 うつかり囁は出來ないねえ。サアお吉どん、お客様をおつれ申しな。

お吉 アイ

ト奥に入る。お仙、お豊は上手に客座を設くる。此時正面より逸見鐵心齋 (大小伊達衣裳) 先に立ち、入谷丹五郎、根岸松兵衛、附添ひ出來りて、着座すれば

お仙 逸見さま、入ッしゃいまし。

お豊 いつも御機嫌で、

兩人 お目出度ございます。

鐵心 ヤアお仙にお豊か、相替らず美しいのウ。

丹五郎 そりやア先生、その筈で御座ります、此節は春氣のせいか二人とも、

松兵衛 地色が出来て、大うかれで御座ります。

観心 ハ、ハ、二人ども地色が出来て、浮れて居るか、そりやアお楽しみだ、それ

お仙 アラ嘘で御座いますよ、どうして〜私しども見た様なお籠に、地色なん

そが、

観心 出来ますものでは御座いませんよ。

誰が見ても唯は置かぬワ。

お登 そりや旦那、薄雲さんのおいらんの事で御座いませう。

お仙 そうども〜、旦那のお目には、外の女は入らア仕ないよ。

丹五 何にもそうだ、薄雲には、先生のきつい惚やう、

松兵 刀に掛ても言ふ事を、聞かせにや置かぬ御決心。

観心 二人の申す通り、殊に藏前の曉雨とやら、當時賣出しの侠客、その名染ど

聞からは、猶更以て此方が手活の花に致さねば、白柄大小神祇組、その組々

〜聞えても、鶴鶴組の名折れに成るワ。それは格別、薄雲はまだ参らぬか

のウ?

お仙 お迎を出して御座いますれば、薄雲さんのおいらんも、

お登 もうお出で御座りませう。

此時仲居のお吉、下手様側より出来りて

お吉 お仙さん、おいらんが入ッしやいました。

ト知らせ直に引返す

お仙 オヤ旦那、おいらんが入ッしやいまして御座いますよ。

ト其座を設くる。此時下手様側通ひに松葉屋の傾城薄雲 (伊達傾城の掃)

番頭新造豊花。禿金彌附添ひ出来れば

お仙 あいらん、お早う御座います。

お登 こちらへ入ッしやいませう。

ト丁寧に挨拶して着座させる。薄雲は氣に入らぬと云ふ軀にて座に着き

逸見さん、皆さん、よう來なましたねエ。

観心 ヤア薄雲、いつ見ても美しいが、今日は殊更あてやか〜、

丹五 誠まことに天女てんじょ天降あまくだりり、花はなふる里さとへ御來臨ごらいりん、

松兵 歌舞かぶまひの菩薩ぼさつの御影向ごかげむかひ、

丹五 先生せんせい御恐悅ごおそえつに、

四人 御座ござりまする。

鐵心 忝かたじけなくい。こりや仲居等ななぢらども、薄雲うすぐもへ杯さかづきを侷すくめてくれい。

おお仙 畏かしこまりました。

鐵心 ト奥おくに入り、直ただにお吉きちと三人さんにんにて、酒肴さかづきおよび吸物膳あぶりものぜんを持出もし。鐵心齋てつしんさい

薄雲うすぐも丹五たんご郎らう松兵衛しょうべゑの前まへに据すまる。鐵心齋てつしんさいは盃さかづきを取上とりて

鐵心 どれ我等われら毒味どくみを致いたさう (お仙おせんの酌しやくにて一杯一杯を傾かためて) サア薄雲うすぐも、めで度たふさ盃さかづき

さそう。

薄雲 ト出いせば薄雲うすぐもは一ひと寸すん見みて

鐵心 盃さかづきは嬉うれしいが、あちまやア御酒ごしゆはきらいごます。

鐵心 酒しゆが嫌きらひとあるならば、我等われらが助たすけて遣はなはす程ほどに、飲のむ風ふう似にをして口くちを附つや

れ。

薄雲 助たすけてもらふもきつう嫌きらひ、マア堪忍かんにんしておくんなまし。

鐵心 ハテ扱夫さくまはすげ無ない挨拶あいさつ、然しからば盃さかづきだけでも受うけてもらはう。

薄雲 サア其杯そのさかづきを受うけるのが嫌きらひゆえ、...

鐵心 ム、それじやア其方そのまへは身共みどもが盃さかづき、受うけるが否いなじやと申ますのだなア?

薄雲 逸見いつみさん、悪わるう思おもつておくんなますな。

鐵心 トつんと仕して煙草えんそうを吸すて居ゐる。鐵心齋てつしんさいはむツと仕して

薄雲、けしからぬ其方そのまへが挨拶あいさつ、この逸見いつみ鐵心齋てつしんさいがさした盃さかづき、受うけぬと申ます

は?

薄雲 ト立腹たつはらの躰たはを見て

鐵心 ア、申し逸見いつみさん、お差さなされた盃さかづき、受うける受うぬは客きやくと問夫もんぶ、我儘わがままいふも

口舌くちぜつのたね、裏うらと表あはの仲ななぢの町まち。

お仙 其心そのこころを推おもひして、一寸いちすんお合あを致いたしませう。

丹五 ム、成なほど。こりやア其方そのまへたちが申ます如ごとく、口くちと心こころの裏表うらあは、此節このちぶねはやる小

唄うたにも「憎にくい」は可愛可愛の裏うらよ。

松兵衛 否じやくは又その裏よ。泣てあどす見すは裏の裏」

豊花 その裏ふかい心の底、さう性急に聞んしても、言はぬが女郎の意地と張

薄雲に目くばせして其意を悟らすれば。薄雲もそれと覺りて

薄雲 ナント逸見さん、さうしたもののじや御座んせぬか。

鐵心 鐵心齋を秋波にて見れば。鐵心齋は少し機嫌を直して

ム、何様、薄雲が嫌ひの酒を、飲めと云つたは身共が不祥。然らば盃は致

すまいが、煙草を一服吸付てもらほうか。

薄雲 ト手を出せば。薄雲は手に持たる煙管を見て

逸見さん、お安い御用でござんすが。あちきが持た此きせる、煙り煙間の

薄雲なれど、心は深い舞鶴の、羽搔に包む思ひ草、人に許さぬ吸口は、

がわつらへの脂返し、…

何と申す？

薄雲 ハ、ハ、ハ、お客に聞た煙管のはなし、堪忍してあくんなまし。

ト煙管をわきに置く。鐵心齋又々むツとして

鐵心 煙草までも否じやと申すか？

お豊 これは仕たり、逸見さんの腹立上戸、何ぞと云へば、二言目には煙貪聲。

マアよう思ふてもお見なまし、此薄雲のあいらんは、花開きの突出して、

まだ一月も立たぬ勤め、言はし廊の蕾の花、この大勢の人中で、盃事や吸

附煙草、いくら心に思ふても、耻かしいのが初心のつね。主が堅いお武家

でも、ちツとは其等を推量したがようござますよ。

ト慰むれば。鐵心齋は諾いて

鐵心 いはれて見ればさうでもあらうが。併し薄雲には、まだ突出しの其前から、

曉雨とやら云ふ名染の客が…

お仙 ア、申し旦那、お客の名前はひどい禁句、知つても言はぬが粹の粹、

お豊 不漸の粹にも似合はぬ詮議、

お吉 お止になすつて、

三人 御座りませいなア。

鐵心 扱こそわいらア申合せ、粹ごかしで嗜ませ、薄雲の肩を持ち居るな。イヤ

鏡心

言ふな薄雲。その曉雨は名染の客でも、女に枕を交さぬと、誰も知つた變りもの、深い中とは言はせぬぞ、よし又深い中にもせよ、情を賣るが其方の勤め、優しく言へば附け上り、四の五の言つたを是迄は勘辨して居たれど、モウ此上は容赦いたさぬ、否と云はふが應と云はふが、揚代拂つた客の威光だ、從ばせずには置ものか

薄雲

ト引寄に掛れば。薄雲は其手を振拂つて
こりや可笑い逸見さん、此薄雲と曉雨さんとの二人が中、枕交はすか、交さぬか、人目許さぬ圍の内、誰が知つて居りますかへ、深いも深いも眞實神かけ深い中、並大躰では御座んせぬぞへ、それをば主が横合から、從がへ靡けといはんしても、情は賣れど心まで、賣らぬが里の意氣地でござんす、見るから否な逸見さん、揚代拂ふたお客の威光、見せらるゝなら見せなまし。テモ氣障な人さんで御座んすぞいのう。

鏡心

ト煙草を吹掛けて澄して居れば。鏡心齋は又々立腹して
おのれ小女郎の分際で、おれに向つて其惡態、

庄兵

ト立掛る。此前より庭先(上手)の切戸を開て、釣鐘庄兵衛は(伊達衣裳、一刀、尺八)顔を出して伺ひ居たるが、此時聲を掛けて
逸見さん、マアお待ちなせえまし。

鏡心

ト飛石傳ひに出來れば
ヤアそこへ來たのは釣鐘の庄兵衛どんか。サア此方へ通りなせえ。

庄兵

御免なせえまし(庭先に入來り、椽に腰を掛けて、薄雲を見て)
ヤア薄雲さん、モウ歸えんなさるのかね?

薄雲

サア釣鐘さん、今も今どて逸見さんが、わちきを捕へて、從がへ靡けと言なんすゆえ……

庄兵

(薄雲が詞に冠せて)それで氣合が悪いに由て、歸り度と云ふのなら。の
ウ逸見さん、遠慮なしに歸えれと云つておやんなせえまし

鏡心

ト心ありげに云へば
歸り度なら歸しも仕やうが……

庄兵

薄雲さん、此は宜から歸えんなせえ。

是を汐に薄雲は立て
逸見さん、それでは、わちきやア歸りますよ。釣鐘さん、ゆるりと話して
おいでなまし

ト(唄に成て)薄雲は椽傳ひに下手に入る。鐵心齋は見送ッて、庄兵衛
に向ひて

鐵心 釣鐘、なんで貴様は薄雲を歸したのだへ?

庄兵衛 逸見さん、あめエさんも、あんな子供をつかめエて、面白もねエ無理口説、
失禮ながら、人に知れると男の器量が下りませ、それで歸したのでござ
エます、そりやア格別、東屋まで御使で、達てわつちに逢度エとお前さん
の口上は、どふいふ御用で御座エますね?

鐵心 ム、折入ッて鐵心齋、貴様に相談し度と云ふは(あたりを見廻して)コウ
釣鐘、兼て貴様に明した通り、此鐵心齋は敵持、ふとした喧嘩の遺恨なら、
阿部川町の浪宅で、討果したる一人の浪人、その浪人の娘と云ふのは、儘
にそれとは知れぬども、薄雲ではあるまい歟と、推量ばかりか世間の噂。

庄兵

尤もあれが親の敵とは、夢以つて知らぬ様子、知つた所が高が女郎、恐し
い事は少しも無いが、由断のならぬはあの曉雨、去年から淺草で、人に知
られた賣出し男、それが尻を押した日には、鐵心齋が身の大事、それ故にこ
そ曉雨めの、名染と知つて薄雲に、強て逢はうと呼出すも、色に事よせ様
子をさぐり、二ッには曉雨めを遠ざかせん深き計略。併し其計略が外れ
て見れば、釣鐘、この先の安心は、どうしもので有らうかのう?

鐵心 初めて聞いた理由因縁。薄雲は女の事、恐しくも怖くも無いが、何かに邪
魔はあの曉雨、わつちも彼奴には遺恨のある中。よう御座エます、明日と
も言はず今夜の中に、不意の喧嘩で彼奴が命を...

鐵心

ト耳に口よせ叫けば。鐵心齋は打詰きて

庄兵

仲の町にて喧嘩を仕掛け、仕損じたる其時は、
歸りを待伏せ大勢で...

鐵心

ト制して、再び庄兵衛に叫く。此時奥に人聲あつて

お仙 マアお待なさいまし。お光を持って参りますから、

ト言て、お仙、お豊燭臺を持出し、其後より丹五郎 松兵衛 大醉の躰

にて出来り

丹五 イヤサ先生には先程よりして、薄雲とお差向ひ、

松兵 志つばりのお長話し、餘り長い御身の毒、

お豊 お邪魔いたしに、

四人 参りました。

ト燭臺にてすかして見て

丹五 ヤア貴殿は釣鐘、

松兵 庄兵衛どの、

お仙 どうして此へは、

お豊 ごぞんした？

庄兵 薄雲の名代新造よ。どれお暇と致しませうか。

お心 そんなら釣鐘、

庄兵 逸見の先生、

お心 必らず手違ひ無い様に……

庄兵 ヘエ承知でござえます (庭に出て空を眺めて) マアばらく降て来たぜ

お仙 それじやア親方、傘を上げませうか？

庄兵 ナーニ傘にやア及ばねエ、ついそこだから、

お仙 そこでもあらうが、親方を濡させては、

お心 丁山に濟まぬであらう。ワハ、ハ、ハ

お豊 ト笑ふ。此前にお豊は奥に入りて、直に紺蛇の目の傘を持出して

ト差出せば

庄兵 こりやア忝けねエ。

ト請取て、ポンと開き (木の頭)

一寸逢ッて来ませうか。

ト鐵心齋と顔を見合せて意中を示す。(此道具廻る)

(二) 同

仲の町喧嘩の場

同日の夜

中央より上手に掛けて仲の町引手茶屋和泉屋の店先(四間常足の二重)を斜に見る。店(二重)の正面上手の二間は四枚建の障子にて。下手の二間より折曲りて塗壁にこれ花鳥の彩色繪を帯腰に張る。家軀の上手は板塀にて見切り、下手少し斜に青竹の圓を廻し、櫻の植込、花盛にて、下には山吹海棠等の下草ありて。所々に雪洞を附たり。家軀と竹圍の間は横町にて此所には手桶を飾つたる天水桶を置き。其先は下手より奥に掛けて仲の町の景色(中遠見火入)茶屋の前(平舞臺)には床几二脚ほど並べたり。都て仲の町花盛り夜の躰なり。

此に薄雲は床几(正面)に腰を掛け、番頭新造豊花、常の新造袖浦、禿金彌いろは左右に附添ひ。椽先には和泉屋の亭主新兵衛腰を掛け。下手には松葉屋の若い衆、薄雲の箱提灯と長柄の傘を持。新兵衛の側には、見番者お直、お愛立掛けて居る。(道具止る)

新兵衛は烟草盆を薄雲の前に出して
 お直 あいらん一服お上りなさいまし。

薄雲 ありがたうございます

お直 あいらん、よい安排に雨も止まして御座いますが。道が悪いので、道中は

お困りで御座いませうねえ。

薄雲 ナニ森田屋から此までだから、近うございますよ。

お愛 森田屋のお客は、あのげぢくさんで御座いましたか?

豊花 お愛さん。あれだから、あいらんもきつう否がつて居なますよ。

新兵衛 げぢくさんとは、どなたの事だね?

袖浦 親方、知らッしやらないの。それ鶺鴒組の逸見さんの事さアねえ。

薄雲 これさ、お客の噂は外でせぬもの。そりやアさうと、曉雨さんは、もう來

さつしやりそうなものさますねえ。

新兵衛 さやうで御座います。もうお出に成る時分、

お直 待つ身はほんに長いもの、

お愛 あいらんお察し、
音々 申まする

薄雲 此時上手にて獨吟の唄聞ゆれば。薄雲は耳を濟して

お直 オ、よい聲で、三味線もきつう巧いが。お直さん誰ぞますねエ？
左様さ。唄はたしかに河東節の夕丈さんで御座いますか。三味線は、ハテ

お直 ナお愛さん、誰だらう？

お愛 あの撥音は、お綱さんらしいワ。

お直 さうく、お綱さんに違ひ無し。二人どもに、

兩人 むまいねエ。

豊花 夕丈さんにお綱さんじやア、巧いも道理、ことにあの唄は、

油油 あいらん、聞いて居て、よい心持で、

兩人 御座いませうねエ。

新兵 あの唄は、此節藝者衆が皆唄ふて、大そうはやるが、あいらんに理がある
のかね？

お直 オヤ親方あの理を知らないの、そりやア驚いた。あの唄はね、大きいあいらの葛城さんが、曉雨さんの事をほめて、お作りなすつた春雨傘と云ふ小唄。

お愛 それを夕丈さんが、節附をして唄出したが始りて、今じやア此の廓の藝人で、春雨傘を知らぬものは

兩人 ありませんよ

○春雨傘

「春雨に。なかばつぼめし。蛇の目の傘の。ぬしは誰かや舞鶴の。紋は誰かや。問はでも知れた曉の。雨に濡たる鶯か。啼音や聞かん。聞たぞへ。」主の情の恵の雨は。人の命のつなぎ緒や。三すぢの糸は細くとも。音色はゆかし忍び駒。男の中の男とは。優しい中のやさごころ。

此獨吟の中よき頃合に、向ふ(揚幕)より大口屋曉雨(銀針金のなまじめ、黒羽二重、紅裏、舞鶴の紋、淺黄無垢の下着、一刀、尺八、印籠、溢蛇目の傘、柱の下駄)出來り花道にて宜敷ありて、此方(舞臺)に來れば

薄雲 曉雨さん、

女皆、おいでなさんしたか。

曉雨 これはいく、お揃でエすな。

薄雲 サア此へ、

女皆、おかけなさんせいなア。

曉雨 御免なせエ (椽臺に腰を掛け、薄雲が吸附て出したる煙管を取て飲ながら)

あいらん、どこの歸りで御座エますな?

薄雲 森田屋の歸りさんすが。曉雨さん、今日といふ今日、わちきもつくく困

り切りましたア。ねエ豊花さん、

豊花 そうごます。あんなる困らッしヤツた事は、

油浦 ありませんよ。

曉雨 ハ、ハ、ハ、どうで廓は苦界だもの、客に困るはめづらしうもなんとも無い

事。併し森田屋の客衆と云ふは、あいらんの身には大事のお客、ういもつ

薄雲 ト意あり氣に云へば。薄雲も思入あつて

心に願ふ本望を、達する爲の手掛りに...

曉雨 これさく、薄雲と仕た事が、あれを相手に餘所ほかの、あのろけを受け

させるとは、そりヤア餘りひどからうぜ。ハ、ハ、ハ、ハ、

豊花 あれさ曉雨さん、あいらんは、のろけどころか、きつい難儀、

油浦 知つて居ながら、その様にかからかうのは、

兩人 罪ごますよ。

曉雨 ハ、ハ、ハ、二人までが眞目に成て、言分をする中がをかしい。そんな事は

新兵 どうでも宜から、一杯のんで騒ぐと仕やうか?

曉雨 それが宜しう御座りませう。併しあいらんは?

外に客衆も無いやうなら、わしと一所に夜櫻を、ゆるりと見物お仕なせエ

薄雲

お直 (豊花に相談して) それじヤア皆の衆、遊んで居てもよう御座んすか?

よい所か、わたくし等はあいらんの御一座が、

お愛

何より嬉しう御座いまする。

ト皆々立掛らうとする。此時向ふより期間善孝急、ぎ足にて出来り、(花道に止り) 此方を見て

善孝

ヤア旦那も、あいらんも、此方に御出で御座いましたか?

曉雨

善孝、何か用でも出来たのか?

善孝

ト(舞臺に) 来れば、

薄雲

ナニ香具山さまからあちきへ文(不審して文を抜き一讀して) 曉雨さん、

内証で讀であくんまし。

ト出せば、

曉雨

アツ天野様、イヤ香具山様の御信切、ありがたい思召し。それじやア薄雲、

お前は直に善孝と、山口巴へ一所に往つて、香具山様のお目に掛り、心の

中の思のたけ、まつばり話して来るが可せ。

薄雲

そんなら往くと仕ますぞへ。

曉雨

善孝、御苦勞ながら、案内してやつてくれら。

善孝

承知いたしました。サアあいらんも出なさいまし。

新兵

あいらん、

三藝者

おまづかに、

ト送る。

薄雲は善孝を先に、豊花 袖浦 金彌 いろは等、を引つれて

(向ふに) 入る

曉雨

薄雲が居なくなつては、此で飲むのも野暮な詮議。いつそ是から金子へ任

つて、好きなものでも眺えて、ゆるりと飲むと仕やうで無いか?

お直

金子はけつかう、

お愛

直にお供を、

兩人

いたしませう。

新兵衛

家がひどく忙がしう無いやうなら、お前も一所に行かぬか?

新兵

ヘエ忙しくつても金子なら、なんでも、お供を致ませう。

ト立掛らうとする處に、向ふより釣鐘の子分、突坐の九五郎出來り、暖簾の前に立て、大聲にて

丸五 ヤイ此家の亭主新兵衛は内に居るか？取次して貰はうぜ。

新兵 ハイ新兵衛は私で御座いますか、何御用で御座いますか？

丸五 用と云ふのは外でも無エ。吉原町は愚かな事、今戸の端の瓦やき、山下に出る豆蔵まで、其名を知つた稻妻組、音に聞えた釣鐘親方、曉雨に逢つて、

話しをせにア成らねエ用があるゆゑに、唯今これへお越しになると、曉雨にしつかり取次で貰はうぜ。

新兵 ト言捨て直に引返す。新兵衛 お直 お愛の三人は驚いて

新兵 旦那、唯今の使の口上、稻妻組の釣鐘親方、

お直 丁山さんの事からして、もしや旦那に遺恨を含み、

お愛 喧嘩を賣りに此家へ、押て來るのじや、

二人 御座りませんか？

ト案じる。曉雨は平氣にて

曉雨 なんの、釣鐘が此へ來て、喧嘩を賣らうと仕た所が、それを浮ッかり買う

やうな、曉雨じやアない程に、氣を揉まげに居たが宜いワ、併しわざ／＼

先觸をよこしたを、聞捨に仕て置て、金子へも往かれめエ、退屈だが少し

待て居やうか。

ト椽臺に腰を掛直す。新兵衛はお直お愛をつれて暖簾の中より(二重に)

上る。

此時向ふより釣鐘庄兵衛(伊達衣裳一刀尺八)先に立ち、子分撞木の櫓

藏龍頭の龍太附添ひ出來る(花道にちよつと止る。)

曉雨は庄兵衛等が來るを見て、大聲にて

ア、臭エ、オ、臭エ、素的に臭エ、狗の皮の匂がするわい。オイ

新兵衛、早く伽羅を持ッて來てくれい。

ト鼻をつまみ袖を打振る。是を聞て庄兵衛はぎツくりする。新兵衛等は

不審の顔をして

ハテ今ごろ掃除が來るはずは御座いませんが？

お直 それに私等には何にも句は致しませんよ。
お愛 旦那の鼻が、どうかなすったので。

二人 御座いませう。

ト香箱を出せば。曉雨は取て香箱の底を叩き、一度に伽羅を煙草盃の火入の中に入れる。庄兵衛等は此方(舞臺の附際)に近づき来れば、猶々臭く成て来た。此生皮の匂と来ちやア、伽羅沈香でも消せ無エわい。花の廊の仲の町、めつた矢たらに、大猫の生皮をほぎ、大げふに歩行かせるとは、宜ねエ事だ。ア、臭エ、たまらぬエ匂だ。此鼻が今にいざれて切れそうだわい。

ト袖を振て鼻を掩ふ。庄兵衛は、玄つと立て曉雨が所爲を見たりけるが、胸に徹へたと云ふ思入あつて、氣を入替て、ずつと曉雨の前を索通りして、上手に入る。是を見送つて

曉雨 私し共には、何の匂も仕ませぬに、旦那はまきりに臭いくと仰しやつたし。

お直 それに又、稻妻組の釣鐘さん、わざく使を出しながら、
お愛 何にも言はず、索通りしていかつしやつたは、どうした理で、
三人 御座りまするか?

曉雨 ナニお前たちが知つた事じや無エよ。(少し考へて) ム、めつたに此は動かれぬエわい。

ト腕くみして居る。折から向ふより逸見鐵心齋(伊達衣裳、大小、駒下駄)出来り、(花道に一寸止り、直に舞臺に來りて) 曉雨の顔を見て、わざと驚きながら、床几に腰を掛て

曉雨 曉雨と云ふのは、治兵衛汝であつたか。時に治兵衛、汝に逢たは丁度幸ひ、此一角も當節は隠居いたして逸見鐵心齋、鶴鶴組の兄貴様、その鐵心齋が汝を見かけ、頼み入たい事がある。

ム、逸見鐵心齋と、占者じみた名を附て、押あるくのは汝であつたか。併し占ひでも人相でも、家業になればそれが重疊(鐵心齋の身なりを眺めて) 羊かん色の破羽織、髪も見えない古袴、その姿に引替て、大そう立派

な身の廻り。汝、占ひで餘ッばと錢が取れると見えるな。そりやア格別、

おれに頼みがあるよ云ふなア、又一步借てくれいと云ふのだなア。

イ、ヤもそつと高い品物だ。汝が名染の薄雲を、おれに譲るか、それが否

なら、姉女郎の葛城を、おれが相方に取持ッか、二ツに一ツの返詞を聞

か?

イヤ何事かと思つたら、女郎買の相談か、薄雲でも、葛城でも、正札附の

賣物だ、買たいと思ふなら、汝勝手に買に往け、引手茶屋は、ありやア仕

ねエよ。

ナンノ原を糺せば、おれが家の飯焚が、手足を洗ふ練までも、持て参つた

出入の札差。女郎買の使ぐらゐ、ヘいと云つて勤めるのは當然だ。

フ、フ。二歩や一步の強談無心、三年陳のボンボチ米、蔵宿のお情で、

ヤツト露命を繋いだ一角、入山形に三ツ星のちいらん買は、汝にはチト

食過る(手早く懐中より一步金一ツ取出し紙に包みて)それほど女郎が買

度ば、サア昔の好みには是をやるから、局へいつて避んで来い。

鐵心

ト鐵心齋の顔に投付れば。鐵心齋は活と立腹して、煙草盆をちつ取りて

無禮

ト眉間を目掛けて打て掛る。其手を押へて

曉雨

何を仕やがる。

鐵心

ト鐵心齋が手を捻廻し、煙草盆を奪つて眉間を打つ。鐵心齋は眉間より

曉雨

血汐流るゝを押へて、身構なし

鐵心

おのれ、おれが額を撃つたよなア。

曉雨

オ、何にも撃つた。コリヤ一角。この曉雨が小びたひに、微かに残る傷痕は、

曉雨

去年汝に算盤で打たれた遺恨の名残と云ふ事よも忘れて居やア仕めエ。其

曉雨

仕返しを今こゝで、汝に仕たのが當座の腹いせ。それが何んど仕たのだエ

イ。

鐵心

おのれ曉雨、武士に向つて仕返とは、無禮至極。

曉雨

無禮呼はり片腹痛エ。汝の様ななまくら武士、それを恐るゝ曉雨じや無

ぞ。一番堀から五番まで、建つらねたる淺草の、お藏前の札差仲間、五本の指に數へられ、大江戸八百八町の隅々まで、隠れも無二大口屋、その身代を弟に譲り、男を磨くこの曉雨、弱エものをば助くる代り、強エが自慢で威張ちらせば、町奴でも侍でも、只は通さぬ江戸ツ子氣性、張て張て張て通す、男の中の男一疋、ぶたれた額の仕返に、腹が立なら、切とも突とも勝手にしろエ、鶴鶴組と云ふからは、相手に取て面白エ、汝が腰の鈍刀、伊達で無いなら抜け〜。エ、誰だと思ふ、一本立の男だて、藏前の曉雨だわい、

ト睨めば、鐵心齋は刀に反を打て

鐵心 返す〜も憎くき曉雨。此世の暇を取らせてくれう。

曉雨 ム、よい覺悟だ。

ト尺八を持替て稱へる。此前より家幹と圓の四ツ目垣との間に、傾城葛城、立て見たりけるが、此時駒下駄をぬき捨て、既足に成て走り出たり、兩人の中を隔て、

葛城 マア〜待つて御二人さん。此出入は妾が貰ふた、松葉屋の葛城が貰ひやんした。

曉雨 ヤア葛城か、そこ退け、あぶない、退いた〜。

鐵心 女だてらに大膽に、二人が喧嘩の邪嘩する葛城。きり〜そこをどか無いか。

葛城 イ、ヤ、のかぬ、のきませぬ、色香をめづる吉原で、其刀を抜かしやんすか？ 抜たら花が散らうぞへ。

鐵心 ム、花を散らすは本意で無いが、是には喧嘩の起因もあれば、

葛城 サア其起因も知れてある、わづか一人の傾城ゆゑ、あ二人さんが互の意地

づく、夫がかうして此喧嘩。何事ぞ花見る人の長刀。この夜櫻の盛りをば、修羅の刃の太刀風に、散らして見しよとは、あ二人さん、粹に似合はぬ心じやぞへ。

鐵心 とは云へ見す〜今此で、曉雨に耻辱を取らされた鐵心齋の此顔が、...

葛城 そのお顔のたて様も、わちきが胸に疊んである。
兩人 それじやと申して……

葛城 ハテわちきに任せて此顔を、立させておくんなまし。

ト兩人の間に、床几を出して隔となし、其上に腰を掛くる。鐵心齋は此
喧嘩に内心感したれば

鐵心 ム、羨らしい葛城があつかひ、了見仕悪い所なれど、いかにも卿が顔を立
て、此場の出入を一旦は、卿にあづけて引くと仕やうが。曉雨汝はどうだ
な？

曉雨も此場の喧嘩は、都合わろしと思ひて

鐵心 オ、汝が其氣に成つたなら、此方にや固より異存は無エツ。

鐵心 とは云へ此場は是で済まして、此遺恨は忘れぬぞ。曉雨、必らず留主を
つかふなよ。

曉雨 ム、いつでも出入を持つて来い、川の景色も三好町、見掛は各名家臺でも、
淺草きつて隠れの無エ曉雨が住居。手前が押して来たからとッて、對談入

鐵心 を頼みやア仕ねエよ。
何だぞ。

ト立向ひて身構へすれば。曉雨は腰を掛たるまゝにて身構する。葛城は
立て雙方を止めて

葛城 エ、何をしなます、わちきの顔をつぶしなますか？

鐵心 何さまさうだ。そんなら曉雨。
逸見一角。どれ分れるとト立上るを木の頭。仕やうかなア

ト立上つて仰をする。鐵心齋は無念をこらへ。葛城は雙方を隔つる

(拍子幕)

○第五幕

(一) 淺草並木暗討の場

享保十六年三月廿二日深更

正面は、藪葺柿葺等、入交りたる家續き（書割）此家々の間は松並木、其後は大川の流るゝを見。都て淺草並木町、享保頃の街道にてありし跡にて、夜中の景色なり（電氣仕掛の月出るまでは朧月夜なり）此に釣鐘庄兵衛の子分搦木の權藏龍頭の龍太突座の丸五郎を初め伊助露右衛門仁平波太保次邊四郎登久兵衛智之助理七奴留八の十人、銘々身輕に出立ち、手々に尺八を持ちて立掛り居る

（幕明く）

權藏 どりや、人数は残らず揃って居るかい？

龍太 さうよ。此方どら三人の外に、伊助から奴留八まで十人ほどだ。

丸五 都合人数は十三人、此通り揃って居るよ。

權藏 よし／＼。そこで一番手は龍太が頭で、伊助 露右衛門に仁平波太 保次の六人。二番手は丸五郎が頭で、邊四郎 登久兵衛 智之助 理七 奴留八の六人と手分をして、右左から掛らうぜ。

龍太 其手配は、すッかり承知だ。何でも權藏兄貴の知らせを合圖に、あいらッちの一番手が掛つたら、

丸五 此方どらの二番手が、直に掛つて曉雨めを、ぶツちめると仕やうから、安心して、

兩人 お出でなせエな。

權藏 ム、喧嘩に慣れた手合だから、由断はけしてあるめエが。相手は名に負ふ藏前の曉雨だ。どちを組じやアいけぬエぜ。

龍太 ナンノ、此人數で右左から、おつ取巻て、打ッて掛りやア、

丸五 曉雨がどんな手利でも、のがしッこは、

兩人 ありやア仕ねエよ。

權藏 おれもそうとは思つて居るが、此人數でへまを仕ちやア、稻妻組の耻に成るぜ。昔も其氣で、命掛の勝負だから、まッかり腰をはめてくれエ。

皆々 兄貴、承知でござエますよ。

權藏 それで曉雨が、愈々今夜は、宅に歸エるに違エは無エか？

伊平 そりやア大丈夫だ。和泉屋の女房に、

露石 駕籠を云付て居つたのも、

兩人 お出でなせエな。

權藏 ム、喧嘩に慣れた手合だから、由断はけしてあるめエが。相手は名に負ふ藏前の曉雨だ。どちを組じやアいけぬエぜ。

龍太 ナンノ、此人數で右左から、おつ取巻て、打ッて掛りやア、

丸五 曉雨がどんな手利でも、のがしッこは、

兩人 ありやア仕ねエよ。

權藏 おれもそうとは思つて居るが、此人數でへまを仕ちやア、稻妻組の耻に成るぜ。昔も其氣で、命掛の勝負だから、まッかり腰をはめてくれエ。

皆々 兄貴、承知でござエますよ。

權藏 それで曉雨が、愈々今夜は、宅に歸エるに違エは無エか？

伊平 そりやア大丈夫だ。和泉屋の女房に、

露石 駕籠を云付て居つたのも、

龍太 わつちら三人が、
三人 聞て居やした。

龍藏 そこで曉雨が来て来る其駕籠は

仁三 其駕籠は土手の武藏屋で、

保次 看板の印と云ふなア、

邊四 丸に銀杏の紋處、

登久 墨で武の字が、

四人 書てあらア。

龍藏 よし。其提灯を見掛たら、敲き消すのを合圖にして、

智之 駕籠昇どもをぶち倒し、

理七 それから後が此方の喧嘩、

奴留 相手は曉雨たつた一人、

仁平 ゆかる事じゃア、

皆々 ごぜエませんよ。

龍藏 そんなら皆が手分して、右と左に、
皆々 忍ぶと仕やうか。

ト手筈を申合せて、龍太 仁平 露右衛門 波太 仁三郎 保次は上手

に、九五郎 邊四郎 登久兵衛 智之助 理七 奴留八は下手に忍び、

龍藏は中程に隠る。

此時向ふ(揚幕)より大口屋曉雨、四手駕籠に乗り、垂を揚させ(駕籠

昇虎吉龍藏) 駕籠には赤にて、丸の内に銀杏の紋所、其上に墨にて武の

字を書たる提灯を附させ出來り(花道よき所にて) 止まりて

曉雨 オイ駕籠屋。一寸俵ねエ。

ト駕籠を止させて(舞臺の方を打見やり) 小聲にて

履物を出してくれい。

ト駕籠を卸させ駒下駄をけき、虎吉に叫げば、虎吉は直に是を熊藏に移

し、兩方の垂をおろし、空駕籠を曉雨が乗たる躰にて昇いで、舞臺に掛

る。曉雨は駕籠の後より歩いて、舞臺下手よき所に立つて止る。舞臺に

権藏

ては權藏、駕籠を見て

それ。

ト飛出して、尺八にて提灯を叩落せば。是を合圖に、雙方より龍太丸

音々

曉雨、覺悟しろい。

ト打て掛る。駕籠昇の虎吉 熊藏は是に驚いて、上手の方へ逃込む。權

權藏

龍太丸 九五郎は駕籠の垂をわけて透し見て

三人

逃やがつたなア。さては曉雨は風をくらって、

曉雨

ト皆々あきれて居る。曉雨は是を透し見て

權藏

イ、ヤ逃ねエ。曉雨は此に立て居るが、汝たちは何奴だ(？)

龍太

此世の暇、引導代りに名乗って聞せる。稻妻組の其中で、響も高ニ釣鐘庄

龍太

兵衛。その一子分で撞木の權藏。

龍太

龍頭の龍太、

九五

突座の九五郎。

權藏

廊の遺恨意趣ばらし、

龍太

汝の歸りを待受て、

九五

丁度處も松並木、

權藏

汝の命を、

音々

貰ふのたい。

曉雨

そうか。欲くば遣らうと云ひ度か、少し此方に用ある命、汝等に遣るだけ

權藏

は、まア止に仕やうよ。

音々

遣らぬと云ッても、

音々

こつちで取るわい。

ト權藏はじめ十三人の共は、前後左右より打て掛るを。曉雨一人に
て引受け、持たる尺八にて、當るを幸と打倒せば、或は氣絶し、或は逃
去りて遂に目前に相手なし。曉雨は着物の塵を打拂ひ、悠々として上手
に往掛る。

庄兵

此時松並木の陰より、釣鐘庄兵衛、脇差を抜て走り掛り

曉雨

覺悟。

ト斫て掛る。曉雨は持たる尺八にてあしらひ、烈しく戦ひて、遂に曉雨は庄兵衛が利腕を打つ。打たれてひるむ所を附入て、刀を持たる手をねぢ上げ、取て組伏せて

曉雨

サア何奴だ、名前をいへ。

庄兵

イ、ヤ云はねエ。斯なるからは、命は入らぬ、殺すなら立派に殺せ。

曉雨

名前も知れぬエ、つまらぬ命、それを欲がる曉雨じや無いぞ。名前を云つて誤まつたら、汝の命は助けて遣るワ。

庄兵

詰らぬ力身で命を助け、後の難儀を仕やうより、早く殺して安心しろへ。

曉雨

ト決心して云ふ。此時月出る(電氣仕掛)曉雨は庄兵衛の顔を見て

曉雨

ヤア汝は幾多の、イヤ稻妻組の釣鐘だな。意趣遣恨も無エ余を、なんで並木に待受て、欺討には仕やうと仕たのだ?

ト問へども、

庄兵衛は組伏られながら、目を閉て返答せず。曉雨は少し

曉雨

考へて 成程、汝の望み通り、命を取るから、一所に來い。

庄兵

ト手を取て引起し、落たる脇差を取上て渡せば。庄兵衛は意外の思にて、地上に(舞臺)座し、黙然たりしが、脇差を取て鞘に納めて

曉雨

往けと云ふなら、往も仕やうが。どこのらづくへ往くのだい?

曉雨

ハテ來いといつたら、

曉雨

ト庄兵衛の手を取つて(木掛)

曉雨

來るがいゝわね。

ト引立れば、

庄兵衛は合點ゆかねども立上る。(此道具廻る)

(二) 諏訪町立田屋門口の場

同日深更

上手寄には、柿葺の家根を附たる小さき榎軒門、(出入)其左右は割竹の塀にて、塀の内の植木を見越たり。此塀に續いて、少し下手に寄せて、柿葺の家、雨戸を建切て一方にくいり戸を附たり。其下手は板塀なり。都て淺

草諏訪町の料理店、立田屋の表掛り、夜の静なり。

此は(道具止れば)番太郎、袴黄の股引、尻端折にて、腰に諏訪町自身番

と書たる提灯を差し、拍子木を持ち、八の時を打て上手より出で、下手に

入る(此所に夜鷹蕎麦等の仕出あるべし)

此時向ふより大口屋曉雨は先に立ち、釣鐘庄兵衛は後より續き(着物は所

々破れ綻びて尻端折、跣足。花道よき所に止まりて

庄兵衛 言なり次第に歩行て居るが、汝の家に往のぢや無エな?

曉雨 ついそこだから、マア一所に歩行けと云ふに(舞臺に來り、下手家臺の潜

り戸を叩いて)

オイ明てくれい。 清助は居ねエカ。 清助々々

(内にて) ハイ。 清助は宿に居ますが。 お呼びなされるのは、どなたで御座

二ますか?

曉雨 あれだ。 曉雨だ。

清助 エ、旦那で御座二ますか (清助は探巻姿にて潜り戸を明けて) オヤ旦那、

どうして今頃入ッしやいました、(内に向ひて) オイ。 藏前の旦那が入

ッしやたぜ、皆が早く起きねエカ。

曉雨 コレサ清助、皆を起すにヤア及ばねエが、少し此釣鐘親方と話しがあるか

ら、奥の座敷を貸してくれい。

清助 承知いたしました(と透し見て) オ、釣鐘親方で御座二ましたか。 暗エの

でお顔は知れず、御挨拶も致しませんで、御免なせ二まし。 オヤお跣足

で御座二ますな。 唯今水を差上ます。

ト清助直に鹽を持出す。 曉雨は差圖して清助に庄兵衛の足を洗はせ、駒

下駄を履かせて(但し此洗足の時に、庄兵衛煙草入を落す)

それから清助。 而倒だらうが、早く酒を出して呉。

直さま御酒は差上まするが、生憎お殺が何にも御座二ませんので...

殺なんぞは何でも宜よ。 旨い不味は言はねエから...

清助 ヘイ宜しう御座二ます (潜り戸の内には入り、上手の門を明て)

どうぞ、おは入り下せ二まし。

曉雨

釣鐘。さア一所には入なせよ。

ト先に立て門の内に入れば。庄兵衛も黙然として續いて入る（此道具半廻に成る）

(三) 同く釣鐘切腹の場

同夜

此は立田屋の奥坐敷、中二階造りの離れ坐敷、正面上手の一間は塗壁にて、細部板を打ち、真中に花籠を掛け、早咲の牡丹を挿たり。其の次の二間は、下手寄に一尺五寸ばかりの小壁を見て、つのがらにて一間二枚の太鼓張の襖（出入）上手横は三尺の小壁に下地窓。下手横は一枚の障子を入れ、庭（平舞臺）には沓扱、飛石、柵木等ありて前場に上手に見たる梅軒門は、今は下手に成て其内を見る。石燈籠つくばひ等よろしくあり。

此に亭主立田屋清助は先に立ち案内して、曉雨 庄兵衛は入來りて着坐する。清助が燭臺を置き、身に入るを呼止て

曉雨

今いつた通り、釣鐘親方と内證の話があるから、女中なんぞをよこさずに。御苦勞だが、お前用を達てくんな。

清助

宜しう御座います（奥に入り直に煙草盆を持出して）マア御一服なせませし。唯今お火鉢を差上りますから、

曉雨

ナニ暖いから火鉢は入れねえよ。其代りに酒を早く出してくれい。

清助

直さま御酒を差上ります（庄兵衛の着服の破れ縫ひたるを見て）親方、どうなすつたので、御座えますね？

曉雨

ト尋ねるを。曉雨は引取て

清助

ナニニ實は今少し間違があつて、親方の着ものが此通に成て、見ッどむねエが、清助、おめへの餘所いきがあるだらうから、早く持て来て上てくだつし。

曉雨

承知いたしました。どうで、碌な着ものは御座えません、ほんのお間に合せて御座えますよ。

清助

ト奥に入る。釣鐘庄兵衛は、腕組して始終無言なり。曉雨は煙草盆を引

曉雨 庄兵衛どん、一服やらねエか (と煙草盆を前に出し庄兵衛が煙草入を捜しても腰に無きを見て煙草入を出し)

庄兵衛 ヤア先きの騒で煙草入を落しなすつたね。サア是で一服やんなせエ。

庄兵衛 有がたう御座エます。

ト挨拶したまふにて、煙草入に手を觸れず。清助は奥より小袖羽織を持出して

清助 親方、垢ッ臭エか知れませんが、お着替なせエまし。

庄兵衛 清助どん、信切は忝ねエが、是で可よ。

曉雨 折角清助が持て來たのだ。それじゃア見ッどむねエから、マア着替ると仕なせエよ。

庄兵衛 それじゃア、お借り申すと仕やうかね。

ト着替る。清助は庄兵衛が脱だる着ものを持って奥に入らうとする

曉雨 オイ清助。ついでにお前の煙草入を親方へ上てくんな。

清助 承知しました。

ト奥に入り、直に煙草入、並に廣蓋に酒肴等をのせて持出して、煙草入を庄兵衛に渡し、廣蓋を前に出して

曉雨 唯今なにかお肴をこしらへますから、先づ是で一杯お願エ申上ます。

曉雨 御苦勞々々。それで用があつたら、手を叩くから、此へ附いて居なくッて可ぜ。

清助 よろしう御座エます。

ト奥に入る。曉雨は盃を取上げて

曉雨 釣鐘、わしが毒味をするぜ (手酌にて飲みて) 少し煙がゆるい様だが、仕方無エ。サア一ツ遣なせエ (酌を仕て) 一ツ取替に仕やうじや無エか。

ト自分の杯を庄兵衛にさし、庄兵衛の前にある盃を取らうとする。庄兵衛は其手を押へて

庄兵衛 オット待なせエ。此釣鐘庄兵衛が身分の素性を、お前は知ッて居なさるだらうが……

曉雨

庄兵

曉雨

オ、知ッてるども、宇都宮の衆八と云ッては、野州から奥州掛て、人も知つた穢多頭、疾からよッく知つて居るよ。

庄兵 ム、それを知つて此盃、受て飲まうとさつしやるは？

曉雨 ハテ野暮を云ふ男だなア。穢多だらうが、大名だらうが、同じ様に生を受け、此世界に生れた人間、何の變りがあるものか。それに差別を立たたのは、此世の中の得手勝手。この曉雨とても其通り、町人に生れて来た悲しさは、大名どころか、小名も小名、十五俵の安御家人、其奴等にさへ頭の上らぬ札差家業、いくぢの無のが嫌になり、家督を譲つて今の境界。大小さした侍に頭を下げぬ其代り、世界の人は皆兄弟、士農工商穢多長吏、世間の奴等が勝手に附た身分の符牒、それに食着する様な曉雨じゃア無エよ。穢多と云ッちやア煩セエから、何所までも稻妻組の釣鐘親方、サア打解て一杯飲みなセエな。

ト庄兵衛が飲たる杯を取り、手酌にて飲みて庄兵衛に差す。庄兵衛は我を折て

庄兵

曉雨

庄兵

曉雨

庄兵

わつちも是まで大勢に附合ッたが、お前さん見た様に、肝玉が大きクッて、胸の寛エお方にやア、臍の緒キッて三十四年目、今日初めて逢エました。旦那、眞平御免なセエまし、今迄のわつちが罪科、この通り兩手を突て誤りました(と平伏する)

曉雨 ナンノ誤る事も何にも無エヲ。併し釣鐘、お前ほどの好漢が、何で逸見鐵心齋に一味して、わしに喧嘩を仕掛なすつたい？

庄兵 サア、それも是も皆わつちが足り無エから。旦那、此身の上の懺悔ばなし、一通り聞ておくんなセエ。御存知の通り、わつちやア原が宇都宮の穢多頭、衆八でござエますが、金はあつても人並に世間へ出られぬ身の悲しさ、悔しい餘りに跡をくらし、名前を變て江戸へ出て、町奴の稻妻組、上見ぬ鷺の羽をのして、嗚鳴が得手の釣鐘庄兵衛。ふと松葉屋の丁山を買馴染だ、遺恨の起り、お前さんの男だて、五丁町で評判の高いがわつちの心の嫉み、丁山には煽られて、修羅を燃して居た所。鐵心齋に頼まれて、お前さんをば暗打に、疊んでやる氣に成たので御座エまする。

曉雨 そうだらうと察して居たが、シテ其鐵心齋が、わしに遺恨を合んだ理分を、

庄兵 お前は何と聞なすつたい？

曉雨 サア仲の町での今夜の喧嘩、そりやア後から沸た話し。其前の頼みには、

庄兵 此鐵心齋は敵持、親の敵と狙ふは女、恐しい事は少しも無が、殊に寄たら

曉雨 肩を持ち、助太刀するのはあの曉雨、喧嘩に事よせ殺して仕舞へば、悪念

庄兵 が無くて此身の安心。釣鐘、どうか手を貸してくれぬかど、折入ての頼

曉雨 みゆゑ、男の顔づく、喧といつた理でござえます。

庄兵 扱こそ敵は鐵心齋。シテ其女の名前、討れた人の姓名を、お前は知つて居

曉雨 なさるか？

庄兵 討たれた人の名は知らぬが。敵と狙ふ女の名前は……云々れば)

曉雨 その女の名前と云ふのは？

庄兵 事の起は兎も角も、男と見込で其身の大事を、明された上からは、名前を

曉雨 云のは、旦那、堪忍しておくんなせえまし。

庄兵 そりやア尤だ。それじゃアあれの方から明さうが、その女と云ふのは、松

乗屋の薄雲であらうかな？

庄兵 どうしてそれをお前さんが？

曉雨 大方それと察して居たよ。それで討たれた浪人は、阿部川町に住居した、

庄兵 今西立之進と云ふがな？

曉雨 阿部川町の浪宅で殺したとは聞きましたか。その御浪人が、アノ今西立之進、

庄兵 今西様で御座エましたか？……エ、エ、エ(と大に驚く)

曉雨 何にも、阿部川町の浪宅にて、女房もろ共、人知れず殺された浪人は、薄

庄兵 雲の雨親、今西立之進御夫婦だ。

曉雨 スリや鐵心齋に殺されたは、今西さまでござエましたか。知らぬ事とて、

庄兵 無念の御最期をお遂なせエましたなア。

曉雨 ト落涙して無念の思をなす。曉雨は不審して

庄兵 その今西立之進を、お前は知ッて居なさるか？

曉雨 知ッてる所か、命の親。忘れも仕ねエ十年前、小山の宿の大喧嘩、あつ取

庄兵 巻かれて、打殺さるゝばかりの所、通り掛つたお侍エ、わつちを救つて其

場をきりぬけ、命を助けて下さつた、其の方のお名前は、水野隼人正様の御家來、今西玄之進様。水野様御没落の後には、往方知れず、お尋申すゝては無く、御恩返しに仕て〜と、常に思つて居ましたが、鐵心齋に殺されて、敢ね〜御最期なされましたか。

ト悲嘆に沈む。曉雨はたと味を打つて

曉雨 ハテ縁と云ふものは不思議だなア。シテ見ればお前も言は〜恩人の敵。心を變て薄雲に力を添へて、敵を打たせる所存は無エか？

庄兵 イーヤ無エ、御座エません。恩は恩、頼みは頼み。薄雲の助太刀は、お前さんが立派にして、敵を討せておやんなせエ。

曉雨 そりやお前に頼まねエが。困ると云ふのは、鐵心齋、今西玄之進夫婦の衆を殺した證據が上らぬゆゑ。見す〜それと知れながら、手出のならぬが残念だ。

庄兵 その證據にわつちを出さうと思つても、わつちも男だ、一旦頼まれた上からは、石を抱ても言は仕ねエよ。

曉雨 それじやア汝。今西玄之進に受たる大恩、口先ばかりで言ては居れど、心に忘れて居やがるなア。

トきつと成て云へば。庄兵衛は決心の跡にて

庄兵 イ、ヤ些ども忘れて居やア任せぬ。其證據を上るには、鐵心齋が門弟で、まかも其晩俱々に、手を叩したは、入谷丹五郎根岸松兵衛田畑彌九郎、其外あまたの町奴。その中にて田畑彌九郎、見掛に似合はぬ臆病やつ。彼奴を引よせ一責すりやア、證據の上るは案の内。

曉雨 ム、シテ其彌九郎を引よせる手段は、どうして？

庄兵衛は傍に置たる脇差の筭を取出して

庄兵 この筭は仲間の割符。これを見せて言附りやア、わつちが子分の撞木の權藏、龍頭の龍太、突座の九五郎、きつと手先を働いて、口を明せて上ませう。

曉雨 ム、忝ない（割符の筭を収めて）それほど心を入れながら、自分で力を入れぬどは？

庄兵 ハテ悪人ながら、鐵心齋に、一旦肩もつ上からは（と脇差を抜き腹に突立て

て

此命を、くれて遣りまする。

曉雨 (介抱して) 早まつた其切腹。何で命を捨るのだ?

庄兵 鐵心齋が今西様を殺した證據、その手掛を教へた上は、男を捨て釣鐘庄兵

衛、なんで生て居られませうか。

ト此時與より亭主清助走り出て

清助 旦那。釣鐘親方の子分の衆が (切腹の躰を見て、恟りして) ヤア親方、こ

りや何となせエましたなア。

同時に、撞木の權藏龍頭の龍太突座の丸五郎は、清助の後より打揃ひて

出來ッて

親方の往先、所々方々と捜して見たに、

龍太 此家の表に落してあつた煙草入、

丸五 的きりこゝと勘付て、は入て見れば此掛の仕宜、

龍太 此りやどうした理で、

三人 御座エますなア?

ト何れも驚き寄添て介抱するを、押し止めて

庄兵 これには段々仔細のある事。コリヤ今からしては曉雨さまが、余のお頭。

三人 そんなら喧嘩の中解て、

庄兵 ム、みソなの事までお頼み申した。旦那、何分お頼み申しまする

ト手を合せて拜み苦痛に迫る

曉雨 承知した。釣鐘親方、跡は少しも案ぜずに、心置なく往生なせよ。

庄兵 ありがたい。

ト脇差を引廻す。曉雨涙を流して

曉雨 あつたら男を (と涙を拭ふを木の頭にて) 死なしたなア

庄兵 衛落入る、皆々悲嘆に暮る折から、曉の雞の聲聞ゆる

(拍木暮)

○第六幕 大詰

(一) 薄雲忍出の場

享保十六年四月十七日午後

此は新吉原松葉屋の店先の上り口にて。正面には(二間高足二重)四枚建の襖を設け(出入)前には三尺の式臺を設け、玄關模様の上り口なり。此上り口の上手は(二重)一段下りて若衆の溜り(常足)一間二枚の杉戸を(出入)建てたり。上り口の下手には朱塗の内格子(籠)にて其止りは宜しく見切べし。

此に若衆溜には。松葉屋の若もの源七藤吉は腰を掛け、平次は程よき所に立掛り、話の躰なり

平治

エ、源どん。此節の忙がしさはどうだい。御同前に目が廻る様だぜ。

源七

さうよ。忙がしくつて繁昌するのは結構だが、かう夜晝なしにも客が立込では、息を吐く間もありやア仕ねよ。

(幕明く)

藤吉

併し此町内にやア、今月に成つてから、サツと閑で、お茶ばかりの家もあぜ、る其中でこちらばかりが、こんなに繁昌するのは、有がてエ譯だのウ。そりやアお前の言ふ通り。二階が忙がしけりやア、こちどらの實入も、おのづと殖るに依て、愚痴を云ふ事アちツとも無いのさ。

源七

是ど云ふのも、此方にはおいらん方が玉揃ひで、まづ第一に葛城さん、その次が丁山さんに鴉鳥さん、それから突出の薄雲さんと来て居るから、お客のこむのも尤さねエ。

藤吉

その葛城さんで思ひ出したが。薄雲さんの突出の初日から、山口巴で葛城さんが相方で、夫から折々お出なさる、香具山さんと云ふお客。ありやア何者だらう?

平治

そうさね。いつもお茶屋の二階ツ切で、此方へは、遂しか見えな事も無く、それに薄雲さんがいつも一座。妙な客もあるものだねエ。

源七

お前たちは、あのお客の素性を知らねエのか。香具山さんと云のは假の名、まことは小川町で四千石のお旗本、天野民部様と云ふお歴々だぜ。

藤吉 そうか。道理で人品がすてきによくって、一幹が寛活だと思つて居た。シ

平治 テ其の歴々の天野様が、何でこの吉原へ繁々お出に成るのであらう？

源七 お茶屋ツきりでお歸りなさる所を見りやア、葛城さんの色香に迷ひ、通つ

て來なざる理でもあるめエし。

源七 サア深い事はおれも知らぬが、此間も山口巴の店先で、お供待の奴さん黒

内とか云ふ人の、問はずがたりを聞いて見りやア、何でも薄雲さんのおどつ

さんが、浪人もので、天野様とは懇意の中であつたと云ふ事。

藤吉 そんなら、薄雲さんを相方にお仕なさりそうなものだ。其上にあの香具山

さんは、曉雨さまと一座にお成なさる様だね。

平治 シテ見りやア、揃ひに揃つて、遊び好の女嫌ひ、

源七 變つたお客も、

三人 あるものさぬエ。

ト香具山と云へるは、天野民部が事にて、葛城を呼出して遊べる事を不

審して居る。

飲火

此時正面より葛城の禿飲火、出來りて

平次は承知して下足の紐をどきて、草履を式臺の前に直す。

正面より番頭新造豊花、先に立ち、次に薄雲（目隠し頭巾、羽織、袴の

男姿）そのあとより葛城（部屋着の胴拔）にて出来る。是を見て

源七 ヘイお早う御座います、お静かに、

三人 入らッしやいまし

葛城（薄雲の肩に手を掛けて）それじやア明日の晩は、きつと來なましよ。嘘を吐

きつとぞますよ。

豊花 あいらんが、あんなに氣をもんで居さつしやるから、

ト云へば。薄雲は無言にて首諾き、葛城豊花に左右を圍はれて、式臺に

下り、草履をはかうとする、

此前より平次、源七、藤吉の三人は、土間（平舞臺）に立ちて薄雲の

様子、變なりと眼を付けて居たりけるが。源七それと目にて知らすれ
ば、平次は直したる草履を取る。葛城はツと思ひて

葛城 平どん、お履物をなせ取るのだねエ?

源七 イヤ浮ッかりと此草履、はかせる事は、

三人 成りません。

葛城 何といふのだ?

藤吉 昨夜あがつたお客さま、身なり姿は其儘なれど、

平次 からだの恰好もの越は、似ても似つかぬ、くわせもの、

源七 その替玉を食ふやうな、わつち等じやア、

三人 御座エませんぜ。

葛城 フウすりや、客衆が違ふと云ふてじやのう?

源七 いかにもさうで

三人 ござエますよ。

葛城 ホ、ホ、山口巴の看板で、名染のお客の香具山さん、わちきが座敷に

居たお方、違はう理は無い筈じや。サア早うお草履を、お上なまし。

藤吉 イ、ヤ、いくらあいらんが、客人だとおつしやツても、三人揃つて此通り、

平吉 云はずと知れた女の姿、頭巾で顔を隠しても、目許は慥に覺えがある。

源七 その頭巾を引ばいで、お客の正躰あらはさにやア、役目の表が、

三人 立ましねエ。

ト三人にて薄雲を取巻き、頭巾を取らうとする。葛城は押隔て、薄雲

を後に圍ひて、きツとなりて

葛城 何を仕なんす、皆の衆。人目を包む袖頭巾、顔を隠すが歴々の、世を憚か

りの里通ひ、夫を見やうと無作法な、お前がたの手込には、わちきが決し

てさせぬぞへ。見るから各な女郎でも、松葉屋の葛城、かうなるからはわ

ちきが相手、指でもお客にさしたなら、此の暖簾に疵が附かう。ハテ目は

しの利かぬ若衆では御座んすぞいなア。

ト云へば。三人は少し尻こみ仕たるが、猶も進みて

源七 あいらんのお腹立は、御尤でござえますが、此儘に其お客、
藤吉 お出し申す事ア、
三人 出来ません。

葛城 そうなら、わちきが命に掛ても、出しますぞへ。
薄雲の手を引き、土間に（平舞臺）下りやうとするを。源七等三人は遠くより取巻く。

此前より松葉屋の亭主與兵衛は、若衆溜の（上手二重）杉戸を細目に明て見て居たりけるが、此時大小、編笠、および袴脇差を風呂敷に包みたるを挟みて、走り出で、式臺に來り、會釋して

與兵衛 これは、香具山様、モウお歸りで御座いますか。お預りのお腰のもの。お笠も是に御座ります（差出せば、葛城豊花は請取て薄雲に支度させる）コレ早くお履物を差上げな。

源七 旦那さま。あの客人は儘に似せもの、
藤吉 えかも女の喰せもの、

平次 あの目許の様子では、

三人 薄雲さんに……

與兵衛 （と云ふを冠せて）何を馬鹿な。薄雲は二階にちやんと居るじやア無エか。

三人 アモ……

與兵衛 エ、早くお草履を出さぬエか。

トきつく云へども、三人が猶ためらひて居るを見て、與兵衛は心せき、其所にある駒下駄をはき、土間に（平舞臺）に下りて、平次が持たる草履を引たくりて、式臺の前に直して

サアお召しなさいまし。
薄雲草履をはく

葛城 旦那さんの御信切、きつと恩に着ますぞへ。

與兵衛 なんの是しきの事……イヤ迎の事に、此與兵衛が大門外まで、お供を致して参りませう。

葛城 スリヤ旦那さんには委しい様子を……

與兵 ハテ廊の魂膽出入の掛引、わしに任せて置なせ、萬事は渾て此胸に……

葛城 旦那さん、嬉しうござんす。

ト拜む。與兵衛は薄雲をつれて出やうとする。三人猶も障へんとするを、

與兵衛は睨め附て

與兵 エ、何をするんだ (と薄雲の手を取るを、木ッ掛にて)

サアお出なせエまし。

ト與兵衛は薄雲を連出し。葛城は豊花と俱に見送る (此道具廻る)

(二) 今戸八幡敵討の場

同日の夕方

八幡の社を正面斜に見て (中遠見の書割) 其周圍は杉の立木なり。上手には柿葺の庇を附たる別當所 (三間の常足) 板椽附、前つらは障子を立切る。下手には藁庇葺張の茶店、床几を前に並べ。別當所より奥に掛て藤棚ありて花盛り。都て今戸八幡境内後の光景なり。

龍太 此に天野民部の家來、片山又四郎齋藤孫市 (大小、袴) 床几に腰を掛け、

下手には釣鐘の子分龍頭の龍太 (町奴) 立掛り咄の軀なり (道具止る)

又四 サア貴様の骨折で、かの彌九郎を引捕へ、町奉行所の手に渡し、内々詮議

孫市 に及びし所、兎や角、初は陳じたなれど、

手強き責に堪へ兼ね、鐵心齋が手に附て、今西玄之進夫婦のもの、殺した

りどの彼が白狀。

又四 それで我等が御主人の天野民部様、御奉行衆へ内々の御相談、敵を討たせ

て苦しう無いどの御内沙汰。

孫市 後の祟は少しも無いぞ。

龍太 そりやアよい御都合で御座エました。それに附ても目指は逸見鐵心齋、今

日は三社の御祭禮、見物をした其後で、此境内に待合せ、子分をつれて吉

原へくり込む手筈は兼ての約束、撞木の權藏が階にそれと聞出して、曉雨

さまへお知らせ申し、又今しがた此龍太、様子を見届け参りましたが、鐵

又四 心齋は馬道の甲子屋の二階にて酒もりいたして居りました。段々の骨折、御苦勞。今にもあれ鐵心齋、門弟子分を召連れて、此境内に参つたら、……

ト龍太に叫べば

龍太 承知しました、そんなら彼奴が子分の奴らは……

又四 コレ

ト制して再び叫びて申合せ、龍太は諾いて下手に入る。引違へて向より天野民部、同鞆負は、家來三浦大次郎、三木喜右衛門、奴黒内引連れて出れば。又四郎、孫市は出迎へ、民部鞆負は直に舞臺に來り、床几に腰を掛る。孫市は自分にて茶店に入り、茶を汲て民部鞆負に差出せば

民部 それなる茶店の女は何がいたした？

孫市 何かに附て邪魔であらうと心附き、又四郎と申合せ、今日一日借切に致し置き、女は宅へ引取らせて御座りました。

民部 ム、よく心附て計らつた。シテ都ての手筈は届て居るか？

孫市 ム、よく心附て計らつた。シテ都ての手筈は届て居るか？

又四 ハッ、萬事は曉雨が差圖にて、手筈は都て相届き、逸見鐵心齋、三社の祭の歸り掛け、此境内に立寄りますと、檻に内通、それに相違は、

兩人 御座りませぬ。

鞆負 鐵心齋が手下のもの等、多人數なりと存ずるが、それを防ぎの用意はどうじやな？

孫市 其儀は曉雨、一切心得居りますれば、都てお任せ下さりませと、違ての詞に御座ります。

民部 ム、音に響いた俠客、藏前の曉雨、必らずぬかりは有まい程に、同人へ任せ置け。併し曉雨はまだ此所へ参り居らぬか？

曉雨 アイヤ疾から参つてお待申して居ります。

ト曉雨(羽織、袴、一刀)松葉屋の亭主與兵衛を(羽織、袴、一万)引

連れて下手の蘆簀張の中より出來り、民部鞆負に會釋して

コリヤ天野の殿様、若殿様、わざくの御出張、恐入ッて御座ります。お

蔭を以てお鶴の敵討、今日首尾よく致す事に相成まして、有がたう存じま

民部 する。イヤ其禮は此方より申す事、今西立之進が非業の最期、原ほど申せば倅よりして起つた災難。

靉雨 それに付てお手前には一方ならぬ世話を掛け、段々どの心遣ひ。

兩人 忝う御座るぞ。

靉雨 そのお詞では恐入ります。ナンノお願が御座りませいで、お鶴は顔を見知つた中、况て年來御出入の天野様、お詞が掛つた上は、是位の骨折は當然で御座ります。

民部 今に始めぬお手前が義心。民部大慶に存じ申すぞ。シテお鶴は參つて居るかな？

靉雨 是に居まする興兵衛が情、葛城が計にて、先刻廓を立出て、既に參つて居ります。

民部 何れへ參つて居るか？

興兵衛 ハッあれなる人家へ立忍ばせ、休息いたさせ置まして御座ります。

民部 それは重畳。それに附ても敵と云ふは逸見鐵心齋、鍛練なくとも一流の劍客、お鶴ごときかよわき女の細腕に、討たるゝ様な男では、よもあるまい。

靉雨 其助太刀は、いかゞ致すな？

靉雨 その儀は別に仔細も御座りませぬ。喧嘩に事寄せ、鐵心齋と立合つて、十分になした其上で、お鶴に止を刺せるつもり。

靉雨 成ほど左様な手筈と推量いたした。夫に附ては其喧嘩、ナント靉雨、手前に譲つて下さるまいか？

靉雨 ナント仰しやりますか？

靉雨 向島にて出會た鐵心齋。今西立之進の助太刀にて、其場の耻辱はのがれしが、心に残るは彼奴が過言。其上にまたお鶴の助太刀、お手前に任せては、後日に靉雨の顔が立たぬ。

民部 ム、よく申した、それでこそ民部が倅。こりや靉雨、どうか左様いたしてくれぬか？

靉雨 御尤で御座ります。鐵心齋に私が打れましたる遺恨の仕返し、此程す

に済ましたれば、今度はあなたの御存分になさりませい。
早速の承知添ない。併し配下の奴等が、一所に掛つて参つた時には？
曙雨 そりや御氣遣は御座りませぬ。門弟の侍は、又四郎殿はじめとして、御家
來衆へお任せ申し、...

民部 その外の町奴は？
曙雨 ナンノ、私が一睨で動かす事では御座りません。若殿様、御懸念なしに鐵
心齋を、思ふ存分さいなんで、向島の鬱憤を十分お霽しなさいまし。

民部 然らば曉雨、あれなる別當所にて、待合すと致さうが。時に曉雨、異な事
を云ふ様だが、お鶴は體に女の操は破るまいな？

曙雨 其儀は是に居まする與兵衛が、體に引受て、大丈夫で御座りまする。
既に先頃、曉雨様より、お鶴が身受の御相談も御坐いました。葛城が丁

奥兵 山どの張合から、是非お鶴をば一旦は、突出たいと達ての望み。これに又
敵の手掛り探る爲にも成るであらうと、曉雨さまの思ひ附、それで傾城に

は出しました。男に肌を觸れませぬは、此與兵衛がお受合申上りまする。

民部 夫は大慶。然る上は孝女のお鶴、首尾よく敵を討たる後では、鞆負が妻に、

曙雨 その橋渡は失禮ながら此曉雨が...

民部 お頼み申すぞ。

與兵 有がたう存じまする。
サア曉雨お手前も我等と一所に...

曙雨 有がたうは御座りまするが、お鶴の身支度、その外用事も御座りますれば、
先づお入りなさりませい

民部 鞆負は、上手別當所の様より、障子の中に入り。又四郎其外は上手
の奥に入る。曉雨は残りて

鞆負様のお腕前、體であらうと思つて居るが、何をいふにもお年若、相手
は逸見鐵心齋。
床几に腰を掛け、手を又て案じて居る。此時八幡の鐘の音聞ゆれば。與
兵衛は指を折て敷へて

與兵 旦那さま、アッヤ七の鐘で御座いますぜ。

曉雨 まう相手の来る時刻だ。ム、ト踏いて下手段賃の中に入る。向ふより逸見鐵心齋、入谷丹五郎、根岸

松兵衛を引つれ出来り(花道に止りて)

鐵心 ヤッ、祭禮と云ふものは、相も替らず、そうくしいものなのウ。

丹五 今日の三社の御祭禮、白柄大小神祇よしや、其外諸組の連中が、我劣らじ

と出立つたが、中にも目立た鶴鶴組、一きわ勝れて見えましたは、是ぞ全く先生の御威光

松兵 恐入ッて御座まする。

兩人 同勢つれて混雑の中を悠々と練り出したは、よい心持であつたのウ。何は

鐵心 ともあれ、子分のものが、此へ參つて揃ふまで、

丹五 あれなる茶店で暫時の間、

松兵 御休息、

兩人 遊ばされませう。

ト(舞臺に來りて) 鐵心 齋床几に腰を掛る。丹五郎は下手の茶店に向ひて横柄に

丹五 オイち客様だぞ、ち茶を持って參らぬか。オイく誰も居ねエのか。ヤア

からあきだ。氣の利かねエ茶店だナア。

トつぶやきつゝ煙草盆を鐵心齋の前へ出す。

鐵心 精ふな。茶も唯今は欲う無い。時に兩人、門弟の田畑彌九郎、先月廿

七日に外出いたした其切で、今に歸宅いたさぬが、何如いたした事であら

うな?

丹五 大かた千住あたりには逃げ込んで、現をぬかして、遊んで居るので御座いま

せうが、?

鐵心 イ、ヤ女にうかれて遊ぶと云ても、もはや夫より廿日の日數、子分の者に

捜させても、更に行衛の知れざるは、其筋の手に掛り、もしや捕はれたで

はあるまいか?

松兵 日頃からして鼻ッ張は強い様だが、心底弱は田畑彌九郎、阿部川町の一件

丹五 先生はじめ、我々共が身の大事。

鐵心 ハ、アそんな事はありも仕まいよ。

ト平然たる顔付をして居る。

世時上手より天野鞆負、奴黒内をつれて出来り、床几の前に突立て

鞆負 イカニ逸見鐵心齋、先ごろ向島にて出逢ふたる天野鞆負、面躰忘れは致す

まいなア?

鐵心 ム、何にも見覺ある大若衆、性こりも無く此所へ酒の相手に参つたのか?

鞆負 いかにも相手に参つたぞ。其時の喧嘩の遺恨、サア立上つて勝負いたせ。

鐵心 ハテまほらしい心だて。まかし前髪立の子供上り、この鐵心齋の相手で無

い、痛い目見ぬ其中に、早く此場を引たがよいア。

鞆負 イ、ヤ引かぬ、鞆負におそれて尻込いたすか?

鐵心 それ打てしめい。

丹五 心得ました。

黒内 鞆負に掛るを。黒内押隔て、

助太刀ヤアなんねエぞ、愚ッて来るなら、おれが相手だ、向島にて、よく

もおれを川中へぶち込だなア。其意趣ばらし、かうして呉べし。

ト兩人を相手に烈しくたち合て、終に黒内は兩人を退て下手に入る。

舞臺にては鐵心齋鞆負の兩人立向ひ、足場をはかりて、互に刀の柄に手

を掛けて睨み合ふ。

同時に上手よりは天野民部は片山又四郎、齋藏孫市、三浦大次郎、三木

喜右衛門を引つれて出来り、下手よりは曉雨、海雲(白裝束)をつれ與

兵衛も附添て出来り

鐵心 ナント。其鐵心齋は、是なる女の親の敵。

鐵心 ヤア逸見鐵心齋、いつぞや阿部川町の浪宅にて、そなたの刀に相果た今西

立之進が娘のつるじや。兩親の仇、立上つて勝負しや。

鐵心 フウ誰かと思へば、松葉屋の薄雲だなア。敵呼はり尾籠千万。そんな覺は

會て無いぞ。

民部 卑怯なり、鐵心齋。向島にてそれなる倅の鞆負が難儀、参り合せて救ふた
る今西がはたらき、其不覺に遺恨を含み、門弟子分を引つれて、今西夫婦
を闇討に致せし悪事、田畑彌九郎、奉行所にて白狀なし、道れぬ證據が上
つてあるぞ。

鐵心 證據がわがりやア百年目。薄雲、覺悟しろ。

ト拔放つを、押し止めて

鞆負 ヤア待て鐵心齋。こちらの勝負を附たる上で、其女の相手になれ。

鐵心 エ、面倒な小姓めが。

ト是より鐵心齋、鞆負の太刀打に成て、鞆負は受太刀に成る。又四郎等
が出やうとするを、民部は止めて出さず。既に危く成るを見て、曉雨は
薄雲を引つれて、尺八を持って進み

鞆負 お鶴が助太刀。鐵心齋受て見ろエ。

ト鞆負に代りて鐵心齋と戦ひ、利腕をえたくかに打ち、ひるむ所を打据

れば。鐵心齋は刀を落して動とすはる。

此時前後より(東西の花道より)禽頭金兵衛先に立ち、曉雨の子分等多
人數が揃の浴衣、祭禮の躰にて、出來りて

金兵 旦那、鶉組の町奴、一人も残さすぶッ締まして、
皆々 御座ニました。

曉雨 ム、御苦勞。此方も日出度敵を討つぞ。

鞆負 サア鐵心齋、立合はぬか。

ト切く掛る。鐵心齋再び立上れども頗る弱つて太刀筋亂るゝを、鞆負附
込で大袈裟に切下れば。鐵心齋どうと仆るゝ。曉雨刀を薄雲に持たせて
親のかたき、覺え居つたか。

ト留を刺す。

民部 日出度。

曉雨 お日出度御座りまする。

皆々悦び祝ひて

りあに處る到國全は店賣販

會覽博大業勸
牌賞功有等二及等一賜



商
標



登
録

牡丹印巻煙草

一牡丹特號より牡丹十號迄太卷中卷細卷
各種あり

- 一大江戸 一白牡丹 一こたか 一萬歳
- 一國之譽 一五人男 一九重 一國華
- 一花印 一眞太閤 一かほる 一君か代
- 一花王 一双鶴 一愛國 一萬々歳

- 一菊印 一牡丹 一雪月花 一胡蝶印

東京京橋區銀座二丁目四番地 千葉商店

(電話本局千五十六番)

東京京橋區銀座一丁目 第一工場
東京京橋區南紺屋町 第二工場

新小説 應時増刊 俠客春雨傘

商標 眞正無鉛毒おしろい



仲村福助製謹



定價
煉白粉 金八錢
金拾錢
金貳拾錢
特別製 金卅五錢
水白粉 金八錢
金拾五錢
特別製 金卅五錢

此無鉛毒衛生白粉は普通一般の白粉と異り醫學及
び理化學上より研究し専ら無毒精良の原料に依り監製し
更に皮膚のあれを防ぎ又能く光澤を出すの良劑を配伍し
あれば鹽鉛類の中毒を與ふるとなきは勿論第一面顔の色
澤を出し肌を細やかにし。にきび。そばかす。を去りの
り能くつき能くはげ落るとなし硫黃温泉又は刷等に入る
も決して蒼黒色となる憂ひなし左れば江湖の貴婦人令嬢
普通有毒性の白粉を御用粧ありて天然の美顔を傷ふ
ことを免れ早く此うら梅を御試用ありて益々御愛顧の榮
を賜はらんことを請ふ

發賣 赤心堂

本舖 田中花王堂
日本橋區横山町二丁目
京橋區銀座三丁目
松澤八右衛門
日本橋區瀬戸物町 玉置金八
○其他賣捌所全國和洋小間物店及賣藥店に有り



この花

佐々木信綱子等八人の新歌の一つに宛められたる
は、この花と名づけられて、公にせられぬ。小き
冊子なれど三百頁餘あり、舁裁も見苦しからず。
信綱子のは「木がらしの風あらしかに夕べの雲を
吹きしをり、薄墨色の夜の手は、かなたこなたにひ
ろごりて、月まだ出ぬ大空に、きらめく星のかけ
渡し、堪へぬ寒さにおのが手を、口にあてつゝ、吹
きながら、つづく柳のかけ、瘦せて氷れる道を、迎り

行く」といふやうなるが其成功に近きものにして、
「あな我が胸の苦しきよ、味氣無き世に今はしも、
望みの絲は絶えはてぬ、あな慕はしの彼人よ、か
の人我を狂はすか狂ひやしけむ、狂へるか、苦し
き胸を掻き割きて望なき世に擲げつけむ」など云
へる類は、人に眉をひそめらる可きものなるべし。
正岡子規子のは「風無き鬮粟の花盛り、蛇の羽ぶ
れに美しき一ひら散れば三ひら四ひら、皆さそは
れてこぼれけり、赤きが散りぬ、そを見てか白き
も散りぬ、蛇は宿花や残るとうたてくも背き坊主
に羽を鳴らす」といへる類のもの興あり。戈など
いへる篇は、興甚だ乏し。武島羽衣子、鹽井雨江
子のは、優しく、なだらかなるを、むねとし玉へ
りと覺しく、厭はしくあらびたるは少し。されど

人の耳によく響きて、人の胸によく響かざるやうの傾きあるを憾むべしとす。歌は人の耳、眼、書籍より得たる智識などに訴ふるを主とするものにはあらずるべし。この人等、露中に聲を聞き、石裏に火を覗るの機に會はば、其歌太だ好かるべし。雨江子のは『深山の花』其十六、十七、十八、十九、二十章など麗はしく、羽衣子のは『草刈笛』の歌ひ起しなどめでたし。杉島山子の『足柄山』は、や、物語ぶみ様の語多きため、馬琴の文の流暢なるあたりを讀むが如き心地するを免れぬと、其上半は、趣き有りといふべし。與謝野鐵幹子の『門に懸けたる破太鼓。ばら〜〜』と三つ撃てば、官僕内よりからころと、石段くだる靴の音』などいへるは、恰も浪六子の小説の如く、兎角の評の外に

あるものといふべし。鐵幹子ならでは誰かかゝる歌を作らん。大町桂月子のは雨江、羽衣諸子のと大抵似通ひたるもの、『寶車』など如何にも作りものめきたれど猶興あり。落合直文子のは、辭句のどよひたるまでにて、難なき代りに面白くもなし。さて此冊全幹を評すれば、今日まで出でたる新作詩集の中にて最も優れたるものといひて至當なるべし。

小御門

袖珍小説第七編には依田學海翁の小御門といへる歴史劇、尹其親王、辨内侍の二小説を收めたり。翁の作の事なれば、専ら娛樂のために供せられたるものとして見んよりは、教訓の寓せられたるものとして見んかた、著者の本意とも、讀者の思ひあ

るものといふべし。鐵幹子ならでは誰かかゝる歌を作らん。大町桂月子のは雨江、羽衣諸子のと大抵似通ひたるもの、『寶車』など如何にも作りものめきたれど猶興あり。落合直文子のは、辭句のどよひたるまでにて、難なき代りに面白くもなし。さて此冊全幹を評すれば、今日まで出でたる新作詩集の中にて最も優れたるものといひて至當なるべし。

やまたぬ心構へとも云ひつべし。脚色いづれも複雑ならず、描寫すべて、細密を主とせず、墨畫の如く、線畫の如く、彩色畫の如くならず、油畫の如くならずは、翁が一家の風致なれば、流石にまた其中に、所謂學海先生の名をさしふるに足る所以のものあり。三篇の中、小御門最も面白く、小御門の中、叡山西塔の釋迦堂の一節最も面白し、されど『山を攀ぢ谷を越え、いかなる艱苦もたへ忍び』と爲明の云へば『天下の爲に力を盡さん』と貞平信康の云ひて、『方々さらば』と師賢の云ふを以て終るは一結果甚だ振はざる如く、物足らぬ心地したり。何とか工夫あらば全篇こゝに活動すべかりしに一貫の功の猶足らざるやう思はる。

ふたごころ

春の屋主人の去る廿五年の筆にて、米國の作者の著を譯したるなり。『筋讀み』といはるゝ讀者には読へむきものなるべし。西洋の天一坊といふべき木暮利四郎、女大岡といふべき稜刀自、これに利四が舊妻の恨み、由縁姫と坊谷靜雄との戀等を絡めて、悪謀露顯に至るまで如何にも、心強き利四郎が七穿八透の才を以て働くさまを描けるなか〜に面白し。文は馬琴少々、種彦四五分、淨瑠璃四五分を煉り合せたるもの、婦人にも容易に解し得られ、書生にも悦ばるべし。弦齋子、浪六子等の著を悦ぶ人、試みにこの書を読んで、いづれか面白きかを較べたまへ。必ず發明し玉ふところあるべきなり。

新著月刊

後藤宙外水谷不倒四五人の士の手に成れる新著月刊といへる雑誌は出でたり。小説、脚本、新詩、時文評論等を載するもの、材料もあしからず、舐めはた整ひたり。此雑誌も新作者が金玉の作を世間に紹介するの榮を荷はんことを切望する旨を發兌の要領の一となしたれば、吾人また未知の文人のあもかけを次號以下の紙上に於て認むることの幸を得べし。時文欄中、警視廳の詩眼と題せる一文は其意甚だ悪からず、たゞ其文中、警視廳が脚本等を點檢批准する所以は専ら厚生利用の方面に在りと言へり、厚生利用とは如何なる意を表はす語と思へるにや、いと奇なりといふべし。新詩詩に多くの紙數を與へたるは、此雑誌の特色として誇るを得べきところ、文藝俱樂部新小説以外に一面

の開拓を務むるものといふべし。



露國の滑稽作家

桂英子

才もまた多し、文もまた多し。されど古來才人の文章、事を叙して温潤藻麗なるもの、情を叙して矯健、痛快なるもの、或は功夫苦到せる小説、或は情理傑特の悲劇等のもの少からざるに關らず、内は敦厚にして外は談諧、理は眞實にして辭は滑溜なる滑稽の佳什に至つては、各國甚だ乏し。人或は滑稽は文學の上乗なるものにあらざと謂ふ、然れども是味者の妄言のみ、決して達人の至論に

あらず。蓋し人の心海春風忽として至つて、而して莞爾と含笑し、輒然と發笑するや、古今態を同じくし、異趣も時を一にす。此一笑千歳涙、びず万里よく傳ふ。かの我儂の太公先姑が眼の讀むこと一行、即ち便ち涙の下ること一行、千万行の文字、千万行の珠淚、以て纒に巻を終へたるセンチメンタル、ノベル(今日我が邦に行はるゝ小説多くは皆此種のものゝみ、もとより英雄の涙を催さしむるに足らず、徒に見女の心を痛ましむ、識者之を取らず)の如きは、今日の我儂より之を見れば、たゞ一片陳腐の説話として高閣に束ねべきを見るのみなるに、かのセルペンテス。ヴォルテール等の傑作に至りては、今尙人をして覺えず、開口縮鼻して其妙趣を感ぜしむるにあらざや。想ふに、我儂の

作者に後る、幾年、而して猶こゝに新に笑ふ、來者の我儂に後る、幾年なるもまた、新に笑ふべし。それ人生の樂むべからざるや、彼の盜路のいへるが如し、病疲死喪憂患を除きて其中口を開きて笑ふもの幾何かあらん、こゝに於て世の無邪の笑を得、高雅の笑を得て、以て自ら心を慰めんことを欲するや久し。然るに、世の需むるところ是の如く切なり、而して人の文章の之に酬ふるに足るもの甚だ多からざるは何ぞや。乞ふ試に檢せよ、伊太利の文化甚だ盛なりといへども、不朽の滑稽作者として目すべきもの一セルペンヌあるのみ、マンゾニーは蔚然たる文豪なり、加ふるに能く滑稽作者たるべき資質を具ふるを以てす、然れども猶鋭利峻拔、一語片言直に人の肺腑を透すの致を

欠く。現世紀の作者林中、一のカルロ、ポルタありて、聊か人意を強くすといへども、文を屬するに伊國の中正の語を用ゐずして、ミランの方言を用うるを以て、讀者之を遺憾とす。(例へば馬琴種彦等の文の如くならずして、仙臺方言を以て言文一致に綴れるが如し) 此他は碌々深く論ずるに

謂ふに歐羅巴の各國民中、滑稽の真才の賜を受くること最も多きは謹嚴深沈なる英國人なり、之に次ぐは悒鬱不快活の露國人なり。蓋し紙の燥けるものは濕を招き易く、水の煮らるゝや長く熱を保つが如く、悒鬱は實に滑稽を容る。由來滑稽の美珠は必ず悲哀の玄海の水底に於て採らるゝものなるべし。最上乘の滑稽作者は多く

は是意氣快活、説話打諢自ら得たりとする人にあらず。之を國民に徴するに、必ず亦然るもの、如し。露國の文運大に進み、文學と稱するに足るの文學起つてより、超凡の滑稽作家輩出せり。就中ゴール。シチエドリン等の如きは天成の滑稽作家と稱すべく、各國の作家と手を携へ肩を駢ねて行くに足るものなり。

然れども露國の滑稽作家は其名國外に揚らず、ゴール傑作『死靈魂』『検査官』の二篇數年前英國に行はれしも、其名猶隆んなるに至らず。蓋し滑稽のものたる國民的性質を具し、其生地の特産として、他の地に移植し難く、之を他國の語に翻譯するに當り、原文の妙趣を逸し去りて、香橘を化

して凡積となすの患は、普通の小説に於けるより更に大なるものあれば、外國の讀者をして、興味を感ぜしむること自然に深からしむる能はず。然れどもゴールの作は、滑稽を一字一句の末に求めず、又對映の巧に求めず、一種の笑ふべき自然の性情を描き出して、巧に之を現するを以て、外國の士女亦能く其妙趣を解するを得、故に敢て稱して世界的のものとなさんも其不可を見ずといふべし。

ゴールの作『結婚』『狂人日記』二篇共に妙、以てゴールを窺ひ知るべし。『結婚』は娶らんと欲して、而も敢て娶る能はざるポドコロシヨンを主人公とし、男兒婦無かるべからずと主張して其友に娶らんことを慫慂するコチカリヨフを之に配し、

以て奇異なる話を成せるものなるが、主人公の優柔不斷なる、コチカリヨフが干渉を好める、兩者の性格躍々見るが如く、媒婆フェクラ、亦描き得て甚妙なり。蓋し露國の習俗、當時中流の民、嫁娶必ず父母の命ずる所に係り、歐俗所謂自由結婚なるものを許さず、一に媒人の周旋を須つ。寒村僻色の農家に在つては、戸々相識り人々相交るを以て、所謂自由結婚の制行はれざる々あらざるも、都會の中流の民習是の如きを以て、媒介周旋を業とするフェクラ婆の如きものあるに至る。ロストフスキー等また劇中に此類の人物を取りて好笑の材と爲せり。作者は自ら「結婚」に註して「信ずべからざるの事態」といふ、然も國人は衆口一齊「結婚」を目するに、ゴールの最も眞摯にして最も富麗なる佳什といふを以てす。十指の指すところ頗儂豈敢て嚴ならずといはんや。

ゴール耶蘇紀元千八百十年に生れ千八百五十二年死す、露國大小説家中に在つて最先の人たり。近來露國に於て寫實派の小説、劇曲を見るは實に端をゴールに發す。戯曲家としてゴールに次ぐものを、オストロフスキーとす、千八百二十四年に生れ、數年前に死す。露國演劇の盛を致せるは實に此人による。其著す所の院本、計三十七種、巧拙差ありと雖も皆場を上りて行はる。滑稽趣味の作を以て、鏝をゴールと並ぶるもの唯此人あり、「家庭活畫」制御すべからざる性癖」等、筆致躍動描寫神に入る。最も諷刺の筆に長ずるものをシチエドリン(サル

チコフ)とす。數年前鬼籍に入る。志大にして才英、徒に筆墨の間に遊びて恬々として自ら喜ぶものにあらず。一生數十年自由を唱道し民心を興起するを以て任となす、露國の政、圖書出版の檢閲苛嚴にして箱束緊密なれば、侃々の言語々の議、君子之を公にする能はず、是に於てシチエドリン筆を小説に托し、譬諭に托し、神異記に托し、荒唐譚に托し、以て時務を談じ、世俗を諷す。骨氣勁健、辭意峻峭、一世を罵倒し、万人を笑殺す。其著すどころ小説「ゴロヴレス記」等悲壯凄慘、構思に富み描寫に巧なる、我が邦人に知られたる夫の「罪と罰」の作者ドストエフスキーをして獨り雄を稱する能はざらしむ。滑稽の小品、國外の人に知られしもの「オキシキ、チエナベン回想録」「自滅鼠

見「マクレナスとしての鷲」等、皆悦ぶべからざるものにあらずと雖も畢竟作者が面目を傳ふるに足らず。蓋し其傑作、皆翻譯すべからず、天縱の才、奔放の氣、露語を用うることを七豎八横自由自在、到底他の國語に化する能はざらしむるものあればなり。人其妙を解せんと思せば、露語を學んで原文に就き、自家の齒牙を以て直に堂中の荔枝に臨まざるべからず。其他、ステパニヤツク。グレイブ、ウスベンスキー。ニコライ、ウスベンスキー。スレエ。プツオウ。ゴルフノウ等あり。然れども皆滑稽を辭句の末に弄して、趣味を言語の外に有せざるを以て、他國の語に翻譯すべからざるのみならず、文學上の價值亦ただ高からず。

陰鬱悲慘の作者ドストエフスキー亦滑稽の作なきに
あらず。鱈魚の一篇即ち是なり。才人の才、意の
到るところ、便ち妙境を現すといふべく、人鱈魚
の貴きを知つて人の貴きを知らざるの笑話を叙
す。理外の事、法外の譚、真に人の意表に出で最
も奇怪を極む。上乘のものにあらずと雖も、一讀の
値なしといふべからず。

露國の滑稽作家につきて概叙すれば上の如し、我
邦の小説喜劇等、何の時か眞の進歩を證して、眞
の滑稽の堂奥に入らん。



狂言作者の新陳代謝

舊派の狂言作者退き、福地櫻痴氏進みて歌舞伎座
の作者となり、其門弟子を率ゐて事に従ふといふ。
我等は立作者なる地位が新しき例の人によりて占
められたるを悦ぶ。願はくは他の座に於ても、判
任官より奏任官奏任官より勅任官に進ましむとい
ふ如き愚なる作者登用の習慣法を破りて、新空氣
を呼吸せる人才を作者部の上座に置かんこと
を。蓋し「作者たるべき資格」は才の有無に在りて

經驗の有無にあらず、經驗なくとも才ある士は主
たらしむべし、經驗ありとも才無きものは従たら
しむべし。若し農商務省の官吏は受付以上皆新に
すべしとならば、三都劇場の作者部は一より十迄
皆新にするを要す。舊派の作者等は一の黙阿彌あ
りしを立派なる「志にばな」として満足しつゝ自滅
すべきのみ。

青萍居士の歌論

數旬前、末松青萍氏、與謝野鐵幹氏が言に答ふる
に托して、平生の所見を洩し、大に和歌を論ぜし
が、今また卿内某氏に答ふるに托して餘憤を吐く。
其言、まゝ親切に過ぎて、あらずもがなに思はる
る節無きにあらずといへども、諄々として教へて
倦まざるところ、今日猶固陋の意見を執持せるも

のと、胸中一定の見無き者ごとを、啓發し訓導するところあるべし。我等は猶かゝる論議の繰り返し繰り返さるべき要あるを今日に認むるものなり。

小説家の眼

府下に自活研學會あり、仙臺に労働會あり、那須野が原に孤兒院あり、北海道に基督敎徒一團の淨生活をなすものあり、養育院に某氏あり、孤女院に某氏あり。小説家の眼は待合、藝妓、墮落學生の上にも注がるべし、然もまた上に列擧せる如き團若くは個人事情、等にも注がれざるべからず。近日の如く小説家好んで社會の暗面をのみ描かば、小説家は終に「源流ひ」と譚名呼ばれん。

批評家の眼

批評家の眼は新著の上にも注がるべからず、古書の上にもまた注がるべし。千萬人の熟知せる書を評すとも、其評にして前人未發の言あらば、實に新しき沸湯の勇ましき聲なるべく、今朝起りし問題を今夕評すとも、其評にして凡ならば、まことに家中の刀の錆とひとしかるべし。近日の如く批評家瑣細なる問題にのみ言をなさば、批評家は畢竟「井戸端唄」と譚名負はせられん。

注意

一 毎月一回十五日發行の事
一 本誌實價一冊金十五錢郵税二錢五部前至七十二錢五厘十部前金壹圓四十錢の事
一 郵券代用は一割増の事

一 御投稿は凡て東京市日本橋區通四丁目春陽堂編輯局宛の事
一 本誌に關する御照會は封筒に新小説用事と御書添可設下候事
明治三十年四月廿一日印刷發行
明治三十年四月廿五日再版發行

版權所有

編輯者 幸田 成行
發行者 和 田 篤 太郎
東京市日本橋區通四丁目五番地
十二番
印刷者 佐久間 衡治
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春 陽 堂
東京市京橋區元町寄屋町四丁目二番地
印刷所 杉原活版所

再版發賣

八大家 落合直文先生 大町桂月先生 佐々木信綱先生
合作 杉山先生 鹽井雨江先生 武島羽衣先生
正岡子規先生 與謝野鐵幹先生



クロス製寸珍美本
紙數四百頁
正價金參拾五錢
郵税を要せず

發兌 東京神田區通新石町 同文館 西關販賣 大阪市東區備後町 吉岡平助

全世界第一有効請合品
安眠清合獨産

八のみのみよけ

外部藥賣

● 本店にて年々發賣するのみよけ藥は最早全國諸君の能く御承知の通り功能は目前にして實に旅行其他に欠くべからざる良品なり
遠國より御注文は郵便切手代用二割増(二錢切手にて)見本に限り送料抽店持
東京市京橋區銀座三丁目四番地
松澤八右衛門
大阪屋號●電話本局五百三十四番
● 東京市下及び諸縣下の藥舖賣藥店其他諸々に賣捌所有之候間東京銀座丸八の登錄商標に御注意御求め願上候(にせものあり御注意あれ)請賣御好みの御方は本舖及大賣捌所へ御引合願度引は御相談致候

● 本年賣出しの品は三十年詰の封印紙有御注意
大罐 定價 金 廿 錢
小罐 定價 金 拾 錢
平罐 定價 金 五 錢

又々禮狀

貴下御秘法の黒燐赤子の乳房に懐つかざる等には實に奇妙の功能有之趣承り
 早速使用仕候處以御座年來の憂苦全く相免れ候段爰に厚く御禮申上候云々

北海道日高國浦河郡
 浦河 飯田 せい



相傳の黒燐赤子の乳房に懐つかざる等には實に奇妙の功能有之趣承り
 本製は千餘年來秘傳奈良郡屋敷家創也
 三府の美人達や新聞紙上に昂
 評判よき此洗粉は身軀の色を
 白くすると芋の皮をむく如く
 實にてきめんふしぎ也●定價
 十五錢卅錢五十錢別製一圓送
 料十里五錢百里八錢外十六錢

並五十錢別製保證一圓郵税八錢
 本製は千餘年來秘傳奈良郡屋敷家創也
 三府の美人達や新聞紙上に昂
 評判よき此洗粉は身軀の色を
 白くすると芋の皮をむく如く
 實にてきめんふしぎ也●定價
 十五錢卅錢五十錢別製一圓送
 料十里五錢百里八錢外十六錢

又々禮狀 前略貴店發賣の營養洗粉先使用候處不思議の功能
 爲替は銀座局接込
 切手代用は一割増

本舖 東京々橋大根 養禽園 東京々橋北紺 都屋出張店
 川岸十五番地 屋町十五番地

關西 大坂天満橋北詰西都屋分店
 發賣 京都綾小路鞍屋町都屋分店
 福岡縣筑後國山本郡 善導寺村 高樹 隣吉

春陽堂發行



小説むら竹
 全部廿卷合卷五冊
 大凡三千頁
 實價壹圓二十錢
 運賃廿錢

春のやまゝ著
 渡邊省亨著

實價金四枚様
 郵税金八錢

牧之方

春陽堂發行

「桐一葉」に脚本の處女作を試みて、梨園詞壇に一生面を開かんとせし消遙野内文學士が、更に鍊磨せる筆を揮ひて、北條時政が室牧の方を中心とし、慘憺たる鎌倉幕政史の數節を七幕拾餘場の新悲劇に綴り做せるもの、即ち此の「牧の方」なり、作家が如何さまに「吾妻鏡」を讀破して、如何なる詩材を得來たるか、乞ふらくは四方の雅客此の作について之れを味ひたまへ、卷中挿む所の細畫都合六葉、畫家は永洗年方華郵省亨兼窓桂舟の諸子にして、其のうち五葉は本文の足らざるを補うてさながら名優の活動するが如し、おのゝ畫家を殊にし、方今の浮世繪名匠六家の筆に成れり、六家六様の筆、錦上花を添ふるは是れ、就中日繪精彩極彩色牧の方實朝と刺さんとす
 圖は、渡邊省亨畫伯が苦心經營の彩筆、意匠嶄新、或は我が小説脚本の口繪に一新紀元を成すに足らんか、